文部文美

菊白洞東

美文
韵文

黄菊 白菊

序

名山に藏するに足るべき名著にはあらねど、むなしく蠹魚の餌とならむも、さすがに口惜しくて、羽衣、雨江二子と共に、美文韻文をあつめて、花紅葉一部を梓に上しゝは、已に二年のむかしとなりぬ。爾來、われは筆を把ることと虛日なけれど、自から好める美文、もしくは韻文の作は、いと少なし。讀者またその何の故たるを問ふこと莫れ、こゝに、花紅葉に洩れたるものと、そのゝち新に作りたるものとを集めて、

黄菊白菊と名づけぬ。多くは已に册子、もしくは雜誌に出でたるものなり。而して、この三四年の間、余がものしたる美文韻文は、花紅葉と黄菊白菊とに盡く。國家の盛衰と死との二篇は、やゝ美文の範圍を脱せるが如くなれども、もとたゞ感情を據べたるものにて、理を說きたるものにあらねば、美文としてこゝに收めたるなり。

明治三十一年十月

桂月漁郎

黄菊白菊目次

	頁數
照る日の光	一
○鐵槌	四
○月譜	二五
波の花	三二
加藤清正の告別	四七
○佛濱の月夜	五三
夢野の鹿	六九
地藏堂	七九
わが涙	八七
○畫ける美人	八九

胡蝶……九四
○御嶽めぐり……九八
山の影……一一八
いさゝ川……一一九
花ざくら……一二〇
やつれし姿……一二一
○猿塚……一二七
松杉問答……一四八
雖陽城……一五一
女ごゝろ……一六九
柳の糸……一七一

かたみの言葉……一七二
○國家の盛衰……一七八
をとめ子……一九一
涙の味……一九四
かさ袖……一九五
今日限りの命……二四一
春の夕暮……二四六
○死……二四八
賣車……二六〇
淺間山のひと夜……二七二
海嘯……二八八

春駒……二九六
雨奇錄……二九八
今宵の情……三〇九
小春日和……三一〇
旗手……三六五
南朝の名花……三七一
風流鴨……三八二

黄菊白菊

大町桂月作

照る日の光

てる日の光　さきだてゝ、
あさはみ空に　さけぶらく、
眠をさませ　朝風に。
起きよ、浮世の　いとなみに。
昨日は水と　逝きにけり。

霞をよもに　くばらせて
春はみ空に　聲すらく、

たのめ來らむ　今日の日を。

芽ざす草木と　もろともに、
世にのびいでよ　いさましく。
こずは空しき　夢のあと、
たのめ來らむ　この春を。

病の床に
かとづれて、
神はしづかに　つげいらく、
泣くなすぎにし　罪とがに。
土にかへせよ　そのむくろ。

浮世はかりの　かさやどり。
たのめ來らむ　後の世を。

鐵槌

ひと夏ふりつゞきし雨ふしぎにも小止みしたれど、なほ泣くが如く曇れる大空の、わづかばかりなる隙間をもとめて洩れくる旭日のひかり、おぼつかなげに金雞山の一角を射て、妙義山のこなたは狹霧なほふかく立ちこめたる曉しづかに、金雞左に高く天をつらぬき、妙義右に北斗を支ふる間の、名も中の岳とて鼎立の勢いさましく、雲をとびらに代へたる四個の石門ふかく浮世をへだてたる處なれども、なほ民のなげきを分てるにや、削り成せる巉壁の下にやせて見る影もなく、戀する少女の涙よりも清き露の白玉ひときは滋くおきわたせる山百合の花ふみわけて、石門を出づる一

人の男の、大模樣染めいだせる單衣一枚の姿もかるやかに、襟元くつろげて、胸毛こいろよく朝風にゆらぐさま、見るからに逞しく、頬は赤く、眼は鋭く、一癖あるべき面魂のたゞならぬに、博浪沙の昔のしのばるゝ大なる鐵槌ひとつ腰につけたるも怪しや。

第一の石門より村に出づるには險しき處なくたゞ足先仰くばかりの凸凹につれて、うね〳〵と熊笹の繁れる中を蛇行する一條の細徑一里餘り歩みてはや妙義山のふもとに來れば、眼界とみにひらけて、手に取る如く見ゆる脚下の村々、今はあさげの時なれど、飢饉のかなしさは炊烟の上れる家とてはなく、鴉だに鳴かぬ山村の曉寂しく、月頃の陰雨に、

山氣、刃よりも冷かに肌にしみて、時は夏ながら浙々として、なほ寒く、高根よりおろす風に、梢うちふるひてはらはらと、こぼるゝ名殘の露滋くして浮世につゆけからぬ隈もなし。

田の面には穂だに結ばぬ稻枯れて、半は水に沒し、畑に植ゑたる瓜は蔓腐りて、根ながら萎めり。路のかたへに犬のいたく吠ゆるを何事にかと立ちよれば、あはれや、餓に倒れたる人の屍骸を、天の與へとよろこび勇みて、これも餓に死なんとする痩犬のよりてたかりて牙ならして嚙み食ふさまゝすさまじく、その中に力すぐれたりと見ゆる大犬、他の群犬をおしのけて、われ獨り腹を肥さむとする勢の鋭きに辟易して尾をまきながら、なほ涎を流して近寄るをきつと睨みかへして聲高く呻りつゝこゝろよげに飽食するさまのにくらしければ、おのれといひさま、下駄はきたるまゝの足あげて、その横腹したゝかに蹴たるに、悲鳴の聲長く尾と共に曳きて、二三間にげのびけるがまたふりむきて牙をむきたし、

脊中の毛をさかだてゝ飛びかゝらむとする餘勇は示せど、さすがに敵手の強過ぎるを悟りてしばし思案の末、俄かに横腹の痛さを思ひ出したるが如くまたも悲鳴の聲をあげて殘りをしげなる一瞥を、屍骸の上に送りたるまゝ、悄々としてにげゆくあとより、側杖くはぬうちにと言ひはしたるが如く、罪なき他の犬までもうちつれて走り去るを冷かに見送りつゝ、巨巖のゆるぎ出したるが如き足元たしかに、

のそり〳〵と歩む行手に、五六人の小供、よろ〳〵と這ひ出でゝ、その旦那さまどうぞお慈悲に、難義の者へ、一文めぐんでやつて下さりませと、貧が敎へたる物乞ひの言葉しほらしく、餓に聲まで痩せはそりたるも、大飢饉のあまりと、そゝろに涙を催し、財布より鳥目とり出して、それ〳〵小供に分ち與へ、その喜べる顔を見て、小供衆、少し頼みがある。家へ還つて、親ぢなり、兄なりに、用事があるから、こゝへ來いと云うて呉れよ。頼んだぞと、聲やさしく言へば、さすがに餓ゑても小供は小供だけに威勢よく、一人が駈け出せば、他のものもついいて駈け出すはづみに、一人の小供つまづきて倒れて、わつと泣き出す。男、走りよりて抱き起せば、その顔を見て身

をふるはして泣く。ふれの顔はなこはさうに見えても、何も取つてくはうとは云はぬ。泣くなくな、男の兒だとすかす手元より拔け出でゝ、他に遲れじと、又もかけ出しぬ。

水呑百姓の腰も輕く、鉢卷片手に、幾たびか頭をさげて、へい〳〵さきほどは、小供のものへ大枚のお金下され、難有う存じまする。へい〳〵ことしの大飢饉にはよわりはてました。わたくしの所では幸にみな生きて居りまするが、となりの隱居どのは、くたばつてゑまひ、そのまたとなりでは、くふに食ひかねて、夫婦別かれをして、やつと乳離れをしたばかりの男の子が毎日泣いて居るといふやふな始末で、この界隈はどこも目があてられず、それにお上からのお施しといふ

ものは、ひとつもなく、われらは何時うゑて死ぬるやら、まことに心細うございまするとうゑてものんきな癖はうせず、長たらしく饒舌りつゞくる處へ、一人來り二人來り、つゞいてまた四五人、さきの小供の親たちの外に、何事の起りしかと、ものすきに出かけしものありて、集れるもの都合十五六人に及べり。

恨を帶びたる目元に、一揆の旗あげかねまじき樣子は見ゆれど、餓にやせはそりし腕にはもはや竹槍提ぐる力もなく、骨と皮とのみなるからだに、衣とは名ばかりなるぼろをまとひ、藍よりも青き顏、つもれる垢に古色を帶びてさながら木像の如く、喉はやせて張子の虎の頸よりも細く、亂髪に大

さを加へたる頭を支ふるもおぼつかなげなるに、この世がらなる餓鬼道の苦みを見る心地のみせられて、慰めむとする聲も自ら沈み、これはみなの衆、御苦勞に存ずる。就ては拙者の所存、ひと通りお聞き下され。拙者もとより此地に緣もゆかりもござらねど、この夏以來の長雨に、日の目一度も拜むだことなく、稻も麥も野菜もくさりはてゝ、こゝもかしこも飢饉と聞くが中に、わけて妙義山下一帶の土地は、目もあてられずとの噂にたがはず、まことに何とも申樣のなき有樣、これまでの御難義、重々御察し申す。さりながら、狹いやうでも廣きは世の中、一方には金錢つき、食物つきて、餓死する人があつても、一方には、米を山ほど倉に積むて、小判のもち

ぐさりする人もあり。運は廻りもの、融通はどうにもつかうほとに、浮世はまだ失望したものでもござらぬ。拙者はからず茲へまいりましたからは、及ばずながら一肩入れてみませう。さるにても憎きは、浮世の有福長者、にこ〳〵と笑ふ中にも、金の勘定、腹には絶えず、欲より凝りかたまつた躰に、血といふものはなく、目尻さげて涎たらすことはあれど、涙をこぼしたるためしなく、人情はお人よしのもつもの、義理は馬鹿正直者のすること、人を倒してもおのれの利徳をはかるが當世とすましこみて、恥も知らねば道理もわからず、とりけだものに劣りたる根性も、平生ならば、大目に見てやれど、この大饑饉に餓死する人を、よそに見てとりあはず、おの

れひとり旨い物くうて、人らしい顔して居るのが、氣にくはぬ。學者、お師匠さまなどが、やれ仁義だの、子のたまはくだのと、口を酸くして說いた處で、汚れた人の耳には、蚊がひとつぶんといふほどのきゝめも見えず、ふる板にくぎはきかず、腐れた世の中には荒療治も時にとつての方便、これから出かけて、あら膽ひしいでやらうぞとて亂暴するわけではない。道理をとき聞かして應分の金錢米穀をださせるまでのこと、もし口で說いて、まだわからねば、その時は、腰の鐵槍で說きつけるぞ。まづこのあたりにて、金もち物もちと聞えたるは、誰々にか、敎へてくだされと云へは、第一に、みつくちとは片輪をそのまゝのあさな、本名重左衛門と申しては、知ら

ぬ人もなき物もち、田が千町、山が五百町、米倉が三つ、金倉が二つ、その上に金貸しで、欲張りで、意地わるでそのために、われらは飢饉でなくとも、常に難義して居りまするとて、衆口一齊にまづ金貸の名をあぐるも可笑し。その次は兵衛、その次は權八郎、またその次は木村長右衛門、これはこゝの名主、先祖よりの由緒ふるきは、門の大榎にも、それと知れて、金はくさるほどありまする。さてまた町人では、近藤屋、桔梗屋、酒屋の善太郎などゝ一々告ぐるを聞きて、もうわかりました。金は天下の通用物はて盗むといふではなし。説いて寄附させるに何も暗い處はござらぬ。どりやこの長い日の睡氣ざましに、ひと働きやつて、なゝつ下りまでには歸つてくる。そ

して寄附させたものは、齊しくわけうほどに、それまでに、その近郷にて饑饉になやむ人達が集つてくるやうに、手分けして吹聽しては下さらぬか、頼みますと、飽くまでもたかぶらぬ言葉に心の誠も見えて、世にたのもしう聞ゆるに、一同感涙を流して雀躍し、かかげ樣でわれらの命がたすかりまする。ありがたや、かたじけなや、吹聽に手抜かりはいたしませぬ。どうぞよろしう願ひますとて、村人どもはしばし語りあひしが、やがて五六人、男の前にいで來り、吹聽するには大勢の人もいりませぬば、われらは御案内仕りまするとて、さきに立ちてゆくに、男さらばと一禮していでたちぬ。その後影伏し拜みつゝ、ひとまづ家へとて、歸りゆく中にも

尤も年よりたる源右衛門ことし六十七歳、頭は禿げても元氣は若者にゆづらず、嫁のやうな嚊もつて去年女の子を生むだといふ評判男、さすがに老の涙もろく、生き神樣といはうか、生き佛といはうか、ぶりあなんだか夢のやうな心地がして、うれしうて〳〵、かなしうなつて來たと、玄あくりあげて泣き出せば、これが世にいふ棄つる神あれば、拾ふ神樣、われらの運がむいてきた、こんな目出度い時に涙は不吉。さてひとつ相談だが、ふれて廻はるに、太鼓でもたゝいてゆく方が、便利で、にぎやかで、おまけに面白い。さいはひ村の虫送りの大鼓が、貴樣の處に預けてある筈、それを持ちだして貰はうではないか。いや大鼓はあるにはあるが、雨がもつて、皮が

びゑよぬれに濡れて、たゝいた處が、虻が呻るほどの音もでまい。それよりは、席を物干竿のはしにつけたらどうだ。それはよくあるやつだが、何しろ、この痩腕に席では重過ぎる。あれ、あそこの物干竿にかけてある赤い巾は、お内儀のゆもじか、そのそばの白いのが貴樣の犢鼻褌、そこで源平かけもちの旗とは何と面白い洒落ではないか、それもよからうと、あるじが許す聲の下より、いまゝでは何をしてをりしやら、帶紐も結ばぬ衣を手にてれさへ、脛もあらはに駈け出す女房、日頃は饑に青くなりしお多福面も、いざとなれば紅褌より も赤く、それだけは御免とさしだす手を抑へ、旗にされたら、ふ内儀までも名譽といふもの、何の虱が五六匹居た處が、れ

互ひ同然、耻ではござらぬ。なに、ほしたばかりで、まだ洗はぬとな、それでもかまはぬ。見れば黄いやうな玄みがついて居て、處々穴があいて居て、あまり惜しい代物でもあるまい。かまうことはない。暫時借用する。その代りに紅絹の巾を買うて返すと、うれしさのあまり、玄やうだんたら〳〵、幾んど氣違ひのやうに狂ひ躍るやらはねるやら、どや〳〵と騒きて繰り出せり。

紅白の旗は、村より村にとびぬ。施しがあるといふ聲は耳より耳につたはりぬ。饑饉によわりはてし村々も俄に生氣づきぬ。太郎もこい、次郎も來い、れ施しにあづかつて、ついでに生神様のお顔も拜んで來いと、呼びつれて、くりだす男女、ひ

きもきらず。夕日金雞山の頂に春く頃には、妙義山の麓は、さながら人の山をきづきぬ。

今か〳〵と待つほどに、歸りくる一隊、はや鎮守の森のかなたに見えそめぬ。雪の上をころがす小石の見る〳〵大くなるが如く、さきの五六人の案内者に、招かずして加はれる村人ふびたゞしく、車につみ、馬にのせ、長者の家來に玄よはせたる金錢、米穀、さては酒樽纍々として相連りて、小山のゆるぎいだせるごとく、むかしは八十舟の櫂ほさずもて來し三韓の貢物も、これには過ぎじと見ゆるばかりなり。

山もくづるゝばかり涌きたつ歡呼の聲に迎へられて、玄づかに、村々のれもだちたる人々をよびよせ、饑饉のさま見る

に見かねて、有徳の家々を說いて迴つて、この通り寄附させたる次第、ひと通り御話し申しまする。この村の重左衛門どのとやら、高利をむさぼりてよくない人と、まづ第一に出掛けて說いて見たが、中々の口上手、うまく言ひぬけて、鐚一文も出す氣はなく、一筋繩ではゆかぬやつと見て取り、躍りかゝつて、胸倉とつてたゝみに押しつけ、腰なる鐵槌とりあげて、命がをしいか、金が惜しいか、命をしければ金を出せと、威せば、金は御望み次第出します、一命だけは助けてと、虫のやうなる聲だしてあやまるも可笑しく、思ふ存分、金をださせて、次に久兵衛どのゝ家に出掛けて見れば、戸をしめ、門をとぢて、前以ての用心、小憎らしく、鐵槌のつかひ所はこゝなり。

と、一息に門の扉をうちくだき、饑饉のために、紅倉の金を所望にまゐつた。故障があらば申しいでられよと云へど、ぎうの音もださず、さらば御免と、倉の戸をくだけば、小判の中に潜みし主人、こはぐゝに這ひいでゝどうず半分だけは殘して下されと、泣音を出すに、氣の毒になりて、半分で許してやり、それから名主どのゝ處へゆけば、劔客をよびよせて、刄物をもつての手向ひ、小癪なりと、みなたゝきつけて、倉のものさらげだし、なほ說いて廻はる中に、氣のきゝたるはかなはぬと悟りて自ら金錢米穀をもちだして待つに、少し取りて許してやり、あさはかなるは御馳走ならべ、奇麗な女に酌させて言葉巧にかこちごと、ぬかすに腹が立ちて、多く取り、あ

りとある金持ちに寄附させて取つて來たこの品々、天道は還るを好むとやら、人民の膏血を絞つて取つたものを、またその人民にかへすに何も不思議はあるまい。拙者がもつて來たと思ふと大きな間違、これは全く天道様がくださるのだ。さあ〳〵等分して恨みつこのないやうに、取つた〳〵と、それ〳〵手配りしてわかち與へければ、小判を兩方の袂と懐とに一杯入れてなほ欲張りて兩手に握るもあり、餓えたるあまりに米をなまのまゝのみこむもあり、金よりも米よりもれはまづ天の美祿と樽のかゞみくだきて、口つけて鯨飲するもありて、喜びいさみ、躍りくるひ、さわぎたつ、有様はたゞ神代のむかし天照大神の天の岩戸を出でたまひし時、八百萬の神たちのゐらぎ笑ひしも、かくかと思はるゝばかりなり。

男、このさまを見て腹をよりて笑ひ出し、これで拙者の氣もすんだ。世の中には、法度とか、おきてとかいふ小むつかしいものがあつて、うか〳〵して居れは、安中の城あたりから捕手がむかうて來う。もとより惜しい命ではなけれど、まだ浮世にすることが澤山あれば、このからだは小役人などの手にはわたされぬ。さらばといふより早く身を躍らして、妙義山の奥にかけゆくに、一同たゞ茫然として、さわぎし聲も俄にしづまり、覺えず手を合して、その後影を拜みぬ。

朝に得たる萬金夕に散じつくして、わが身に殘れるものと

ては、もとの鐵槌ひとつ、身をかはすこと飛鳥よりも輕く瓢然として立ち去れば、夕の白雲心ありげにその跡を埋めつくしぬ。仰げば高き石門の上、久しぶりの晴天に、磨き出されたる涼月の影さやかなり。

月譜

月の名所は桂濱といへる郷里のうた、唯記憶に存ずるのみにて、幼少の時より他郷に流寓して、未だ郷にかへりたることなければ、まことはその桂濱の月見しことなけれど、名たゝる海南絶勝の地の、危礁乱立する濱邊によりては碎くる浪の花しろく、九十九灣縹渺として烟にくるゝ夕、雲をはらひはてし秋風を濱松の梢にのこして、長鯨潮を吹く浪路の末に、一輪の明月あらひ出されたらむは、如何に心ゆくへきかぎりぞや。

鎮守のまつりのかへるさ、丁字路上に、他のみちつれと袂を

わかちて、家路はるけき野中の路の夜ふけてさびしきに、齢同しばかりなるとなりの小娘とふたりつれたつ影法師もあきらかに仰けば白露空に横はりて明月高くかゝれるに、心も自からすみて、笑ひあひつゝ行く路すがら、かたみにうつれる影の頭ふまむと爭ひて、あとになり、先きになりしが、はてはわれ常にさきになりて娘の頭ふみけれはばらたて、共に家へは歸らじとすねたる折しも、むら雲とみに月を呑みて、あたりは闇となりけるに、れそろしやと寄りそひて、覺えず抱きあひてゞ泣きし。

俗氣なき人と碁をかこみて、黄昏に至りて、碁の目見にわかねば、しばし子を下す手をとゞめて、浮世の外のことかたら

ふほとに、眉目いつしか明らかになれるに、顧みれは、梅か枝まるまどにうつりて、さなから一幅の墨畫の如し。窓をひらけは月は老梅の梢に在り。暗香人を掠めて、春色澹としてからむとす。風笛あらばと思ふ折しも、それしやのはてが姿をかへて住へるとなりの家になまめきたる聲して、彈く三味線の調子のいたういやしきに、興味とみにさめはてたるも口惜し。

可愛らしき小兒をいだく手も清くほそやかにして、力なげなる年若き女の、お月さまいくつ、十三なゝつなど、小聲にうたふにつれて、かたごとにのいさまゝと言ひつゞけしが、はてはつかれて、やわらかき手、母の胸にあてゝ、ちゝ〳〵と

ねだれは、月に白き豐胸露はし、乳房ふくませて、いきうつしと、覺にずつぶやきたる聲低く、眼もはなたでみとれたる足元に、竹影娑婆として、孤月むなしく、長風の上にすみてつれなし。

老櫻月を帶ひて、霞の奥ふかき十二の欄干に、ぬりつくせる一人の少女の、鬢のほつれ毛を春風になぶらせて、はらはむとも、せず、裂きたる玉章手にもちて、くれなゐの袖、やさしき口にかみしめたるまゝ、何を怨むか、續々として欄干の上に墮す涙の、月にかゞやきて、さながら眞珠を散らすが如くなるに、よそめもいとゞ消えたき思すべし。

ひねもす清溪に釣する翁の、家にまつ人もなければにや、日

くるゝも、なほ枯木の如く磯に腰かけて、垂るゝ綸のはしにいつしか一痕の月かゝるよと見るほどに、やがて手答へしければ、ひき上ぐる竿の彎々たるにかゝり來れる一尾の香魚の潑剌たるを捉へて、かごに入れて、今日はこれまでなりと、鼻歌たかくうたひて歸りゆきしあと、溪水舊に依りて、空しく月を碎いて流るゝいとすがゝし。

ひとりにはひろき蚊帳の中、白くほのみえて、あふぐ團扇の音とゝもにえならぬ香洩れて、椽には焚きさしの蚊遣火なほいきて殘れる夏の短夜に、またぬ月影、はや松の枝にかたむきそめて、さやけき光を、ねやの中まで送れるは、いかなる浮世の外の情ぞや。

薄に置ける白露をかしくと讀みしゆふべ、夜に入りて暗きをたよりに跫音しのばせてたどる行手の黒き影にさゞやまちわびてと近寄るほどに、雲破れて洩るゝ月の下さびしげに立てる石地藏の前に、あきれ顔なる賤の女の、さすが手拭に顔のなかばゝ包みてしどけなきもすその脛もあらはに血のにじみたる跡あるは、人目をしのぶ路の、いばらなどにきずつけられしにやとあはれなり。

千里雲へだゝりて明月むなしく兩地の情を照らす秋の夕、むかしは共にこの月に泣きたる事もありしと、そゞろにうらがなしく、年の十とせ、滿身の血の半は詩に灑ぎ、半は戀に灑ぎて、思ひ絶えなむとする今宵、月に向ひて腸をたつ我身

の影さびしくたゝみの上に纍々として細し。

兩毛の間に遊びて、妙義山を下りしとき、もてる錢悉くつきて、今は食を得るに由なく、飢をしのびて、昨夜は稲田のあぜに眠り、今宵は路はたの材木の上に眠らむとせしに、蚊多くして眠られず、よろめく足を蹈みしめて、あゆむ行手にひろき瓜田あり。金銀財寶とは異りて、天地のつくりなせるものをしばらくかりて我飢を醫せんにはと、心むら〳〵と亂れて、あはやわれ履を瓜田に入れむとせし刹那、我影のあまりに明かなるに、仰げば隈なき一輪の月魂、天つ御神のにらみたまふかと思はれて、そゞろに身の毛よだち、穴あらばとばかりに身をちゞめて、月を拜みでゞ泣きし。

浪の花

淡路しまやま　秋ふけて
ちるや尾上の　もみぢ葉を
ふみわけつゝも　妻戀ふる
鹿のなく音も　あはれなり。

八重の潮路を　ふきすさび
身にしみわたる　木枯しの
こずゑをはらふ　音すごく
はまの眞砂も　むせぶなり。

さらでも荒き　うな原の
すさぶ嵐に　わきたちて、
あられと亂れ　雪とちり、
烟となりて　のぼりつゝ、
よりては返り　かへりては、
また寄りくる　わだつみの
波は何をか　もとむらむ、
みるめだになき　あら磯に。

みけしの袖を　ふりはへて
狩にたゝせる　大君の、

かましの前に　ぬかつきて
うやまひまつる　島人の、
心のさまに　ひきかへて
波はあらくも　なりまさる。

「やよやたわやめ　近うよれ。
なれを呼びしは　外ならず。
たび都を　たちいでゝ、
とるや梓の　たつか弓。
ひるはひねもす　駒なめて、
野くれ山くれ　狩りにしを、

毛のあらものも　におものも
尾上によばふ　聲はして。
手にはとられぬ　月のうちの
桂のごとく　れもはにて、
日數もあまた　經にけれど、
絶にてなかりき、　山のさち。

「いといぶかしく　思ふまゝ、
うらべを呼びて　うらへさす、
久しき世より　この島に
いませる神の　御心を。

『ひごろ山さち　なかりしは
　みなわがたゝる　わざになむ。
そをさけまくも　れもはせば、
　さぐらせたまへ、　みな底を。
音に聞にし　この海の
　そこにあはびの　貝ぞある。
かひの中なる　ましら玉
　とりてそなへよ、　みてぐらに。
わが心だに　なぎぬれば、
　れもはすまゝぞ、　山さちは。』

神のをしへは　ありたれど、
　そこひも知らぬ　わだつみの
荒れたる浪を　かきわけて
　かづかむ者も　なかりしを、
『男狭磯の妻なる　少々等少女
　かづくわざにぞ　すぐれしと、』
島人どもの　いふなべに、
　なれをばこゝに　呼びにたり。
「けふのいく日の　みいつきに、
　さゝげまつらむ　ましら玉。

そのまましら玉とりてこよ、
日影のたかく　さゝぬまに。」

「かしこまりぬ」と　いらへつゝ、
君の御前を　しりぞきて、
ぬくや一重の麻のきぬ、
玉をのべたる　やわはだも
あはれ嵐に　冷に入りて、
顔さへあをく　粟だてり。
あやにかしこき　大君の。

みことは重く　身は輕く、
ひるかへす　よと　見るほどに、
姿は浪に　消えゐけり。

いよ〳〵つよく　吹く風に、
沖のしら浪　しきたちて、
あられとみだれ　雪とちり、
烟となりて　のぼりつゝ、
よりては返り　かへりては
また濱邊に　うちよりて、
いはほに咲くや　浪の花、

空をとよもす　もの音は、」
もゝいかづちの　ひと時に
落つるがごとく　覺ゆなり。

いそべにつどふ　島人の
老も若きも　れしなべて、
「少々等少女よ、さきくあれ。」
聲さへ浪に　消え入りぬ。

かたみに顔を　見合せて
心もとなく　待つほどに、

さかまく浪を　かきわけて
浮びあがりぬ、たわやめは。

「千尋にあまる　わだつみの
底にあはびは　ありたれど、
いとゞれほきく　また重く、
いふがひもなき　をんな子の
よわきかひなを　いかにせむ。
許させたまへ」と　ふし沈む。

「神のとめさす　ましら玉

いかでか海に　のこすべき。
よしや重くは　ありとても、
いざとりてこよ、そのあはび
なはいなみなば　まのあたり
打ちもはたさひ、汝が夫を。」

「君のみことの　かしこさに、
數にも足らぬ　賤が身は、
よしや藻屑と　なりぬとも
つまの命は　すくはゞや。

「さらば」とばかり　いらへつゝ、
をつとをひと目　かへりみて。
またもかづきて　沈みけり、
さかまく浪の　底ふかく。

風はいよ〳〵　吹きしきり、
波はいよ〳〵　あれゆきて、
空にしきたつ　しぶきむり、
よりてはかへり　返りては、
またもよりくる　白浪の
雪とくだくる　磯山に、

かしらをなめて　くらをかみ
たけり狂ふが　でとくなり。

磯邊につどふ　島人の
老も若きも　もろともに、
「少々等少女よ、　さきくあれ。」
さけび呼はる　聲のうちに、
山より高き　大浪の
勢つよく　うちよせて
眞砂の上に　あげにたり、
あはび抱ける　たをやめを

息もかよはず　なりたれど、
あたり見まはす　眼ばかり　うちひらき、
浪をあざむく　かんばせは、
「わが脊の君よ　さきくあれ。」
唯ひと言を　名殘りにて、
またもひきゆく　大浪に
聲もろともに　消えにけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

君のとめさせ　たまひたる
　珠はあげいり、くがの上に。
世にうるはしき　たわやめの、
　にほへる花の　身にかへて。

加藤清正の告別

八道の山よ　いざさらば、
　年のないとせ　戈とりて、
踏みあらしたる　日の本の
　ものいふは　今歸るなり。

釜山の浦の　秋ふけて
　空もしぐるゝ　夕暮に
波路はるかに　帆をあげて、
　汝れとは　永く別るなり。

うらみも深き　ありなれの
川のながれと　もろともに、
望は逝きぬ、いざさらば、
八道の山よ、ついがなく。
知遇の恩に　身をすてゝ
四百餘州を　わが駒の
ひづめに蹴むと　いさみしも、
さめて果敢なき　夢なれや。
我を知りにし　大閤の
世になき後は、たが爲めに、

千里の外に戈とりて、
異境の山に　いくさせむ。
耻をしのびて　ふるさとに
歸るものちに　死なむため。
主君の家の　ゆく末を
思へば重き　命なり。
あはれ大閤　世をさりて、
よつぎの主は　いとけなし、
石田小西の　小人ばら
かならず事を　わやまらむ。

狐に似たる　家康の
いかでかたゞに　もだすべき。
やがて六尺の　わがからだ
すてゝ甲斐ある　時は來む。

わが幼時より　はぐゝまれ
めくみをあびし　豐臣の
家をまもりて　死なむ身の
ながくは住まじ、　世の中に。

跡にみすつる　ものゝふの

亡き魂もしも　知るあらば、
三途の川や　六道の
辻にしばらく　我を待て。

これを限りの　見納めに
今ひとたびと　見かへれば、
波音すごく　雨あれて
野山は霧に　れぼろなり。

八道の山よ、　いざさらば、
國のほまれと　たゝかひて、

花とちりにし　日の本の
男の子の骨を　守れよや。

佛濱の月夜

月は海邊こそよけれ。房州白須賀の濱べにゆきくれて、松が根をまくらに、魂磯うつ大濤の音にさそひさられて、しばしまどろむかとすれば、わが顔の上を横行する蟹のあゆみに驚かされてうついにかへれば、寢待月、浪路の末にあらひいだされて、万里の浮光黄金を躍らすに、心もそらに、夜もすがら露にたちつくして、月に嘯きしたのしさ、今にわすれがたく、こともし九月十一日、舊暦の八月望日にあたりたれば、こよひの満月、せめて海邊にとて、犬吠崎のあたりさして都をいでぬ。

本所より千葉、佐倉などを經て、松岸にて汽車をくだり銚子の市街をすぎて、その町はづれなる川口神社の丘にのぼる。こゝは大利根の海にそゝぐ處なり。川の幅いとひろく對岸には、寸馬ゆき、豆人來る。左に銚子の瓦鱗を見わたし、右に鹿島の荒灘をのぞむ。白帆遠く風をはらみ、櫓聲ちかく咿軋として聞ゆ。こゝにいつかれたるは、延命姫とて、容貌いとみにくかりしが、ひとたび安倍晴明をかいま見て、心のやるかたなく、遂に妹背のちぎりをむすびたれど、男、その醜をいとひて、ひそかに家をいで、小濱村の濱に靴ぬぎすてゝ、あたりの寺にかくれけるに、女跡を追ひて、そこに至り、その靴を見て、すでに死せりと思ひ、おのれも海に身をなげて、底の藻屑と

うせにけるを、里人あはれみて、茲にいつきまつれるなりと言ひつたへたる、その女の名までかの木華咲耶姫の姉姫の故事に附會したるものとおぼゆれど、全くの虚構にはあらざるべく、やさしき古の女ごゝろも汲まるべくや。

祠のうしろより高原をよこぎりて黒生濱にくだり、磯づたひに君が濱を經て、犬吠崎にのぼり、地藏坂を下りて、佛濱にいたれば、日は早や西に沈みぬ。こゝに海水浴の旅館ふたつあり。曉雞館と云ひ、水明樓と云ふ。犬吠崎を左にし、長崎がはなを右にせる一曲の海濱の、長さ十町ばかりの間、旅館より外には家なく、後は小松の生へつゞきたる高阜を負ひ、前は直に俯して海波に枕み、自から別天地をなせり。水明樓に投

ず。

浴後、杯を呼び、坐して海上を見わたすに、万里渺として雲なく、暮色漸やく波聲を罩めたれど、日は未だ全く暮れず、犬吠崎の燈臺も未だ點火せざれば月のいづるには、なほ程あらむとて、眼を座に移しゝが、ふと東の方を見れば、團々たる明月、いつしか海をはなれたり。はなるゝこと數尺、未だ光線をはなたず。海は碧に、空は青し。水天蒼茫の際、月ひとり紅玉を懸く。馮夷たはむれに、珠を簸弄するかと疑はる。月やうやく上りて、やうやく小となり、一條の金蛇、今や波上を走る。愈のぼりて、金蛇大となり、波光とぼく月にかゞやきて、万里金粉をちらし、沖に釣する漁舟、四つ五つさやかに見ゆ。白帆の影、

金波のなかに入りて、忽ち見えずなりてまた消ゆ。月、天に冲するに及びて、金波今は際なく、白帆また隱るゝ所なし。白色の燈臺も全く夜色の中に沒し、臺上の火光、廻轉して西に明かに東に消ゆるは、月光と相鬪ひて、その光をうしなへるなり。滿潮の刻はすぎたれど、濤はなほ磯にたかく、天外より潮氣を吹き送る天風に應じて、軒近き岸の姫松、謖々の音を發すれど、さすがに枝上幾白顆の月影をこぼさず。濤にまぎれざる松虫、鈴虫、蟋蟀の聲々、殊に秋氣をそへてひやゝかなり。われ獨り柱に靠りて、且つ飲み、且つながむるほどに、一瓶の酒かたむけつくして、また餘瀝なく、興味醉と共に加はり、神氣鬱勃として、獨坐するに堪へず。起ちて海邊にくだる。

巖礁散布せる濱べに、濤と路をあらそひ、犬吠崎を後にして、飄然として歩す。明月わが醉顔をてらし、天風わが袂をひるがへす。右は松丘自然の屏障を作り、左は大洋渺茫としてその際を知らず。水陸の間、たゞ我身ひとつを點ぜり。かへりみれば、旅館、月影に縹緲として、樓上の燈光、星よりも痩せ、四邊人なく、物なく、天地の間、たゞ波濤の聲を聞く。われ浪にむかひて、默然として立てば、浪はわが足をかすめて、われを誘ひさらむとするものゝごとし。凝立して諦視するほどに、わが胸中万斛の愁は自から消え、万念うせ、魂魄とろけて、身体も我物ならぬ如く覺え、知らず〳〵浪に從ひて、進まむとすれば、山をくづして寄せくる大浪に、足は自から退きぬ。さては

夢現の間にさまよひしかと、われにかへりて踵をかへさむとすれば、月下に物あり。霜をあざむくばかりなる砂の上に輾轉す。よく見れば、一匹の小犬のいづくよりか來りけむ、われをなつかしがりて仰臥しながら四足を空に攢め、月に白き齒を露はして、呻るともなく、吠ゆるともなき聲を發するさまのやさしきに、手にてその額をなづれば、ひときは憘しげなる聲して、いたからぬまでに我手にかみつくもわはれなり。主やあると見れども、人なし。我が手と犬の口とは、しばし月下に相戯れしが、かくては果てもなしとて、たちて歩めば、犬はなほ我足にまつはる。まつはりては離れ、はなれては又まつはりて、共に山海の間をたどりしに、のちには犬あり

とも感ぜず。ふと思ひつきて、犬をたづねし時は、犬の姿は早や見にざりき。

旅館にかへり、一睡して覺むれば、夜はまだ二時なり。隣室には三人の客あり。宵よりいまだ寢ねざるものとれば、しきりに杯は收めたれど、雜談の聲たかく、まどろまむとするに目ます〳〵さゆ。書よまむとすれば、油つきて、ともしびの影、またゝきて死なむとす。酒さめて、喉しきりに渴すれども、深更婢を呼ばむも心ぐるしく、苦しさのあまりに室を出でゝ、また濱邊をあゆむ。草木今は睡りつくして、浪の聲ます〳〵たかく巖に激し、零露音なくして、人の衣を霑し、むら雲、そらにいそがしくして、月も走るが如く、光うすうして、乾坤夢よりも

淡し。われ此景に對して何となくうらがなしく、夜氣、愁をさそひて肌にしみて堪へがたければ、室にかへりて衾を被りけるに、隣室の雜談は猶止まず。遂に四時となりぬ。日出づるまでは、外面に在らむとて、又出でゝ磯邊を歩す。

月は西にかたむきたれども、空は依然として夜色を帶び、潮また上らむとして、浪の花巖頭に白し。海に金波のあと絶にて、空とひとしく黑味をふくみて青く、水天のけぢめ、それとも見わけがたかりしが、一縷の微紅、東のかたに現はれぬ。見る〳〵左右にひろがり、上にふくれて、明かに海と空との間を劃せり。曙光今や東天にのぼりそめたるなり。されどその區域はなほせまく、月はまだうすれゆきて、燈臺の火、な

とり我物顔に回轉して、光線を四射せり。しばらくして、東天の微紅は、益大く、また益濃く、空にうかべる雲にうつりて、雲はみな錦繡となりぬ。四面なほ夜色のうちにねむりて、東天ひとり活動を見る。一刻は一刻よりも異に、雲また形と共にその色を變じて、ほとんど端倪すべからず。紫味やうやく黄味にうつりて、曙光今は東方の半天を領し、燈臺も全く焰をうしなひ、月魂丘樹の上にあをざめて、さながら病婦の顔のごとし。かくて曙光の區域、益廣くなるにつれて、色はますます薄くなりて、夜は全く明けはなれむとす。濃碧の海、淡黄の空、上下相交はる處、忽ち殷赤、朱の如き一線をいだすかと見れば、やがて櫛形の紅片となり、半球となり、終に一大紅暾全く海をはなれたりやゝ上りて、波もきらめき初め、光線迸射して、また仰ぎ見ることを得ず。日出の觀もこれまでとうしろむけば、かたへの岩に、おなじく日出を見居たりけむ、二十ばかりの女、ねくたれ髪を朝風になぶらせて、つくろはぬ姿やさしげなるが、朝日にむかひ居たる眼に、顔かたちはよくも見にわかぬまに、磯をくだりて、もずそかゝげて、浪際をたどりゆき、また歩をこなたにかへしぬ。衣のうるはしきは、富める家の女にやまろきと云はむよりも方といふべき顔の、首なくして、直に胴よりはへ出でたるが如くなるに、その顔のたゞしからずして、口と共にゆがみたるさまなど、かの川口の女神もかくやとあはれなり。

朝食の後また出でゝ、南のかたに向ひ、浪際つたひて、長崎がはなにいたる。巖石摺疊して、怪獸の陸梁せるが如し。こゝより外川の漁村を經て、犬若崎にいたるの間、巨石浪際より海中にかけて散布し、南より來る潮流をうけて、犬吠崎のあたりよりは、濤ひときは高し。ゆき〳〵て犬若崎にのぼる。この崎は、海中に突出せる、半島の如き巨巖にて、たかさ百尺にちかし。見わたせば、大海際なく、藍を流せるが中に、長風浪を蹴て、白波遠く相連りさながら白鷗の亂れとぶに似たり。その白波やうやく近きて漸く大くまた長く、後浪前浪を追へば、前浪もまけじと、いさみ進み、幾層の白浪、空に躍りながら、來りて絶壁にふれて、雪を崩し、霰をちらし、はては白烟となり

て、たちのぼる。そのひゞき鞳鞳として、更に人語を辨ぜず。岬の東端、やゝさけて、更に高巖を出す。怒濤の餘勢、その隙間に亂入して白泡鼎沸し、白龍のくるふかと疑はる。仙が巖、ちかくその東にありて、海中に孤立す。高さは、犬若崎とひとしくして、大さは、その十分一にも足らず。岩としてはかほきく、島としては小なり。上に洞窟あり。浪の花ちりて、幾んどその半に及ぶ。甚しき時は、その上をこすことありといふ。このあたりの濕のあらきこと、おしはかるにたりぬべし。右の方は、名洗浦とて洗は大ならす、飯岡岬の一角、海中にひきて、そのながさ、二里に及べり。眺望はとりわけて奇絶とにはあらぬど、水石相鬪ふの偉觀は、銚子の近傍、この犬若崎を第一とす。岸

上より海波に俯せば、目眩し、心戦き、壯快きはまりて、覺にず悽愴の感起る。ひごろ好めるシルレルがタウヘルの詩を一誦して去る。

午下、また出でゝ犬吠崎の上に散歩す。佛濱の丘陵、君が濱の丘陵とこゝに合して、ほそ長く海中に突出せり。岩質は、砥石にして、かの海上砥、こゝより出づ。岬をきりくづし、斧聲、石とたゝかひて、風景を俗殺せるは、惜しむべし。名たゝる犬吠崎の燈臺は岬角にあり。その側より崖をくだれば、巨石海波の間に磊砢として、或は人立し、或は獸蹲す。岬の北側に、胎内くゞりと稱する岩窟あり。このわたり、危巖最も多く亂立す。銅像かとうたがはるゝばかりなる赤條々の漁夫、ふたりみたり、岩上に踞して編を垂れたるも、亦畫中の人なり。

浴終りて、酒未だ至らざるほど、庭をへだてたる一室に、嬌歌の聲、三絃の聲と共に起る。之の聲をたづぬれば、小歌のぬしは、けさ日の出をながめたる女にして、そのうるはしき聲、かのゆがみたる口よりいづるもわはれなり。かくて、杯酒の間に、月はまた上りぬ。今宵は既望なれど、清光はきのふにことならず、空いとよく霽れたり。かの三人の客は已に去りて、絃聲もまた止み、夜しづかにして、大平洋上、秋正にたかし。一瓶の酒、こよひは飲みつくすを能はず。さばし月をふみて、眠につきぬ。

あくれば九月十三日なり。日の出をのぞみたる後、旅裝をと

ゝのへて、かへらむとす。草上の露、未だ晞かず、曉風、秋風をよ、せて、ひやゝかなり。きのふ我をたづね來て、紙障の間に、欵々たりし燈心蜻蜓の、命は一夜の秋につきけむ、冷かになりて、障子の骨によてたはれり。

夢野の鹿

さゆり花さく　夏の野の
　きよきながれの　岸のべに、
なくなる鹿の　音もすみて、
　四方の山々　どよむなり。

鹿のなくなる　野べ近く
　ちぎ高知れる　みあらかに、
あつさ避けさせ　給ふとて、
　すめらみことの　いでませる。

ささきと共にいでたいす
高き岡べのくさむらに、
置き添ふつゆのいやしげく、
蟲のなく音もきはふなり。

月をふみつゝもろともに
あゆますもむつまじく、
夏をよそなる夜なくに、
鹿の聲さへうちそへて。

みけしの袖をひるがへし

吹くや岡べの、風きよく、
さすもさやけき月かげに、
今宵も鹿の聲すなり。

まろが心もうちとけて
世になつかしき鹿の聲、
こゝにいましの手をとりて
ともに聞かばやいつまでも。

君のみことばうちきゝて
ゑむもやさしきやた姫の

くれなゐにほふ　かほばせに、
月もいざよふ　ばかりなり。

＊　＊　＊　＊

野中の眞萩　ふみしだき
そびらに小草　つまと眠りし　さを鹿の
夢はあらしに　生ふと見て、
牡鹿はゆめを　うち聞きて
小草はやがて　つまに向ひて　いひけらく、
去の矢なり。

さつをの手にや　かゝるらむ。

あなかなしやと　泣くほどに、
とよさかのぼる　夏の夜はやく　あけそめて、
夢のうらへも　かげもうつりぬ、　朝日子の　いさゝ川。
あはれをしかの　さつをやゝ　弓を　射たりけむ。
生ふる小草は　うつしみに　そやにして。

＊　＊　＊　＊

にほふきさきの　手をとりて
今宵もたゝす　岡の上に。
ふく風ばかり　身に玄みて
鹿のなく音は　せざりけり。

いとゞいぶかしく　おもほして
おほみ心も　安からず、
ちゝの思に　玄づみつゝ
ひと夜あかさせ　たまひけり。

心をつくす　さへぎべが
あさのみけにと　かしこみて、
鹿の玄ゝをゞ　たてまつる、
とが野の奥に　射たりとて。

鳴かぬもつらく　おもほすに、
今まのあたり　さをじかの
空しきからを　見たまへば、
いとゞみごゝろ　さわがれて。

きその夜までも　つま戀ひて。

なきし男鹿の　はかなくも
かゝるさまかと　ばかりにて、
君は袖をず　しぼらする。

心ばかりは　くませども
とが野にふくに　去のびずと、
西のはてなる　國とはく
さへぎをうつし　たまひけり。

あやにかしこき　大君の
めぐみの露は　野に山に

いたらぬ限も　なけれども
すぎにし鹿を　いかにせむ。

をじかの角の　つかの間に
せめて思へば　かはるもはやき　身のはてを
ちぎりあり、世の
さめつらむ。

時雨さびしく　ふとづれて
夢野に秋も　くれにけり。

つまにわかれて　だゝ獨り

まよふ牝鹿の　影寒く。

地藏堂

風のゆくへを　見送りて
わびしげに立つ　花すゝき。
ゆうべの露に　うるほひて
さびしげに咲く　女郎花。

家里遠き　野のなかを
つらぬく路の　かたはらに、
立つや地藏の　堂あれて
こほろぎの聲　かすかなり。

堂のうしろの くさむらに、
あなおそろしや ぬすびとの
右手にかたなを 抜きもちて、
身をひそませて うづくまる。

人目をつゝむ 頬かぶり
息をころして ひそやかに
路のかなたを うちまもり、
人や來ると 待ち居たり。

かねのひゞきに くれそめて、

うすくなりゆく 山もとに、
かへる鴉の 影消えて、
いとゞ靜けき 夕かな。

鳴きしきりたる 虫の音の
しばし止みぬと 聞くほどに、
人の來れる けはひして、
地藏にいのる 聲すなり。

めぐませ玉へ、地藏尊、
病みてこやせる わが母を。

まもらせ玉へ、地藏尊、
旅にいでたる　わが父を。
母のやまびを　みまもりて、
つくすとすれど　いとけなく
力なき身を　いかにせむ。
早くかへれよ、父上よ。
今日やかへらむ　我父の
旅をまもれよ、地藏尊、
南無地藏尊、いざ早く、

親子の對面　さしてたべ。
わけてたのむは　ぬすびとの
わざはひ多き　この日頃、
父に災難　なきやうに
頼みまゐらす、地藏尊。
堂のうしろの　ぬすびとは、
身もうごかさず　きゝ居たり。
夕日のなごりとゞめたる

とよはた雲も　消にゆきて、
すゝきの上に　はからずも
一團の月　まどかなり。

やがてちかよる　足音に
ひとかげくろく　見にければ、
いざとばかりに　ぬすびとは
かたなかざして　出でむとす。

こなたに父と　よばゝれば、
かなたにあでと　聲をあげ、

走りてよりて　だきあひて、
うれし涙に　むせびつゝ。

たゞひとすぢに　いのりたる
そのまごゝろや　通じけむ。
あまたのたから　身につけて
父は事なく　かへりけり。

堂のうしろの　ぬすびとは、
いづちさしてか　去りにけむ。

夕露しげき
くさむらに
とりわけて
露ならむ。

したいるばかり
殘れる太刀の
ぬれたるは、
如何にふきわけし

涙

わが千行の血の涙
　　塵のちまたにそゝぐとも、
くされはてたる腸は
　　世の人の洗はれむ。

いでや汚れし世の中は、
　　走るえかばねゆく肉の
すだくがまゝに任せおきて、
　　高根の月にわれ泣かむ。

かきくらしたる　大空の
ひと雨ふりて　霽るいごと、
胸のうれひの　むら雲も
涙にのみぞ　解くるなる。

寂しく吹けよ、峯の風。
かなしき音に鳴け、谷の鹿。
ちぢに砕くる　わが心、
泣きつくさねば　はれぬなり。

* * * * *

畫ける美人

親なく、はらからなく、世にひとり殘されて、たよる方なき一人の男の、唯一の友として、いねても、起きても、はた身はなさぬ一幅の畫に、色もあざやかに、たわやめの姿、生けるが如くかいれたり。瑠璃に似たるまなこ、情をふくみて、人に媚ぶるさまえも言はぬに、丹花をかたどれる唇、笑を帶びて語らむとするも、いと心にくし。髪ふさ〳〵とさがりて、綠雲かしらにみだれ、眉はたわみて、遠山額によこたはれり。肌は大理石に血をかよはせて細腰綺羅にだに堪へず、豐かなる頬にゑくぼの浪をたゝへて、纖手かろく扇をかざせる、いとゝこの世

の人とも見えぬに、めでよろこぶこと限りなし。

路はむぐらにうづもれて、もりくる月の外には、とふ人もなき賤がやどに、この男、畫像を抱きて、細きいのちをつなぎぬ。

つくづくと見もてゆくほどになつかしさはいやまさりぬ。

右より見れば、美人の眼も右にそゝぎ、左より見れば、美人の眼も左に轉じて、さながら生ける人の心あるが如くなるに、心いよ〳〵みだれぬ。くるしく、つらき世の中なれど、御身のきよきかもわに向へば、御神の前に侍る心地して、心のこれるくまもなし。げに御身は神にや。世にさちなきこの身を憐みたまへ。さるにても物のたまはぬ恨めしさ。せめてあはれとひと言は音にいでさせたまへといへと、美人はものいはず、かもわばかりは心ありげなるに、もゆる唇をひやゝかなる畫の上に接することもいくそたび、夜もすがらまどろみもせず、思ひわびつゝ、うき年月を送るほどに、からだつかれ果てゝ、竟に病の床につきぬ。あはれ、くれなゐに匂ひしかも、青ざめて、生ける色もなく、肥えし肉落ちて、骨ばかりに痩せさらぼひ、物もくはず、息もたえ〳〵になりて、今は旦夕を待たぬ命となりけるに、いづくよりか來りけむ、すぐれてうるはしき女、枕べにゐて、いとかひ〴〵しくみとりす。顔容いへば更なり、衣服まで畫中の美人につゆたがはず。さては夢なるかと疑ひつゝも、うれしさに、心すが〳〵しうなりもてゆきて、病もとみにをこたりにき。

浮世に語らはむ友もなき朽木のやどにもさすがに春は來りぬ。切なる胸をうちあけて、かたみに袖をぬらつゝ、末の松山末かけて、浪もこさじと契りかはし、世にもむつまじく暮しけるほどに、一人の男兒さへ生れ出でたり。錦の上に花を添へたらむ心地して、せまき家にのぞみの光みちわたりつゝ、春とすぎ、秋とくらして、その子五歳になりけるほど、いかにかしけむ、母も子もかき消す如く、失せさりて、そのゆくへを知らず。男ひたなきに泣きしが、やうゝ身を起して、山にのぼり、谷にくだり、森にわけ入り、野をかけめぐりて、天に呼び、地に叫べど、山彦の外には答ふるものもなし。かくて滿身の血吐きつくして、竟に倒れぬ。家はまゝ荒れゆきぬ。唯

男が秘藏せし畫には、美人もどの如くうち笑めり。而かもあらたに玉の如き男の兒の五歳ばかりなるが添へられて、美人の側に立てり。

胡蝶

とまれ胡蝶よ、さく花に。
眠れしづかに、いつまでも。
いましが夢を　おどろかす
風はこゝには　吹かぬなり。

ねにこそたゝね、ひら〳〵と、
心ありげに　とぶ胡蝶、
春のにしきを　おりなしゝ、
神や宿れる　汝がはねに。

にほふ霞を　うちのせて、
かはすも輕き　汝がつばさ、
天つをとめの　羽衣も
かくやとばかり　思はれて。

なれがやさしき　くちびるに、
あくまでも吸へ、花のつゆ。
わが住むやどは　せまくとも、
さくら咲きたり、こゝかして。

浮世はとはに　風たちて、

雨さへあらく　そいぐなり。
うらゝに見ゆる　春の日も、
こゝろ許すな、　やよ胡蝶。

雨やけがさむ、　汝がはだを。
あらしや裂かむ、　汝がはねを。
ほゝゑむ花は　かほくとも、
まよひなゆきそ　世の中に。

友とたのまむ　人もなく
すみもわづらふ　やりの宿。

浮世のちりは　いとふとも、
汝にはへたてじ、　しのすだれ。

とまれ胡蝶よ、　さく花に。
眠れしづかに、　いつまでも。
われも浮世に　たへかねて、
わびぬる宿の　さびしきに。

御嶽めぐり

梅にはおそく櫻には早き四月のはじめ、ひと夜を塵の巷のほかにすごさばやとて、午下、都をたちいづ。春とは云へど、花なき武藏野を汽車にわけゆきて、其の野末の青梅町に着きし頃は、夜已に初更に及へり。この町第一の旅館とて、わか住む草の庵のいぶせきには比ぶへくもあらねど、旅なれば、なほ慊らず思はれ、酒の惡きに、醉を買はむ由もなし。されど、花の下臥し、風流の寒きにひきかへて、垢くさき蒲團の中にも、さすがに夢はまどかなり。

つとめて、御嶽へとていでたつ。町をすこし離れて、金剛寺は

と問へば、村の少女、思ひもかけぬ後の方の森を指す。さては來過したりとくやめと、遠くもあらねば、ちか路をたづね、隴畝の間をよこぎりて寺に至る。平將軍の創立とかや。廻廊の前に、誓の梅とて、老幹朽ちむと欲して、小幹簇生したるが、花已にしぼみて、一半は枝に殘り、一半は地に委せり。町の名の青梅は、この梅の黄熟せざるより出づとて、音には聞にたれど、見るかげもなし。その側につたなき歌をきざめる石碑たてり。風流に似て反て俗なるわざも、歌よからぬ、まだしもなべて名物に旨きものなく、石にきざめる和歌俳句に、名吟のありしためしなく、めくら同士にふだてられ、金あるものいものすきにまかせ、巧拙だに自ら知らぬ徐凝の遺類ふぼき

に、東坡ならねど一笑せざるを得むや。

青梅より一里ばかり進み、日向和田に至りて、路はじめて多摩川の岸上に出でぬ。水聲川身、共に遠く脚下にあり。川をへだてゝ、逶迤たる小山の麓に、一帶の白雲鬟鬟として凝つて散らざるは聞き及びたる吉野村の梅花にやと、魂まづ飛びて、左に崖を下れば、斷岸の相迫る處に橋かゝれり。これ名たる萬年橋なるが、先年火災にかゝりて、今はたゞ橋のかたちを存ずるのみなり。その下に假橋を設く。俯しては、急湍水激して蒼龍の岩を嚙むが如きを見、仰いでは、燒けのこりたる一本の桁、虹霓の半空を横斷するに似たるを望みつゝ、川をわたりゆきて、吉野村に達す。村みな花とはこの村のこ

となるべし。一目千株また萬株、近きは玉の如く、遠きは雪の如く、梅花茅屋をつゝみて、その盡くる所を知らず。花のさかりは已にさりて、色香はうすれたれど、なほ枝上を謝せざるさまゝ、さだ過ぎたる美女の如し。思ひもかけず鶯のなく聲のあまりに近きに、人の反て驚かさるゝもおもしろく、機杼の聲に和して、機織る女のうたふ歌のふしも、かざらずして自から趣あるに、賤が垣根の覗かるゝは、梅が香のみにもあらざるべくや。小高き處に、天澤寺といふ精舍あり。今日は四月八日とて、水槽の中に、さゝやかなる銅佛を置き、柄杓さへ添へたるは、山奥もかはらぬ灌佛なるべし。眺望開けざるにあらねど、今すこし高からばと思はるゝも、例のあかぬ心にや。

天澤寺をすぎゆけば、小山左右にせまりて、さゝやかなる溪流、路にそへり、山田をすきかへす男、鋤をとゞめ、わざ〳〵我等を呼びて、君等は御嶽(みたけ)にのぼりたまふにあらずやといふ。然りと答ふれば、このさきに、三條の路あり、その中央の路は、尤も小に、草木にかくれて、それとわき難けれども、これ御嶽へ通ふ路なり。他の路をとりてはあらぬ方にいづべし、心して誤りたまふなといふ。いたくその厚意を謝して、四五町ゆくに、果して右にわかれたる小路あり。なほよく見れば、その間に小なる獨木橋ありて、それよりつゞきたる細徑かすかに見ゆ。恰も爪の字の如し。かのまめやかなる農夫の教なかりせば、よもこれを御嶽路とは知らじ、はかなき旅にもうれ

しきは人のなさけなり。

教へられたる細徑をすゝめば、足先仰ぎてやがて小山の峯にいたりぬ。これより路は常に峯をつたひ、峯いよ〳〵高くなりて、眼界、いよ〳〵ひろし。數百仞高く屹立せる大巖を左に見てのぼりゆけば、峯めぐりて路はその巖の上に出づ。こゝに琴平の小龕あり。脚下その底を見ず。前には、群峯われに朝して怪獸の陸梁せるが如し。山のつくる處は武州の平野茫々としてその限を知らず、をぼし休憩して半里ばかり行けば、路は平らかなる處かほく、或は下り、或は上る。春未だ燒痕に入らざる童山を越えて、五日市より上る路と相會す。前に山谷を隔て、雲上に聳えて、殘雪のまだらなるは大嶽(おほたけ)なり。

目ざす御嶽はそれより右に近く、且つ低く、樹木の鬱蒼たる處にして、思ひしよりも低ければ、この時はや已に大嶽を攀ぢむと思ふ心きざせり。遂に御嶽にいたりぬ。

御嶽の嶺には、世に名高き御嶽神社あり。いと宏壯なり。盤回せる石磴の下に、旅店、御師の家、物賣る家など相連る。さらでだに、善男善女の參詣常に絶えざるに、今日は小祭日なりとて、殊に賑へり。こゝは海を拔くこと三千八百尺夏は暑を知らずと聞けど、毫も眺望なければ、大嶽にのぼらむと思ふ心、いよ〳〵切になりぬ。一旅店の怪しげなる二階に休息し、酒し、飯して、祠前を左に谷に下れば、なゝよの瀧あり。その名の如く七折せる小瀑なり。側の巉巖をつたひ、よごとに見つく

して、右にすいめば、無限の谷に臨みて翼然たる危巖落ちむと欲して落ちず、その上に銅製の天狗の翼を張りて立てるも物すごし。なほ右に巉岏を攀ぢて、左に下りゆけば、谷の窮まる處、一條の飛瀑、潭をへだてゝかゝる。このあたり尤も幽邃なり。谷かげに殘れる雪をむすびて嚙めば、簌々として冷氣骨に徹するばかりなるに、心地いとすがゝしく、小戻りして、更に上りて那具男の峯にいたる。こゝは御嶽の奥院なり。御嶽より直にこゝに通ずる路の傍に、鸚鵡石の奇あれども、路を異にしたれば、見落しつ。祠下、水を賣る翁に路を問ひて、西に山ふかくわけ入り。幾度か殘雪を掬して渴を醫しつゝ、遂に大嶽にいたる。寂莫無人の山とは思の外、一人の老婆

の、休息所を設けて茶を侑むるものあるに、たちよりて去ばし休息す。一町ばかり奥に、大嶽神社あれど、まづ山頂へとて、四町ばかり崎嶇たる險路を匍匐して、漸く山頂に至りぬ。路すがら雲上に望みし大嶽は、今やわが杖底にあり。遠目は雲に遮られたれども、近く群山を見れろしたる心よさ言はむ方なし。乱山の底に臥蠶點綴し、炭やく烟幾縷となく立ちのぼれるが雲のすきめより迸射する夕陽の光をうけて、一半はあざやかに、一半はうすぐらく、末は風にまかせて自から消ゆ。北に高かきは秩父の連山にや。こゝは多摩川と北秋川との間に磅礴せる一帶の連山の、吉野山あたりより崛起して、圓山となり、日の出山となり、御嶽となり、那具男峰と

なり、遂にこの大嶽となり、山勢一頓して、尤も高峻をきはむ。われすでに御嶽に溪壑の奇をさぐり、こゝに天梯に倚りて遊觀の目をほしいまゝにす。幾重の雲をわけつくして、凡骨頓に脫し、心は衣袂と共に飄々として天風に颺る。たゞ日の西に下れるに、前路のいそがれて、下りて祠に詣づ。御嶽の祠には比ぶべくもあらねど、高山の上には稀に見る結構なり。拜殿の賽錢箱の側に十二三ばかりのかはゆらしき少女のたゞひとり坐れるは祠を守るにやさるにても魍魎出づべき深山の上の、晝もなほものすごき處に、唯一人の少女を黙ぜるこのいぶかしく、茶賣る老女に、あれは何者と問へば、祠官の娘にて、父と共に來りけるが、父はさきほど已に山下

の村に歸りぬ。娘はわれと共に歸るはずなりといふ。澁茶二三杯のむ程に、老婆の口輕く、問はぬに、自ら語り出すやう、かの娘には一人の姉あり、妹よりは更にうるはしく、村の花と呼ばるゝ美女なるが、去年來りて祠を守りけるに、御嶽より商人躰の男ふたり來りて、こゝに酒のみ、醉に乘じて、その娘を呼び來りて酌せしめ、さま〳〵ざれごとなど言ひたる末、歸るにのぞみて、路まで送れといふに、一人はやらじとて、われも共に送りゆきしに、ついでにその娘くれずやといふ。二百兩出したまはゞ賣り申さむと、たはむれに云ひければ、こはそもいかに、財布より金貨銀貨ばら〳〵とさらけ出すに、膽つぶれ、娘と共に命から〳〵にげ歸りしが、娘はこれに懲りて、また山にのぼらず。世には恐しき人もあればあるものなり。公等の如くやさしくれば、やうなる御方もあるにと一轉語を下して、ほゝとわらふ。これもむかしは驚なかしけむ、

ふどろの奥にも道あれば、草ふかき山里のふうなるも、さすがにせじにはぬからぬに、いらへむ言葉も知らず。いざとて、夕日に向ひて山を下り、黄昏、檜原村に投宿す。

明くれば多摩川の上流に出でむとて、朝日を肩にして、山奥深くわけ入る。左右みな山なり。山と山相迫りて、其間たゞ一條の北秋川を餘すのみにて、毫も平地なく、家をたつる餘地だになければ、勾配いと急なる麥畑、山の上かけて開けて、その上に、往々茅屋を見る。畑のひらけざる處には、立ちのぼる

烟に炭がまのあり
ひも
ひもそれと知られつ五日市あたりへはこび出すにやあら
むひきもきらず荒ぼくは女なるが中に十ばかりなる少女人
炭のたはらを或は背負ひ或は牛にのせていで來るもの
並にあねさむかぶりして角いかめしげなる一駄の大牛を
手綱ゆたかに領してゆくもいと殊勝氣なり川の流は小に
岸低く路は直に川身にそひ水と共に萬山の底を縫ひて斗
折蛇行す。さながら二重にたてまはしたる屏風の中を行く
がごとく回顧すれば山かさなり幾重にも層嶺面に當り
て路竟にきはまるかと思はれしかゆく手にも幾度といふことを知ら
ず。山重水複疑無路柳暗花明又一村とうたひけむ放翁の詩

句今更に霊活なるを覺にて高らかに朗吟すれば山應へ水
鳴る。木曾路にも、この幽邃の趣はあらじと思はれぬ。ゆき〳〵
て路遂に山にのぼらむとする處に、一軒の茅屋あり就いて
茶を乞へば、一人の老媼ありて、慇懃に茶を侑む。枯木の如く
蒲團の中に横はれるはその夫なるべし。病めるにやと問へ
ば、自から老衰して、已に一年あまり蓐に臥せりといふ。あは
れ、山間の風雨に鍛ひし岩なす骨も肉も、寄る年浪にはにも
堪へざらむ。罪あり、いつはりあり、血なまぐさく、豺狼横行す
るうき世をよそに、八重の山奥に人となり、炭を焼き、鋤をと
りて、一年又一年、七十年あまりの人生の行路罪なくすごし
て、罪なくたち去らむとす。草木と同じく朽つといふことを

やめよ。名に驅られ、欲に驅られ、利に驅られ、煩脳に驅られ、はかなき人間の小智、小慧、小策略を弄して、蝸牛角上に終生營々たる世の所謂偉人豪傑、天地の化に參して、竟に何の補ふ所ぞ。歐洲の野、また那翁の馬蹄を印せず、古來野心のあとは、大鬼小鬼相望んで哭すかへりみれば山はとこしなへに青く、水は長へに流る。いとはしきは人間のいつはりにして、去たはしきは自然のまこととなりなど、思ひつゝけつゝ、老媼に向ひて、小河内への路を問へば、その答をまだるしとや思ひけむ、病みさらばひて、聲を出す力もなかるべしと思ひし翁、忽ち眼をひらき、思の外に聲もたしかに、我が爲に路を教ふること、いとぬんでろなるにやがて死ぬ景色も見にず蟬

の聲の句さへ思ひだされて、ひそかに涙を揮つて去る。路少しばかりのぼれば、やがて左に山腹をめぐつてゆく。足先やゝ仰ぐばかりの勾配なり。左は谷を隔てゝ山われども眼界はまたせまらず。處々に家あり、畑ひらけ、雞犬の聲、時に相應ふ。山のしづけさは太古の如く、當年秦を避けし民もかくやと思はるゝばかりなり。ぽか〳〵とあたゝかき春の日を負ひて、心のどかに進みゆきしに、路遂にきはまりぬ。樹陰に一軒の家を認めて、之に就けば、空屋とも見にぬに、人は居らず。今一軒、四五町へだゝりたる處にありければ、それに赴きしに、こゝにも人なし。此あたりには、家はこの二軒のみにて、路を問ふに人なく、いと困じて煙草ふかし居たるに、二三

人づれの童兒、來りてわれらを諦視するは、洋服着たる旅人のわれらの姿をめづらしと思ふなるべし。おぼつかなしとは思ひながらも、小河内に出づる路とへば、わらびの如き柔拳に峰巒を指點して、路を教ふることと太だ明瞭なり。教へられたるまゝに、山路をよぢのぼること二十町あまりにして、遂に峠の上にいたる。これよりは下り路と思へば、心ゆたかに草の上にすわり、ふかす煙草の烟の末追うて眼をうつせば、思はぬ空に、富士の高根夢の如く見ゆ。時は十一時を過ぎたり。正午までには小河内へとて、一呼して下り、遂に多摩川の上に出でぬ。十町ばかり川上の、鑛泉のある處に行かざれば、食を得るに由なし。餓を催せることは、甚しけれど、今日の

うちに、青梅に出でむと思ひたれば、往復半里あまりあとものどりするに忍びず。一茅店に投じて、鷄卵を食ひて、假りに午食に充て、多摩川の左岸を三里ばかり下にゆきて、氷川村に至り、こゝに始めて旅舍を得て午食す。こゝは日原川の多摩川に會する所にして旅舍商店相連りたる山間の小驛なり。客室は川に接すれども、岸高うして川身を見ず、たゞ淙々たる水聲を聞く。翠巒面を衝いて起り、白雲來りて人と親む。食終はる頃、雨至り、次第に甚しくなりければ、遂に意を決して、こゝにやどりぬ。夜に入りて雨やまず、客懷何となくうらがなし。われは歸期を定めずして出で來りたれど、雨江は一夜を期して來り、青梅にて、今一夜とて電報をうち、今日は必ず

都に歸る豫程なれば、如何にかせしと心をいためて待つ人あるべし。今一度打電せむにも、郵便局はなし。即興の蜂腰として、

雨あるゝ春のひと夜をまどろまで、
　まち明すらむきみが妻はや。

翌朝、早くいでたつ。雨痕地に殘りて、空はなごりなく晴れたり。脚下の多摩川の水、赤くにごりて溪流の奇その半を失へるはくちをし。仰げば、屏風のごとき巨巖天を刺し、俯せば、巖を骨とせる兩山せまりて、相鬪はむとするところ、巨靈咆哮して、一道の溪流、箭を放てる天狗巖の奇には、思はず足をとゞめつ。いよ〳〵進めば山ひらけて、眼界やうやくひろし。二俣尾村に至れば、川をさること遠く、右も左も畑ひらけて、桃樹太だかほく、はや淡紅の花をつけて、のびそめたる麥浪と相映ずるもまた春の一觀たるを失はず。對岸は、一昨日の朝ふみわけし吉野村なり。ゆふべの雨にもつゝがなく、香雲舊に依りて山下の村を置むるに、契りし人に邂逅する心地せられ、花神ひとへにわれを待ち、われを送るがごときも、はかなきわが思ひなしにや。

山の影

岸にそびゆる　山の影
さやにうつして　ゆく水の
こゝろも深き　淵なれど、
春のはつ風　ふくまゝに、
たつや川なみ　音高く
山をくだきて　狂ふなり。

いさゝ川

花の下ゆく　いさゝ川
岸べに浪を　うちよせて
さやげば　花もわらふなり。
ひとゝきり吹く　春風に
いよゝさゝらぐ　聲たかく
水はみだれて　流れつゝ。

花ざくら

すたれし家の　花さくら
あるじと共に　くちもせで、
榮にもゆくか　春かぜに、
枝はかきねを　うちすぎて
路ゆく人に　媚を賣る
花のこいろの　あさましや、

やつれし姿

四とせいつとせ　臺灣の
南のはてに　でかせぎて
くるしき業を　せしほどに、
やつれにけりな、　わが姿、
色はくろみて　目は落ちて
額に皺さへ　きざまれて、
われも驚く、　わが顔の
むかしの樣に　かはれるを、

されど黄金は　まうけたり。
坐して食ふに　餘りあり。
いで山の手に　家たてゝ
世をばたのしく　過してむ。

なじみし女へ　みやげには、
金のゆびわや　しゆすの帶。
髪のかざりに　珊瑚樹の
ねがけを添へて　贈らばや。

もとの友達　よびつれて
名物の料理　おごらばや。
くむ杯に　くだまきて
我が身の上を　かたらばや。

道ひろくなり　家増して
むかしの樣は　かはれども、
生ひたちにたる　ふるさとの
花の都の　なつかしや。

歩む行手に　足袋はだし
はつぴを着たる　小男の

いそ〳〵ゆくを　能く見れば、
むかしの友の　權太なり。

やれなつかしや　わが友と
走りて寄りて　名をよべば、
われをうち見て　いぶかしみ
そ知らぬ顔に　過ぎてゆく。

ふりし木綿の　前垂に
味噌漉し包みて　ちよこ〳〵と
歩む女を　よく見れば、

むかしなじみし　お梅なり。

やれなつかしや　戀人と
走りて寄りて　手をとれば、
われをうち見て　いぶかしみ
そ知らぬ顔に　過ぎてゆく。

なほゆく路に　思はずも
わが母杖に　とぼ〳〵と
やれし布子の　袖寒く、
腰をかゞめて　來りける。

やれなつかしや　わが子よと
われより　さきに　聲かけて、
涙かたでに　まろびより
人目もはぢず　よゝと泣く。

涙のひまに　いひけるは
汝はいたく　やつれはて、
見違へるほどに　なりたれど、
よくこそ無事に　歸りつれ。」

猿塚

源三窟に世をせばめたる敗軍の將の昔は知らず、妙雲寺に身を潜めたる亡國の美人の昔も知らねど、こゝ名にし負ふ鹽原の里、からき憂目は今もかゝる白雲の、八重立つ山の奥も、浮世のさがに洩れでや、心一つに怨ばれて、有るにあられぬ身の、頼む木蔭にもなほ袖ぬらす、青葉々々の雫の末の、流れて清き箒川の水もさすがに、六根の塵は掃ふに由なかるべし。

温泉場の雑沓を後にして溪流を溯りてゆくこと幾回、山尖り、樹茂りて、通ふ人も稀れなる處に、さりとは數寄をつくせ

る一構溪を隔てたる懸崖より一條の筧のかゝれるは涌き出づる靈泉を引けるにや圍ひ廻したる黑塗の板塀一宇の粉壁を包みて水に枕める柴門更に風致をそへたり。家は新しとにはあらねど瓦屋根いかめしく聳に雨にうたれ風にさらされて木理あらはたる門標に墨の色なほくろ〳〵と殘りて花村家別莊の五文字高くしるし出されたるは年久しき住家とおぼゆるに此二三年のほどはさゝはる事ありてや避暑の時節にも紅葉狩の時節にも柴扉むなしく鎖されて人待顏なりしが此の夏よりは俄に人のけはひして帚痕つねに清らかに木末より立ちのぼる煙にも住む人ありとは知らるゝに至りたれど、なほ山は太古の如くにして笑

語の聲だに聞にず門の戸は開きたるまゝにて出入りする人はなく唯おとづるゝ客とては迎へざるに入り來る白雲のみなり。

峰の松風の如くにして更に清く溪水の音に似て特に澄みたる一種のうるはしき音の時々聞ゆるに村人ははやくも耳をそばだてしが誰かまゞ影を吠えけむ此度は旦那夫婦は來らで、その惣領の息子殿新に迎へたる夫人を伴れて避暑かた〳〵の新世帶、その若旦那はたび〳〵此の地に來りたれば村一同とくより見知りて賞めぬ者もなき好男子なるに、そのまた新たにむかへたる花嫁御も、それは〳〵光るやうな顏かたち、當地名物の高尾からも釣の來そうな美人、

まことに揃ひも揃うた一對の活人形じやなど、はかなき噂、十里の外までも傳はりぬ。

噂はこれにとゝまらず。如何なる故にか、此一對の活人形はとかく中が惡く、まさか脊中合せの中ではあるまじけれど、打ち解けて睦みあふ樣も見にず、聟殿が絶にず佛頂面をすれば、花嫁は機嫌とりかね、我とうち萎れて、緑の袂つねにしめりがちとは、さて〳〵氣の毒千萬なゞ、他所の疝氣を頭痛に病むものゝ多きも可笑しや。

かく村の者どもが旦那々々ともてはやして、いろ〳〵に噂するも故なきにあらず。ひろき東京にても、花村伯と云へば限りある華族のうちにても、取分けて世に時めき、しかも財

産家の中にかずまへらるゝ華族なるが、その子文麿と聞えしば、今年二十二三歳の若盛り、新に迎へたる夫人は梅子とて、これも華族の中にて名うての美人、此の一對の新夫婦が島臺の前に、三々九度の杯を酌みかはしたる後、間もなくつれだちて此地に來りしは、避暑をかねたる西洋風の結婚旅行とぞ聞えし。

木葉の落つるも可笑しき娘盛りの身も、人の家にとつぎては、藥にしたくも心底から笑ふ折は少なく、第一に良人の氣に入るやうに心を碎けど、さりとて、夫の機嫌とりすぎて、舅姑の方をおろそかにするやうに思はれてはならず。貴き家なれば、勝手向の面倒見るに及ばざれど、小姑への氣兼云へ

ば更なり、何につけ、かにつけ、心配の絶ゆることなくて、小さき胸のはりさくるばかりなるを無理に抑へ、外部を粧ひて強いて笑ひ顔を作くらねばならぬてゝは思ひの外、花村家には、小姑といふもの一人もなく、兩親はあれども、舅は柔和な人柄、白き鬚を撚りつゝにこ〳〵と笑ひて、小むづかしき樣子更になく、姑もか人善にて、少しも氣がねがいらぬに、先つ安心して、さて本尊の夫は如何にと見るに、きゝしよりもまさりたる好男子、中肉にて色白く、口元締りて、糸をひく目元の可愛らしく、人柄もすぐれて、おだやかなるに、うれしいやら、耻しいやら、二三日はまるで夢中で過しけるが、鹽原へ二人つれの旅行と相談まとまりて、梅子ははや極樂にで

も行くやうな思ひをなせり。

旅行の伴には、梅子が里方よりつれ來りたる德と云ふ腰元に福といふ花村の女中、外に御飯焚、水仕事、庭の掃除などの世話する老人の安兵衛夫婦を伴れて、一行すべて六人なり。上野より那須まで新夫婦は共に上等列車に乘りたれど、人目あれば打ち解けたはなしも出來ず。さて那須より鹽原迄五里半の間は人力車をやとひ、第一は文麿の車、次は梅子の車、それより荷物車に至る迄都合十輛。那須野の原に砂烟立てゝゆく道すがら、梅子はせめてふ顔をと思へど、見ゆるはたゞ後姿、肩殺げ領足長くして髮は漆よりくろく、如何にも立派なれど、隴をだに得ざるに望蜀の念やみがたく、跡の車

なる腰元とはなし合ひて笑ひ聲でも洩さば振りかへる事もやと思ひていろ〳〵譯けもなき事語りて笑へど、さらに其甲斐なければいよ〳〵もどかしく、つひに困うじて、あなた、あの高い山はと半ば問ひかくれば、どの山と云ひつゝ後むくに思ひ設けたる勇氣忽ちくぢけて、ふずくもまた後むきて腰元と顔見合はすれば、これはまた意味ありげなる微笑を洩すに、心まず〳〵惑ひて、滴る汗をぬぐひも敢へずあれは何と云ふ山でせう、アゝ暑いこと。

如何に佛性な人なればとて、舅姑の側は親だけに矢張り氣苦勞のある都の家を去りて、深山の奥のその奥に自から手鍋さげる骨折も入らず、人目とては下女下男のみなれば、別

に遠慮も入らず、水も入らぬ二人暮しにて、仕たい事仕放題と、待ちにまちし當て事、はやくも何やらと共に前からはづれぬ。鹽原に來てから、氣をつくれば、何が夫の氣に入らぬか。かはやうと朝の挨拶いへど、いらへは無く、ふやすみあそばせと夜の辭儀すれど、取りあはず、何をいうても、ふりむかず、風は何處を吹くといふ風情なるに、これはどうしたこと、氣も氣ならず、獨り心をくだくのみにて、あらき風にもあたらざりし箱入娘の、よき思案も浮ばず、あはれや、人の保養に來る塵外の仙境に初めて夏瘦の味を覺えぬ。

一室にたれこめて、ふさぎがちなる夫の身の上慰さめむやうもなきに、兩親の來らぬはもつけの幸と思ひしは、かへす

い〳〵も勿体ないやでんな時に姑でも居られたらばと今さらくやめども詮なし。今日も朝からたてこめて居らるゝに少しは慰さむる事もやとて、梅子は自から急須をもち出でゝ茶を點じ、茶受けはお跡からとて差出せば、一寸ふりむきて、茶受けも入らず、茶も飲みたくなし。そなたもこゝへは來なくてよい。そなたはうちにばかりぐづ〳〵せずと、折角鹽原に來たからは、高尾塚も見て來るかよし、天狗岩も見て來るがよし。さては鹽原の七不思議、妙雲寺に納めたる高尾太夫の襠裲など見物するものは多かるべし。こゝには無用、呼んだら來いと、情けなくあら〳〵しき言葉の風を柳とうけながしてパイとやさしき返事はしなから、ふりむきてはろり

と。こぼす。温き露に、あたら化粧の白粉もはげぬ。

夏の夜ふけて河鹿の聲高く、川上より人間の外の秋たちて、そよ〳〵と吹き來る風に岐阜提燈の火影涼しさうにゆらぐ軒端の柱にもたれて思ひに沈める梅子の前に、腰元の徳はら、や〳〵しく手をつかへて、お嬢さま、アレわたくしとした事かやつぱり口癖になつて、ホヽヽヽヽヽ奥樣もうおやすみあそばせなと云へば、徳や、わたしは、もうねたつて寐られはしない。一層死んで仕舞ひたいはといふ。アヽコレ、奥樣とんでもないこと、おつしやいますな。これからが花の御身の上、なぜそんないまゝしい事をおつしやいます。でも、徳や、お前、わたしの身になつて御覽、それはもう鹽原へ來てから

一月も立つけれど、いやさしいお詞一つかけて下されず、何が御氣に入らぬやら、ふさいでばかり入らして、ほんにマア、どうしたら宜からうとはや涙聲なり。御尤でございます。とも、わたくしだつて、どの位氣をもんだか知れませぬ。お福さんに聞いたら、樣子が知れうかと思つて、色々なずをかけて見ましたが、あの人も新參なので、よくは知らず。安兵衛さんに聞いて見ますと、ちらと噂に聞いたとやらで、しかとはわからねど、此の人の申すには、若且那樣はごく內氣な、おとなしい、蟲も殺さぬよい御方、書見がお好きでお部屋に籠つてばかり居らしたので、もしや病氣が出はせぬか、男があれでも困つたものと、御兩親の壁訴訟もあつた位。それがどう

した拍子にか、ふとお出好きになつて、他所におとまりなさる事もたび〳〵。いつもそは〳〵して、尻が落付かぬ御樣子、これでも又困ると、御兩親の異見なさるれば、節が細かで面白いなど、聞きながして、外を內なる御身持の末、小露とかいふ尤物にお目がとまり、是非女房にとまで增長なさるゝに、お人のよい御兩親でも、これぱかりはゆるさぬと、以ての外の御立腹にて、ろく〳〵外へはお出しなされず。その中に、その女はもとの馴染にひかされたとか、病氣で死んだとか、その邊はたしかにはわからざれど、御可愛想に、若且那さまは籠の鳥同然、ふさいでばかり入らして、食事もすゝまず、血色も衰へてお命も危いやうな次第。此上の藥には、よい嫁を

迎へて、氣をかへさすに、越したことなしとて、方々おさがしあそばした末に、あなたさまと御緣談がとゝのひましたとの事でまことに奥さまは御不仕合せなやうなものゝ、若い時の女狂ひは誰もありがちのこと、それに、根が利發な、誠のあるお方ではあるし、あなたの樣がお氣に入らぬといふ譯でもございませねば、いつまでも此の通りではございますまい。待てば甘露の日和とやら、今少しの間氣長う御辛抱あそばせやと云ふ折しも、俄に椽側踏みならしていで來る人あるに、兩人ともおどろいてふりかへれば、今までもうはさしたる文廣なり、寢衣姿しどけなく、よろ〳〵と歩を移しながら、此方を一目見しばかりにて、直ぐに庭下駄穿いて出でゝ

ゆくに、何處へと、咎がむれど、何の答もなく、物をさがすが如く、あちこち見廻したりしが、やがて、扇骨木の蔭なる春日燈籠をじろ〳〵見て、可愛や〳〵、茲に居たかとて、抱き付きぬ。

此の夜月傾きて草木も眠れる頃、ひそかに別莊を忍び出でて後の山を攀づる一人の男、手に短銃を提げて、血走る眼に天地を睥睨するさま、ものすごくもまたおそろしく、陰風螢火を吹いて、山氣腥き苔の細路に座を占め、地に俯して考ふる所あるが如く、天を仰いでまた考ふる所あるが如くなりしが、はては山の端の月を睨んで、待つて下され、今行きますと、唯一言云ふより早く、用意の短銃喉に向けて擊鐵引けば神機一發、あはれや木の間より落ち來る猿一匹。

うと〳〵とせし寢耳に水ならで、鐵砲の音は、合黙の行かぬことゝ、枕を蹴つて起き上りたる、梅子、氣のたしかなる性質とて、側にふせりて、いぎたなくも大の字書いたる寐姿の、ムニャ〳〵と口を動かす腰元を起しもせず、直に夫の部屋にかけつけて見るに、夫のあらざれば、さてはと心も空に、音せし方をさして、雪よりも白き素足にけはしき巖角蹈みつゝ、たどりゆく昔の細路に人の形して仆れたるものあるを、月影にすかし見れば、まがふやうなき我夫の亡骸なり。

梅子はあまりのことに言葉も出でず、夫の亡骸抱きてしばし涙にくれけるが、漸く氣がつきて、よく〳〵見るに、體には丸の痕なく、半黙の血痕もなくて、側に一匹の猿、鮮血に染み

て仆れたり。これは意外の仕合せと小躍し、ちよろ〳〵と滴る清水を手に掬ばむとするに、おぼかた洩れければ、口より口にうつし、文麿樣と二聲三聲、口を耳につけて呼びたつれば、忽ちむつと起き上り、いたはる妻をきつと見て、誰かと思へば梅子だな。そなたはヤアどうして此の世へやつて來たと、問ひかくる言葉はよくも聞かず、夫の無事な顏ながめて、漸く胸をさすり、ヤレ〳〵嬉れしや、お怪我はなかりしか、大事の〳〵御身の上、なぜ死ぬる氣にはおなりなされた。もし死なれたら御兩親の跡の御歎は何と思召す。そしてと云はんとするを遮り、その恨みは娑婆で言ふてと。かく冥途にて落ち合ふ上は、最早何ことも言ふてくれるな。父母の歎きも

かもはるれど、所詮一度は死ぬる命なれば、いたづらに浮世で御苦勞をかけむよりは、はやく死んだ方が反つて親の爲めかと思つたのだ。それはさて置きそなたはマアどうして冥途へやつて來たと、變りし言葉にそれと悟り、わたしもお跡で死にました。二世の夫を先立てどうしてひとり生存へて居られませう。御身の仆れし所を去らず同じ鐵砲にて、サヤ、死んで呉れたかうれしいぞや。したがコレ梅、夫婦といふは名ばかりで、一夜も枕をかはさぬ夫の爲めに、命を捨つるそなたの誠心、身にしみて勿體ないとて、暫し涙に暮れにけり。

つくづくと梅子の顔をながめて、テモマア綺麗な顔かたち、

そのまた顔よりも綺麗な心柄、婆婆に居た時に、よしやその心柄には氣がつかずとも、なぜ其の顔が目につかなんだらう。アヽ、おれが惡るかつた。婆婆の事はみな、許るして呉れよと云はれて、梅子はうれしくも耻しくも、袖かみしめてじつと見上ぐる眼にえも言へぬ愛敬の溢るゝ有樣は、さゝ波清き海面にうらゝかなる朝日影さすが如し。

その御言葉はうれしけれど、まだ小露とやちに御心殘りて、又此の上にひよんな事でも遊ばしたら、わたしや、どうせうかと、それが悲しうございますと云へば、そんな事はもう云うて呉れるな。我も娑婆に居た時分は、女一匹のために世を厭ひ、世を厭ふたる末、鐵砲往生までしたる大馬鹿者なれど、

此の世に來ては、もはや、そんなうつけものでは無いそや。浮世にては厭世だの、樂天だのと、己れの小さいこゝろの尺度を以て安りに天地の意をはかる學者の出來損ひもあれど、悟つて見れば樂天もなく、厭世もなし、あれも娑婆に居た時分、これ位の事は知らぬでもなかつたが、心が迷うた、悟りが全く開けなかつた。コレ梅、あれ娑婆に居た時とは全く別の人だ。それでも娑婆の契りは、決して忘れない。そなたの笑顔の見ゆる處があれには第一の極樂淨土。サア、是から何處へでも一所に行かう。あそこに家が一軒見えるが、何だか娑婆に居た時住むだ鹽原の別莊に似て居る、奇躰な事もあるものだと、悟れるが如くにして、とりとめのない事云ひつゝ、梅

子の手を執つて歸り行くに、遠村に鷄の聲して、夜は丑三を過ぎぬ。山は舊に依て高く、水も依然として青く、墜露雨の如き木の間より覗き込む片月の光冷かに山の奥の浮世を照せり。

桐の散りそめて、四山やうゝ〳〵うらさびゆくに引きかへ別莊は俄に賑はしく、笑聲、夜彭祖を驚かして何となく春めきけるが門外の小高き處に建てられて文字も鮮かに猿塚と刻れたる一片の石塔、高尾塚と共に鹽原の名物となりぬ。

松杉問答

山もとに　ふる杉の樹
いたゞきの　松にかたらく、
「我はしも　谷にうもれて、
てらす日の　めぐみにも洩れ、
世の中の　さかえもさちも
白雲の　よそにして　年をへつるに、
うへにそびえて
世の塵を　天の下　ゆたに見下し、
遠くはなれて

大空の　神にも近く
日のひかり　たゞにさすらむ
なれこそは　うらやましけれ。

峯の松　答へけるやう、
「高山も　世の外ならず。
とりよろふ　岩根こゞしく
ときじくも　み雪つもりて、
夏もなほ　吹く風さむみ
幹まがり　枝かちゞむを、
大空の　あらしをよそに

たけたかく
直く生ひたち、
谷川の清きながれに
根もうるほひて、
はびこれる
やすらかに世をすごすらむ
なれこそは
うらやましけれ。」

睢陽城

大地をまきて　おしよする
安祿山の　はたかぜに、
二十四郡は　なびけども、
なびかぬ義士の　鐵石心。
張巡許遠が　たてこもる
心もかたき　睢陽城。
雲霞のごとき　大軍を
とゞめさゝへて　守れるは、
怒濤さかまく　うなばらに、

いはゐの立つが　ごとくなり。」
城にこもれる　つれ〴〵の
睡氣さましに　たちいでゝ、
當るがまゝに　薙ぎたふす、
獅子奮迅の　いきほひに、
刃向ふ敵は　なけれども、
聲援もなき　はなれ城、
兵士はふはく　討死し、
糧食もはや　つきにけり。

（霽雲歸り來る）

霽雲「よくこそ無事に、霽雲どの」。

許遠「進明へのつかひ　大儀なり」。
萬春「かなたの答は　いかにぞや」。
霽雲「まづひと通り　聞きたまへ」。

羊のむれに　ふはかみの
躍り入りたる　ごとくにて、
忠義に凝りし　たぢからの
つゝかむ限り　きりまはり
はらふも強き　太刀風に
ばら〳〵ばつと　木の葉武者
にぐるを追うて　一方の

血路をひらき　やうやくに
進明の陣に　つきにけり。

雲そも睢陽の　要害は
江淮第一と　聞えたり。
かの城もしや　落ちもせば。
賊はます〳〵　時を得て
天下にひろく　跋扈せむ。
さるに糧食　はやつきて
城はいよ〳〵　危きに、
一臂の力　そへてんや。

一日もはやく　援はむと、
われも心は　はやれども、
兵備は未だ　とゝのはず、
いま暫くは　待たれよと、
言葉たくみに　濁らせて、
われをば長く　とゞめむと、
酒宴に添ふる　いと竹の、
ふし面白く　もてなせり。

雲城中すでに　食つきて、

ひと月あまり　人々は、
米ひとつぶも　口にせず、
木の皮のみを　食へるを、
われいまひとり　美酒に醉ひ、
佳肴に飽くに　恐びんや。
よしや口には　食ふとも、
いかでか咽に　くだるべき。
御身は食まずや　唐の祿。
御身は受けずや　唐の恩。
さても義を見て　なさゞるは、
これ勇なきの　匹夫ずや。

御身強兵を　もちながら、
賊にくみせず、　官軍に
力あはする　こともなく、
手を袖にして　たゆたふは、
忠をわきまへ　義を知れる、
人の所爲には　あらぬなり。」

慨然として　たちあがり、
進明をきつと　にらみつゝ、
やつと呼ばはる　ひと聲に
指をくはへて　噛みおとし、

口にふくめる鮮血を
空にむかひて吐き出せば、
堂一面にくれなゐの
霧立ちのぼる。

雲われは使命を身にかぶ
かなたに行きし甲斐もなく
使者の一分たゝぬなり。
もとより惜しき身ならねど
賊のほろびむ時までは
なほすてがたきこのからだ。

運命つきむあかつきは、
公等とこゝにもろともに
城をまくらに死なばやと、
斷ちたる指をとゞめ置きて
恥をつゝみて歸り來ぬ」。

花も實もあるものゝふの
心のそこをくみわけて、
こぼす涙やそでの雨
一座しばしは聲もなし。

遠「運命こゝに　きはまりぬ。
今は人をば　頼むまじ、
公等と共に　この城に
武士のかばねを　さらしてむ」。
巡「さるにてもかく　餓ゑはてゝは、
太刀をふるはむ　よしもなし。
今日はからずも　肉を得ぬ。
いざ近寄りて　もろともに
食ひたまへや、あくまでも」。
春「こは近頃の珍味なり、
そも如何にして　得たまひし」。

巡「何をかくさむ　これはこれ
我が亡妻の　肉にこそ」。
雲「夫人の肉とや、こはなんと」。
巡「公等驚く　ことなかれ。
妻がいまはの　こゝろざし
かたりいだすを　聞きたまへ」。
言ひ甲斐もなき　女子の身の
御國につくす　術もなく
死ぬに死なれぬ　このからだ、
むなしく野邊に　くちむより、

せめて忠義の　ますらをの、
うゑたる腹を　こやしなば、
數にもたらぬ　賤が身の
世にありがたき　ほまれなり。

「あはれ公等が　この月日
食乏しきも　かへりみず、
たゞひと筋に　忠勇の
道をまもれる　心根は、
わが肌さきて　もてなすも、
なほ足らざるを　覺ゆるに、

いまその餓を　よそにして、
妻のいのちを　惜まむや」。

食ひたまへと　すゝむれど、
答ふるものは　絶えてなく、
鬼を欺く　ますらをの
目にも涙の　ひと時雨
袂をしぼる　ばかりなり。

「さらば公等は　わが盡す
好意を無にし　たまふかや」。

遠「かく言はるれば　是非もなし、
烈女の肉を　賞味せむ」。
春「烈女の肉を　賞味せむ」。
雲「われもその肉　賞味せむ」。

一時は餓を　しのげども、
いかでか長く　つゞくべき。
うたれ〳〵て　生き殘る
決死の勇士　四百人
國家のために　身をつくす
心ばかりは　いさめども、

無殘や饑に　病みはてゝ、
今は手足も　たゝぬなり。

(兵士入り來る)

兵士「覺悟めされよ、賊兵は、
はや城門に　押し入りぬ」。
巡「いざや最期の　軍せむ。
用意はよきか　許遠どの」。
遠「嗚呼無念やな　腰たゝず」。
巡「そなたは如何に　霽雲どの」。
雲「無念や、われも　腰たゝず」。
巡「萬春どのは　如何にぞや」。

春われも無念や、腰たゝず」。

張巡ひとり　立ちあがり
進むとすれど　よろ〳〵と
たぢろく足を　さいへかね、
つるぎを杖に　とゞまりて、
無念の涙　はら〳〵と
西に向ひて　伏し拜み、

巡「臣張巡が　運拙く
力も今は　つきはてぬ。

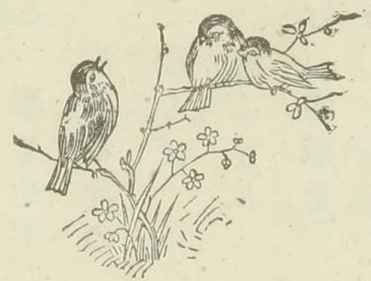
生きて陛下の　大恩に
むくいまつれる　事もせず、
むなしく露と　消ゆる身の
いまはの一念　願くば、
鬼ともなりて　思ふまゝ
はらひつくさむ、　逆賊を」。

(賊兵亂入して諸士を捕ふ)

死ぬる今はも　色かへず、
まなじり裂けて　血を流し
賊をのいしりて　いさぎよく
嵐にちるや　花ふぶき

かをりも深き
物のあはれを

双廟に、
とゞめけり。



女ごゝろ

百合を折らむと　たちよれば、
にほふ女の　ゆりのもとには　蛇すめり。
つらや、　やはは胸に、つるぎを　かくすめり。

見よや、情も　ふかくさの
少將は雪に　うもれけり。
見よや、ちぎりし　橋のもと、
尾生は水に　おぼれけり。

女ごゝろの　まことなき
かりの契りの　はかなさは、
宵にほのめく　いなづまの
有るかと見れば　消ゆるなり。

柳の糸

春のひかりを　うちよせて
ふくや川べの　こち風に、
なびくと見せて　またかへる
こいろもつらや、　いとやなぎ。

なびきもはてぬ　ものならば、
よそによきても　吹かましを、
にくや小枝の　なよやかに
吹きさしぬれば　まねくなり。

かたみの言葉

川をわたりて　ほそながく
さしゝ柳の　影きえて、

ふく秋風の　末とぼく
夕日は山に　墮ちにけり。

住みもなれにし　わがつまの
風にえ堪へぬ　かどべの水に　葉もくちて
花のさかりも　夢なれや。

たちいでゝ行く　つまの家
これをいまはの　見納めに
見むとはすれど　見えわかず、
空もなみだに　くもりつゝ。

にしきの衣　玉の輿
心もそらに　あこがれて
いさみて來にし　道のべの
草木をみるも　はづかしや。

年のとゝせを　夢とみて
色もうすらぎ　今はさださへ　過ぎし身の
ふいぎの花を　香もうせし　誰か折る。

親同胞は　うせはてゝ
いでねばならぬ　還らむ家も　なけれども、
せめてふはへよ。　つまの家
千草にむせぶ　夜の霧。
聲はして

行末とはき　空に消えゆく　木枯しの
まがみは月に　荒野原、
はやも家路に　吹ゆるなり。
かへりてよ。

ふかき情も　わが身を送る　小姑の
かなしさ　なかゝに
ばかりぞや。

われのとつぎし　そのかみは、
いましは猶も　いとけなく

けしをかしらに、戴きて
遊びたはれし　身なりしを。

寄するもはやき　年浪の
とゝせの程に　らうたけて、
むかし我身の　とつぎたる
同じよはひと　なりにけり。

ねよげに見ゆる　若草の
少女姿も　なよやかに
人を見る目も　はちらひて

戀知りがほの　いとしさよ。

遺しおく

せめてかたみと　かざしに添へむ　ことの葉も、
今の我身に　かへりみて
らきたる人に　戀するな。

國家の盛衰

青丹よし、奈良の都は荒れはてゝ、伽藍、徒に古の名殘を留め、星月夜、鎌倉の府は廢れつくして、陰鬼空しく雨に哭す。英雄の骨も、朽ちてはまた土塊と擇はず、美人の髑髏、時に鋤犂に觸れて出づるも、誰か當年の俤を認めむ。東流の水、一たび逝いて復た返らず、人間の富貴、果して能く幾時ぞ。塞翁の馬上、歳月徒に過きて、邯鄲の枕頭、芳夢早く覺めぬ。げにや、祇園精舍の鐘、諸行無常の聲にひゞき、沙羅双樹の花、盛者必衰の色に出づ。萬里の長城、未だ全く成らずして、山東既に亂れ、坑灰なほ温かにして、咸陽の宮殿、三月紅なり。あはれ、萬世無窮と

期せし始皇が遺圖も、忽ち二世にして盡きぬ。盛なる者豈に竟に久しからんや。

干戈、天下に旁午して、兵馬倥偬、肝腦長へに地に塗れ、腥風到る所に吹きすさぶ。間は、文化の芽の萌さむ由もなけれど、一たび、馬は華山の陽に歸り、牛は桃林の野に放され、堯雨舜風、太平の氣象、融々として起るに及びて、文化の芽、茲に始めて萠す。太平、愈續きて、文化いよ〳〵進む。文化いよ〳〵進みて、生活の程度いよ〳〵高まる。所謂治に在て亂を忘れざるの危機、實に此際に胚胎す。祖先百戰の山河に生れ、出でゝ、目に旌旗の翻るを見ず、耳に鼙鼓の轟くを聞かず、文恬武憙、安きに慣れてまた危を想はず、人益利口になりて益死の惜しき

を知り、欲に趨り、利に就き、舌頭には能く風を生ずるも、腕は虱を捫るの力だになく、風俗の奢移に赴くにつれて、人心軟化し、柔化し、終に腐敗す。文化の餘弊、是に於て極まる。一旦緩急あらば、安んぞ能く之に當るを得んや。天下はもとより殺伐の氣多くしては、能く治まるものにあらねど、水靜かにな れば、則ち腐敗す。文化長く續けば、則ち亂世に養成せられた る美風全く消滅す。敬虔の心は阿諛の心となり、剛氣の習はしば柔弱の習はしとなり、敦厚は輕薄となり、誠實は詐僞となり、義理は黄金と代り、忠臣愛國の念は、自利私欲と代り、天眞爛熳の態は、矯飾妖粧となり、かくて國家の元氣、内に盡く。外に一時の盛觀を呈するも、瓶裡の花の如く、久しからずして、自から枯れんとす。これ別に耳新しき説にもあらず、歴史は實に吾人に向つて、常に之を語るなり。

世界の文化は、もと中亞細亞高原より出てぬ。而して印度は、亡べり、波斯は亡べり、アッシリヤは亡へり、埃及も亡べり。荒涼たる山河、當年の殘礎を覓めむとするも、また得べからず。歌舞の地、鳥雀空しく悲しみ、古塔、月影の寒きに鎖し、蔓草武夫の夢を封す。夕陽にむかしを問へば、悲風千里より來り、荒墳に英雄を吊へば、零露長へに冷かなり。嗚呼、榮えし國は亡びぬ。文化の最も早く開けし國は、最もはやく亡びぬ。而して取て之に代りし者は、當時未だ榮えず、文化の開けざりし國にあらずや。

希臘は歐洲中にて最も先きに開けし國なり。其燦爛たりし文化は、今なほ之を討ぬるに足る。而して希臘は、紀元前はやくも、北方の、文化の光被せざりしマセドンの爲に征服せられぬ。波斯は希臘よりなほ早く開けたる國にして、希臘をも夷蠻と侮り、幾度の大軍を發して之を討ちしが、波斯ほど文化の古からぬだけに反て兵力は強く、果てはマセドンより起り、未た長く希臘の文化の空氣を呼吸せざる歴山王が鐵蹄の下に蹂躙されぬ。かくて、豪氣八紘を蓋ひ、雄圖世界を卷きたりし歴山王も、一たび波斯の空氣を呼吸し、その女子のやさしき手振ゐ接するに及ひて、酒に荒み、色を漁し、爲めに其天命を縮めて、夭折せり。歴山王は實に劍を把て波斯を倒せり、而して波斯はまた文化の暗刃を以て之を報したりといふも、必ずしも過言にあらず。まことや宴安は鴆毒なり。看來れは、英雄の事を誤るもの、獨り酒と色とのみにあらざるなり。

羅馬は希臘に次いで開けし國なり。其強盛なること、實に世界に比なかりしも、文化の餘弊は、其元氣を銷磨せしめぬ。百代の勇王、エキサンチーブスを辟易せしめ、萬古の名將、ハンニバルを凹ましたりし當年の羅馬人の子孫も、あはれや、アルプル以北の野蠻人の爲に亡ぼされぬ。其餘蘖、大にコンスタンチノープルに榮えて、第二の希臘を現出せしも、これも亞細亞にて未た開化せさりし土耳古の爲めに滅せられて、

其文華も一時は當時始めて用ゐ出したる大砲の丸に摧碎せられたるにあらずや。なほサラセン人が歐洲の南部に亂入せしを見よ、當年の蒙古人種が歐洲の東部を蹂踐したるを見よ、今日歐洲に在ても、文化最もすゝまざる露西亞の兵力の尤も強きを見よ、總ての點に於て、未開國は開化國に負くるも、唯兵力に訴ふる競爭のみは、つねに之が勝を制する事は示せるにあらずや。

之を近く支那に覓むるに、六國を平呑せし者は、當時文化の最も備はらざりし秦にあらずや。爾來自から中華と誇り、他を夷蠻とけなし來りしも、此夷蠻に一たび亡ぼされて金となり、二たび亡ぼされて元となり、三たび亡ぼされて、今の清

となれるにあらずや。清も今はは腐敗しぬ、更に代て之を取るものは、果していづれの國ぞや。

更に之を我國の盛衰に考ふるに、文化大に熟せんとすれば、國力常に消耗せり。神力皇后が三韓を征伐し玉ふに至れるまでは、我國の未だ全く開化せざる時にして、また國力の最も強き時代なりき。佛教入り、儒教入り、外國の文化、我國に侵入するに至りて、わが國力漸く衰へぬ。平安朝は、文化の餘弊の其極に達せし時代なり。平安朝と始終せし藤原氏が、一族朝廷に跋扈し、長袖緩帶、遊戲これ事とし、泰平に慣れて武を講ずる者なく、春の朝に花を歌ひ、秋の夕に月を咏じ、優柔、習をなし、淫靡風をなし、征討邊防の事は、一に源平二氏に委し、

武士よ、地下人よとけなし去りて、之を齒牙にだに懸けざりしが、時勢は一轉しぬ。やさしき筆執りて、優劣を歌合せに爭ふの時代は去りて、愈劍を勢りて、天下の權を爭はざるを得たる時代は來りぬ。而して、言ふまでもなく、藤原氏は、當時文化の感化を被らざりし武士の爲めに蹴落されぬ。平氏藤原氏に代りて、天下の權を握るにいたりしも、不幸にして、空氣の腐敗したる都門に居を占めたれば、彼が一族子弟見る〳〵優さ男となりぬ。春風簾前、舞腰裊々として、滿都の女兒を腦殺したる紅顏の美少年が、富士川の水鳥の聲に腰をぬかしたるもまた怪しむに足らず。一門浮沈の際に臨みても、歌集を懷にし、琵琶を抱き、横笛を吹く風流才子のみ多くして、知

盛敦盛の二三人を除くの外、また武士らしき者なかりけれ。ばこれも言ふまでもなく、源氏のために亡ぼされ了りぬ。源氏、北條氏は、京華の地を去りて、當年の東夷の中心ともいふべき鎌倉に居りたれば、急には軟化せざりしか、足利氏は、平氏の轍を蹈みて、京洛に居りたれば、早く墮落し始め、其軟化したる心の跡は、金閣寺、銀閣寺に殘り、實力未だ添はずして、早く驕奢に耽り、尾大掉はず、十三代の間、紛々擾々として過ぎ去り、遂に義昭に至りて、全く滅びぬ。義昭は家を亡ぼせしほどの人にて固より將軍たるの伎倆はなけれど、さすがに文化の餘德、否餘弊には、天公亦慰吾生否、月日蘆花淺水秋なんど、詩だけは、到底、當時の武士の眞似の出來ぬほど上手な

りき。足代氏に代て天下を取りし信長を見よ、彼は三好の舊臣の心を盡くして鹽梅せし第一等の料理を食ひて、まづい物喰はすと怒り、第二等以下の料理を舌打鳴らして飽食せしまでに、都人士の贅澤の味を知らざりし無骨漢なりしにあらずや。德川氏は草茫々たる武藏野に府を設けしが、當年の風流男の言問ひし鳥の名の懺をなして、山奥ならねど、住めは茲も都となりぬ。武者類なかりし三河武士の子孫も、花の大江戸に、大平の春に醉ひ、河原乞食に接し、淨瑠璃に耽り、章臺に流連して楊柳を折るに至りては、骨は海月よりも軟かになりぬ。此際からかとんとに觸るなら觸れ、腰の朱鞘は伊達じやないと歌ひて、公然獸行をなしゝ南海西海の武士

のぶつつなるは此上もなけれども、ぶつつなるだけに、都門の弊風に軟化せられず、豪氣發する所、勤王の魁首となりて、終に能く幕府を倒しゝにあらずや。漫に文華と云ふ勿れ、漫に開化と云ふなかれ、文化はなほ酒の如し、酒を飲むものは、必ず醉ひ、文化に耽める國は必ず亡ぶ。歴史は正直なり、常に人間に向てこれを語れども、ふずや、魚市に入て腥きを知らず、大平の安きに慣れて、人また危きを思はざるなり。嗚呼國家昏亂して、忠臣現はれ、天下大平にして、小人陸梁す。輕裝肥馬の間に醉生夢死する者、共に古今の興亡を語るに足らず、悠々たる行路、誰に向ひてか邦家百年の大計を說かむ。一窓の夜雨、そゞろに古を憮し、慨然として眠る能はず。机を叩い

て大息すれば、孤燈耿として三尺の秋水寒し。

少女子

あはれ雪ごと　少女子よ。
あまつ空より　あもりたる、
世にも稀なる　御神とばかり　仰がれて、
人のたねとも　その、さまは、
思はれず。

あはれ美しき　少女子よ。
いましが清き　まなこには、
のぞみの光り　かゝやけり。

あつき情の　やどるらむ、
ゆたけき胸の　やはらかさ。
あはれやさしき　少女子よ。
花よりあかき　唇を、
春風かよふ　もるいも清き　その息に、
心地して、
むくろも解けむ　ばかりぞや。
あはれなつかしき　少女子よ。
われを憐れと　思ひなば、

浮世の塵にまつはれて
さけむばかりの　わが頭
のせて支へよ　その膝に。
あはれ戀しき　少女子よ。
髪はふもひに　うちゆるげ。
口はなさけに　動けよや。
紅もひにもゆる　わが舌に
しばし許せよ、その頬を。

涙の味

くらく悲しく　れそろしき
浮世のやみに　風あれて
雨にふけゆく　春の夜に、
泣くもうれしや、　二人して。

嗚呼われつらき　世の中に、
なさけやさしき　少女子と
はかなき戀に　泣きしより、
涙の味を　覺にてき。

かた袖

わが首途のいはひに、親戚や近隣のえたしき人々を招きて、親がもてなす心ばかりの酒宴の、上座には、本家の宗十郎と、て、頭の中通りは禿げつくして、てら〳〵と毛一本もなけれど、さりとては顔肥りて赤く、まだ皺ひとつもなきに、その年齢のいつも一座の問題となりけるが、黒紹の五つ紋の羽織に袴、扇ばちつかせて、しかつめらしく坐りたるを此夜の上客として、それより左右に居ながれたる二十人あまりの客の挨拶すめば、杯のとりやり忙しく、この春の試驗に、わが筆頭一番にて卒業せしことより始めて、平生おとなしきこと、

勉強なることなど數へたてゝさてもいかにしてこのやうな善い御子が生るゝ事ぞと、口々に褒めそやされて、われはたゞ汗を流すばかりなるに、さすがに父は微醉機嫌の口先輕く、これが世に云ふ鳶の生んだ鷹でがなござらうなどゝ覺えず頭を叩いて合槍うたるゝに、今更に恥しく、聞くにえ堪へてうつむけば、明日はいよ〳〵おたちかさて東京にては何と云ふ學校に入らるゝぞ、せめて今宵は一杯すでされよと、飲めぬ口に杯強ひて侑められ、止むを得ず目をつぶりて飲みくだすことも、いくそたび、一座の醉も杯と共にまはるにつれて、今迄話柄の中心となりし我をばよそにして、米の出來のよしあしなど、處柄とて、土臭き話に實が入りたる

樣子なれば、よき折とばつと一息つき、團扇片手に座をたちて庭に出でぬ。雲はれつくして、空一杯の星、息吹かば落ちむばかりの夏の夜なり。今までは氣付かざりし蛙の聲にはかに耳だちて聞ゆ。池水をめぐりて、築山の上にのぼれば、酒席のさわぎは青葉に隔たりぬ。稻葉の上をわたり來て、わが懷をたづぬる夜風、草葉の露をさそひて、身にしみて涼しくさやぐ熊笹の中より迷ひ出でゝ、ふわりと輕く飛びたつ螢の行末遠く、仰げば高き金剛葛城の二山天外へ積翠を横へ、一條の大和川、平野の中に銀蛇を走らすなど、なれにし故郷の山川の景色ながむるも、今宵ばかりと思へば、何となくなつかしき必地す。

われは今故郷を去りて、東京へ學ばむとするなり。年頃日頃起きても思ひ、寐ても思ひたるわが宿望かなひて、われは又他念なし。我が志は大に、わが前途は遠し。われは年少の空想に驅られて、功名手に唾して收むべしと速了し、故郷を去ることをつらしとも思はねば、父母の膝下をはなるゝことを憂しとも思はず、都にのぼりての後の事、學を卒へての後の事など想像に想像を重ねて、そゞろに肉躍、骨鳴りて堪へがたく、心はいつしか空にあこがれて、我身はさらにうつゝとも覺えず、頭自から低り、眼自から閉ぢて、われは寤めながら、未來を夢み、空に滿つるはかりなき樓閣を描き出して、學士の稱號を受くるかと見れば、やがて海路遠く洋行し、今まで佛

蘭西の都にありしかと思へば、忽ち東京の大路に二頭引の馬車を驅りけるに、思ひもかけず後の方にて、かや若さま、此處に居らしてと呼ぶ聲す。

この一聲に、われは空想の夢さめていつゝに回れば、金剛山舊に依りて前に聳え、身は庭の一隅に立てり。覺えず、どなたと口走りしが、耳になれたる聲音に、それと思ひ返して、藤さわ、茲へ來てお涼み、あの金剛山か薄黑う見えて、大和川がほの白う見えて、風にゆらるゝ稲葉のかげから、螢が幾匹も飛び出すなゞは、實に好い景色ぢやないかと、愛想ふりまきしつもりなるに、はいと氣の乘らぬ返事しながら、浴衣姿ほの白く、にならぬ匂と共に我に近寄りて、あなた、明日はもうお

たちあそばすのね、いふもはやうるみ聲なり。

この春までは學校の寄宿にはいつていらしても、日曜毎には、れ歸りになつて、お目にかゝることが出來ましたが、これからはる〳〵東京へいらしたら、またいつお逢ひ申されませうか、わたしは心細くてほゝゝ、このやうに慣れ〳〵しう申して、御免あそばせよと、涙をついむ笑ひ聲さびしきに、われはわざと落付きはらひて、なに、東京へ修業といつても、ほんの四年か五年の間、それに、毎年夏休みと冬休みには、必ず歸つて來るからと云へば、それにあそばしてもとばかりにて、あとはえ云はでさしうつむく。

嗚呼わが功名の念と少年進取の氣象とは、我を驅つて狂せ

しめ、心中のよろづの懸念を排し去りたれど、全く排し難きはたゞ一事、この可憐の少女を故郷に殘し置きて、知らぬ他郷にひとり迷ひ出てむこと、さすがに後髪ひかるゝおもひなきに非ず。されど、この一念、わが功名進取の念とたゝかふには餘り微弱なり。もとより出でゝ歸らぬ旅にはあらず、何事もたゞ功成り、名遂げん後にと思ひ定めたる身のよしや二三年相見ずとても、われと我が心を勵まして、強ひて之れを抑へたれど、今まのあたり此の人を見、その優しき聲を聞きては、胸はまたかき亂れぬ。わが切なる心打ちあけむと思ひしことは、あまたゝびなりしかど、いざとなれば、心憶して、それとは云ひ得ざりし不甲斐なさよ。われ今立ち去らば、

天地の間に、父なく母なく、たよる所なき孤兒の、更に如何なる憂目や見むと思へば、人の涙はまだかゝらねど、わが泣くよりも悲しく、世がまゝになるならば、率て行きて、共に學ばむにと、思ふも其の甲斐なく、さらばとて、少年の客氣の人世は夢、功名は眼を過ぐる雲烟と悟るまでには至らず。われは胸せまりて、仰いでたゞ涙を飲みぬ。

わが家の隣に、木村兵藏とて、さまで貧しからず、また富めるにもあらざる人、年久しく住へり。妹のお龜とたゞ二人の兄弟の、親は貧苦の中に業を勵み、子を育てゝ、家道やゝゆたかになりしほどに、妹のお龜は、大阪の商人に嫁ぎ、兄の兵藏も嫁迎へて、やれ嬉しや、これで重荷おろしたと喜ぶと共に、

年來張りつめし氣ゆるみて、あはれや父はがつくりと先づ倒れ、間もなく母もその跡追ひて往生せしは、わが漸く物心覺えはじめし頃とかや。お龜のとつぎし商人、一時の商業上の失敗に自暴飲より身を放蕩にもちくづしたる末、美しきお龜が今更鼻につきて、色々難避つけての離縁沙汰、お龜薄情なる夫には心殘らねど、たゞ一人の娘の子、かゝる人のもとに置くは氣づかはしとて、親子もろとも泣く〳〵生家へ歸ることは歸りたれど、こゝにも雨洩る木の下蔭の、兩親は已に世を去りて、兄兵藏の夫婦は揃ひに揃ひし義理知らず、人でなしの、不人情の、無慈の、物惜しみの、生爪はがしても、おのれの利得になるものは見遁がさず、まことの妹を妹とも

思はず、しぶ〳〵引き取りたれど、よるとさはるとあてこすりて、出て行けよと云はぬばかりのもてなし、これまで時々生家歸りせし折には、よい身代の家へ行かれて、洵に御仕合と、追從こそ言ひたれ、かくばかり邪見なる嫂にはあらざりしに、兄も嫂の來ぬ前は、かくばかり非道なる人にはあらざりしに、今は食物の好嫌に至るまで前とは打つて變はれるに、これはとばかり、呆れはて〻、人を恨むをにはあらねど、女心の愚痴かのづからこぼれて、涙の乾くひまなく、もとより親子二人とも、只座して兄の厄介とならむをにはあらず、女の痩腕ながらも、裁縫、洗ひ張り、機織り、さては茶摘など、力の限り働きて、二人の食料は入れて、さまで世話にもならざれ

ど、なほよき顔せざるに、さらばとて我家より二町ばかり東の方に、さゝやかなる家を借りて、親子ふたり細き煙をたてぬ。年はは や女盛りは過ぎたれど、器量よく、人柄もよければ、子連にてもと所望する人ありたれど、男の薄情には懲りぬと、世をすね通しけるもあはれなり。

藤子は、この薄命なる佳人の一人娘なり。七八年のむかし、われこの不幸なる親子の事はきゝ居たれど、緣もゆかりもなき他人の事とて、未だふかくは親しみはせざりしほど、或日、他處よりの歸るさ、驟雨に遭ひて、家里遠き野中の路の、一株の老松の蔭に身をちゞめて、晴間を待ちけるに、折りしも通りかゝれる可愛らしき小娘の、われを見て、福井の坊ちやん、

一所にこの傘へはいつていらしやいなと云ふは、顔だけは、相知れる藤子なれば、有難うとて、直ちに松蔭より飛び出して、そのさしたる傘の中に入る。その傘いと古く一處紙が破れて居れど、大人持ちの傘なれば、子供二人を蔽ふには十分なり。藤子の左手に藥瓶もてるを見て、傘はわれ持んとて、いなむを強ひてとりてさしかざし、その藥瓶は、母樣が病氣なのと問へば、はい、れ醫者樣へ藥取りにいつた歸りがけなのよといふを、話の皮切りにして、歩む路すがら、氣になるまゝに、問ひたゞすに、藤子の母は熱病にて病床に臥せる事、働くことが出來ずして日々の費用に困り居ること、されど、兵藏夫婦は、ろくに見舞ひにも來ぬこと、醫者が藥代を催促すること、兵藏の家へ借りにゆきしに、はじめの二三回は、しぶ〳〵ながらも貸して呉れしが、今は見限りて取り合うて呉れぬことなど、聞けばきくほど、あはれにも悲しく、われは子供心にも氣の毒に思ひて、小遣にとて、わが持ちし銀貨銅貨取り交ぜて、袂にあるだけさらけ出し、藤子の家の前へ來りし時、これは、少しばかりなれど、今の御禮にとて強ひて其袂に押し入れて、雨の小止みせしを幸に、一禮そこ〳〵走りかへりて、ありし事、殘らず母に語りけるに、藤子泣く〳〵來りて、さきにわが與へし錢をさし出す。其の由聞けば、御志はうけしけれど何のゆかりもなきに、このやうなもの戴くべき筈あらねば、早く返しまゐらせよ、如何に幼くとも、此の位の分別

はあるべきにと、いたく母親に叱られしとなり。義理がたき人と、わが母も涙を催し、今まで病氣のよしは聞き居たれど、かくまでとは知らざりしとて、更に若干の錢添へて、藤子と共にその家に至りしが、この後も不自由なきやうにと母が度々心付けせしほどに、病やう〳〵輕くなりゆきて、遂に全快するに至りしかば、親子もろとも我家に禮に來り、この御恩、死ぬとも忘れじ、御恩返へしの萬分一には、この身、如何やうにもつかひ玉へ、またお役にたつことあらば、この娘も召しつかはれよと、涙と共にいつはらぬ感謝の意をのぶれば、なんの、あの位の事に、反て痛み入る次第、お娘子もこれからは度々お遊びにおいで。それにまた失禮ながら綾太郎も復

習いたす時は、何にてもれ教へ申しますから御遠慮なくと、學校にゆくの資なきを知りての思ひやりに、親子涙にかきくれ、さらば御言葉に、あまへてと、よろこびて、藤子日毎我家に通ひ來りぬ。思ひもかけぬ相合傘が縁となりて、われは今藤子の師匠なり。平生外に出でい荒き遊び事するを嫌ひ、部屋にのみ閉ぢ籠りて書をよみ、繪を見ることが此の上もなき樂しみなるわが身にとりては、日に一時間ばかり讀み書きを教ふること、反て面白くのみ思はれて、熱心に教ふれば、藤子又熱心に覺え、日としして机をならべぬ日はなく、口輕の下女に、雛人形の一對となぶられ、いよ〳〵親しむにつれて、笑の末の罪なき言ひ爭ひも、はや夫婦喧嘩の御稽古かと冷

やかされしこと幾度ぞや。

親も娘も人柄よくてたよりなく、正しくして不幸なるをあはれとのみ思ひしわが心いつの間にか戀とはなりけむ華美なる粧して、白粉に顔を埋めたるよりも、飾らぬまゝの素顔のうるはしきがゆかしく、藤子が着るものも着得ず、飾るものも飾り得ずして、よろづ物足らぬ有樣は、反て我が心を動かしぬ。母が見兼ねて、夏冬折々の着物與ふれば、涙をこぼして喜ぶ顔見るだにいとゝうれしく、日々母より貰ふ菓子の一半を藤子に分ちて、その喜ぶさまを見ること我に取りては、言ふに言はれぬ樂しみなりき。藤子はさとり早き女性なり。よしや一を聞いて十を知るとまでは至らざるも、わが

教へし事は、能く記憶して、進歩著しきに、われも教ふるに張合ありて、いつも藤子の來るを心待ちにし、その來ぬ日は何となく不快を感じたりき。われ幼年の時は、内氣と云ふよりは、寧ろ陰氣と云ふべき性質なりしに、藤子來るやうになりてより、笑聲日にわが部屋より洩るゝに至りぬ。時にはかなき憂鬱に沈むことあるも、藤子を見れば、忽ち之を忘れぬ。我幼時の家庭は、藤子の爲に春を生ぜりと云はむも不可なし。折々はまた藤子の家をたづねしことありしが、そのふとなしく、やさしく、まめやかに、母につかへし樣は、更に一層我心を動かしぬ。これが眞の妹ならばと思ひしも、われに同胞なきが故のみにはあらざりき。

わが小學校を卒業して中學校へ入りし後も、藤子なほ時々わが家に來て學べり。藤子今は嬌羞を帶びはじめしばかりの年頃の小女なり。無心に笑ひ興じふざけ合ひし昔とは異なりて、互に遠慮するやうになりぬゆかしき少女の顏、たゞいつまでも穴の明くばかり見たけれど、目の視線と視線と相逢ひては、何となく耻かしく、思はず知らずよそ向き、見て見ぬふりし、見ぬふりして見るも、我れながら訝かし。机をへだてゝ差し向ふに、藤子がやさしき鼻息、わが手にかゝりては、身体ぶく〳〵と、嬉しさやら、耻しさやら、今まではづか〳〵云ひし事も自ら口しぶりて、別れて後、あゝ云へばよかりしと悔むこと多かりき。

わが家より中學校に通ふ路は、さまで遠くもあらざるに、父がわざ〳〵われを寄宿舍に入れしは、甘き親の手一つにそだつるよりも、多くの人の中にもまれて、自ら男らしくならしめむとの主意とおぼし。わが陰氣なる性質は、藤子と親しむにつれて、一變してやゝ陽氣となり、寄宿舍に入るに及びて、再變してやゝ活潑となりぬ。望みもおはきくなりぬ。早く中學を卒業して都に上り、大學に入り、世に出でゝ名を成し、功を立てむと思ふ一念、今は絶ゆる間もなく心中にもゆれど、住みなれし家もさすがに戀しく、日曜日を待ち兼ねて、勇み家にかへれば、藤子も必ずわとづれて別になれ〳〵しき話とてはせざれど、顏だに見れば、何となくうれしかりき。

わが身を立つる未來の空想いよ〳〵大くなると共に、また粗になり、たゞ國家の爲め、人民のためにとのみ念じて未だ一身一家のこまかきことに及ぶ遑なければ、末は藤子をどうするとまでは考へ至らざれどかゝる可憐の少女を、我偶よりはなして、知らぬ他人の手に渡さむは惜しき次第とつしか思ひそめぬ。

逢うてはたゞなつかしく、別れてはたゞ逢うて見たく、人の手にわたすはいやなりとのみ思ひし一念今年の春に至りて更に一歩をすゝめぬ。藤子の母の病めりと聞きて、ある日曜日、見舞ひにゆきしに、思ひしよりもやみさらばひけるが、我を見てはら〳〵と涙をこぼし、蟲より細き聲音あはれに、

このやうに疲れましては、もはや助かることは出來ますまいが、たゞ此の娘の行末を思ひましては、どういたしても目がつぶれませむ、此の上の御願には、他にはたよる處のない娘の身、どうぞ見捨なくと、跡は涙に咽びてえ言はず。そのやうな弱きこと言はれずと、安心して療治なさるゝがよい、氣が病をたすけますからと慰めて、寄宿舍にかへりしが、その次の日曜に外出せしときは、藤子の母ははや此の世の人にはあらざりき。

藤子引きとるべき筈の兵藏夫婦が、わの通りの人なれば、可愛想なりと我が言ひだすよりもさきに親が心配して、わが家にて、仲働につかはむと云ひしに、兵藏夫婦もとより異存

なく、藤子はたゞ泣いて喜びしかば、事はやくまとまりて、可憐の少女、今はわが家の人となりぬ。われも又中學を卒業し、寄宿を出でゝ家に歸り、日々顔見合せて、胸はつねにさわぎぬ。さるにても、わが平生朋友と議論などして、口角泡を吹くばかりの勇氣も藤子に對しては何處へやら、幾度かおもひ決したれど、遂にあらはに言ひ出すの勇氣はなかりき。

今霄はからずも人目絶えたる庭の一隅に、たゞ二人相對しては、嬉しさ餘つて苦るしさ言はん方なし。されど思ひかへすに、人目なき處に、わざ〳〵我を尋ね來りて、名殘を惜しみて、平生になくなれ〳〵しく言ひしは、よく〳〵思ひせまりての事なるべし。一度かく思ひ出せば、是迄、藤子の素振の、何

となくそはゝせしも、故なきにあらざりし、我素振も、恐らくはそれと推せしならむ、今はは、はや心の底わざ〳〵口に出す必用もなしといさみたつまゝに、唯藤とばかりにて、思ひにもゆるわが手をさしのべて、闇に白き藤子の纖手を握れば、答はなくて、たゞはら〳〵と我が手の甲に落ちて聲ある情の涙熱く、胸の奥にしみわたりぬ。我がれもひは之に知れと顫へる手にかたく締めて、藤そんなら暫くわはないよ。どうぞ御身体を大切に、お前も無事でと云ふ折りしも、突然、母來りて、綾太郎はそこにかえ、お客樣をさし置いて、何をして居りますえと咎め玉ふ聲、平生のやさしき聲とは異なりて、かどだちて聞えけるに、われは、さながら頭より水かけられ

たるが如き心地せり。

この翌朝、われは出發して、東京へ上りしが、半年毎の休暇には、必ず家に歸りぬ。われと藤子との間は、近くしてなほ遠かりき。

わが母方の縁ある家に、玉子とて、藤子と年輩同じばかりなる少女あり。これも幼時より我家に來なれて、相親しみしが、われは、何となくその人を好まざりき。我幼時の性質、男子にして女子なりとすれば、玉子は、むしろ女子にして男子なり。活潑にして、にぎやかにして、よくしやべり、よく笑ひ、氣輕にして罪なく、惡氣もなけれど、我が打ちとけて親しまざりしは、世に云ふ蟲がすかぬものにや。されど、好かぬ人とて、われ

よりすいみ出でいあらはにこれを隔つるほどの勇氣もなく、うはべは仲好く遊びしかば、人には更なり、玉子にも、わが心それとは見ゆざりしなるべし。

玉子と藤子とを比ぶれば、藤子は海棠のやゝさびしきが如く、玉子は牡丹のにぎやかなるが如し。玉子のからだは、肥にたりといはむよりは、痩せたる方にて、藤子のからだは、痩せたりと云はむよりは、肥にたる方なり。藤子の顔はやゝ圓く、玉子の顔はやゝ長し。色はいづれも白けれども、藤子のやゝ黑きは、貧に苦るしめるが故にや。玉子の目は、ぱつちりと涼しく、藤子の目尻は少しさがりてかはゆらし。殊に玉子は富みたる家の娘なれば、衣服髮かざりずべて美をつくして、手

入よき花壇の花とも見るべく、藤子はなりかたちを顧る暇なくして、ありのまゝに打ちまかせたるは、日陰の花とも見るべし。よしや器量は下れりとするも、藤子があはれなる身の上は、まづ我が心を惹きけるに、器量とても下れるにあらず。殊に玉子が性質活潑なるに反して、藤子のあくまでもおとなしく、しとやかにして、而かも陰氣ならざるは、何となく我が心にかなひぬ。われは藤子を愛すといはむよりは、むしろ隣れみたるなり。人なき折々、やさしき言葉かけていたはれば、はやほろ〳〵と涙くむ有樣に、やさしき女性と、われも覺ゑず涙を誘はれしことも幾度ぞや。

我母も、藤子を愛してつねに其の人柄をほめたれど、そはひ

と通りの情けにて、玉子の方が更にその氣に入れるが如し。玉子の來る日は、機嫌とりわけてよく、折々いさかひすれば、理非はたゞさねで、頭ごなしに我を叱るがつねなりしに、客大事と思ふこゝろのみにもあらざるべしと思はれぬ。

玉子、鄕里の高等小學校を卒業して後は、西京に出でゝ、高等女學校に學べり。たちの好き藤子にも深く學ばしめなばと思へど甲斐なし。ひと年の夏、休暇の期限、盡くるに垂んとして、明日は出發せむとせし日、母といろ〳〵物語りの末、母は言葉を改めて、丁度明日は玉さんもわたちだから、京都まで一所につれていておあげ、今日うちへ來て一晩とまつて、そして明日こゝから一所に立つやうに約束してあるからと

いふに、さうですかと氣の無い返事して何思はず、藤にも今少し學問させて見たいものですがと口走り、後ではつと思ひしが、母は忽ち聞き咎めて、そうは手が廻りませぬ、藤は萬事おつかさんが引きうけて世話するから、お前まてが心配しなくてもいゝよと、はや目に角たてまへる樣子なるに、我もこのまゝにてはすまされず、今の女子は學問すると、誰でもお轉婆になりますが、藤のやうなおとなしい人ならは、まさかさうでもあるまいと、ふと思つたのですと云へば、それでもお前、ふとなしいばかりが能でもありません、玉さんを御覽なさい、利口で、はき〳〵して品もよいし、家柄もよいし、それは〳〵藤なぞのくらべものではありませんよと、意味

ありげなる言葉、うちけさむと、口までは出でたれど、われを見つめ玉ふ眼の、あまりに眞面目なるに、われとてゝろを抑へて、そのまゝ止みぬ。

これといつて話すべきこともなけれど、またしばらく逢へぬ別れとおもへば、何となくしみ〳〵はなして見たく、強いて要事こしらへて呼びよせて、眼にもの云はするがせめての心やりなりしが、待たぬ玉子、はや旅の用意とゝのへて來りて、われになれ〳〵しく笑ひ興ず。われ京都の惡口いへば、玉子は東京の惡口言ひ、互ひに學ぶ土地の最負して、からかひあひたる末ふとした事が氣にさはりて、はては口のみにといがまちで、手を出して爭ひしさま、通りかゝりし藤子の目

には、如何に見えけむ、翌朝出立の時見れば、藤子の目泣きはらしたる痕あり。ひと夜も何に泣きはらしたる涙ぞと、東京に上りての後も氣にかゝりし。

その年の冬休みは、さゝはることありて、郷にかへることを得ず、あくる年の夏に至りて歸りて見れば、藤子ははや我家に居らざるに、われは胸まづ潰れぬ。どうかしましたかと母に問へば、たゞ暇を出したとばかり、何かあやまちでもありましたかと問へば、別にあやまちはないが、少しこちらに都合があつてと、至極曖昧なる答なり。われは、心も心ならず、或時、下女を物陰によびて問へば、いい人でも出來たんでせうよと笑うて取合はず。じやうだんも時による、本氣で聞くに、

人を馬鹿にするならして見よ、われにも、おもはくがあると、見幕するどく叱りつけゝれば、まつぴら御免あそばせ、實の處、お藤さんは、お家からお暇が出まして後、しばらくは、伯父さんの處に居られましたが、伯父夫婦と云ふは御存じの通りのよくない人で、それはゝひどい目にこきつかう末金にこまる事があつて、龍神へといふのを、お藤さんが血の涙をこぼして、それだけは許してと承知なさらぬので、とうゝ前借にて國府の宿屋へ女中に出したと申すことでござりますと云ふ。して暇が出だわけはと問へばそれはわたくしにも分りませぬが、邪推いたしますればと云ひさして俄に口をつゞむ。決して他言はせぬからその邪推はないしてくれ

よいと云へば、若様も大抵御察しでございませうがと前置れきて話すを聞くに、わが多少疑ひしことと、全く符へ申しぬ。母は我に玉子をと思ひ込み親類中の内談もぱゞとゝのひたれど、わが藤子に意あるを知りて、家に置きてはいつまでも邪魔物、間違のなき内に遠ざけなば、心の移ることもやと、わさはかにも思ひとり着に腹はかへられずと強いて心を鬼にして罪もとがもなきに、たよる所なしと知りながら、世にも可憐なる少女をば家より出し玉へるなり。許るさせ玉へ、母上、藤子さらばわれもまた去らむ。藤子死なばわれもまた死なむ。親の子なれば、わが氣質は知らせ玉ふべき筈なるに、藤子の外に心移すべき薄情男とおぼし玉へるもうらめし。

況んやわが藤子にたつる心中をだゞ若氣の出來心とのみ速了したまへるもくやしや。

若様も罪作りですよ、お立ちになつてから後と申すものは、お藤さんまるで氣抜けがしたやうで、ぼんやり立つて東の空をながめて見たり、うつかり灰に福井綾太郎と若様の名前をかいて、人に見付けられて、眞赤な顔して、言ひわけするなどは若様しほらしいぢやありませんか。若様がおまれやさしすぎるものですから、お藤さんが首つたけにおなんなすつたのも無理はありませんは。若さまもまむざら憎くうはございますまい。ほゝ、思ひ思つた中ならば粹をきかしてお添はせあそばすが、親御の慈悲と申すものだつて

さうざやでございませんか若様と、おぢや、我れいまは下女風、情の手玉にとられてぐうの音も出でず、からかひ半分の親切でかしも今はうれしく親がせめてこれだけさばけ居らばと涙なり。

兩親の慈悲深き故郷の家庭も今は鬼の住家とのみ思はれぬ。國府の宿屋といふのをたよりに、心も空にあくがれ出でて、奈良の方へと稱して、國府にたづね行きしに、すゝけたる小驛の家はづれに一軒の旅店あり。他に旅店なければ、この家なるべしと思ひ定めて立ち入るに、見掛けに似合はず可成りひろき旅館なり。廊下をいくたびも廻りて、楷子段を上り、二間經て、六疊の一室に入る。この二楷の建物は、このごろ

たてつぎたるものと見えて、材木なほ新たなり。この室には、床つき居りて、このあたりの村夫子の作と覺しき詩の書きぶりも拙き一軸の掛物かゝれり。二方あけはなしにて、風通りよく、南は田に面し、金剛山、欄干を抽いて青し。日はなほ未だ落ちざれど、時刻は、早や七時に近く、鎮守の森のかげ三四町ばかり長く地に曳きて、その末がこの樓の障子の半ばに及びぬ。さて案内せし者、茶と菓子とを持來りしもの、浴衣も

て來て風品に案内せしものと、それ〳〵女中が入りかはりたれど、藤子は影だにも見ねず、されど、在來の經驗によるに、飯の給仕には、その旅店にて、尤もすぐれて姿よきものが來るためしなれば、われはなほ一縷の望みをつなぎて待ちけ

るに、夕飯を持て來しは、果して藤子なり。我を見て飛びたつばかり驚きて、扨や、福井の若樣、こゝへはどうしてと、言葉さへあらたまれり、顏はもとのまゝに美しけれど、からだいたく肥りて、絞りの浴衣に、數寄屋の前垂かけたるさまは、またもとの藤子にあらず、わづか一年の間にかくまでも變はれば、かはるものかと、われはまづ心に泣きつ。

何處へおでましになりますと問はれて、扨前に逢に來たと云へば、それは有難うさまとて、打ち笑ふさま、思ひの外に平氣なり。しみ〳〵話しするに酒なくてはとて酒をとりよせ、飲めぬ口とは思ひながらもまづひとくち献せば、これも思ひの外快く飲み干すなど、もとの藤子とはうつて變はれる。

仕打なり。何時の間に飲むことを覺にしずといぶかれば、酒がのめなくては此の商賣は出來ませぬと云ふ。此の商賣するやうには誰がした許るして呉れよ、藤。そなたも、我母に恨みがあらう、我もあると同情を求むれば、あら勿体ない、せめて萬分一の御恩返しには、私が御家を遠ざかるより外には道はござりませぬ、どうぞ玉子さまと行末久しくとは、竟に隱しても隱し得ざる藤子の本音なるべし。母はともあれ、わが心は知り居るべき筈なるに、さりとは水臭いとうらめば、いやもう若樣の扨情は、よくわかつて居りまする。その扨情の扨やさしいのが、今では結句恨みでござりまするとも解けぬ風情なり。

藤子のうたがひは、口先ばかりにては言ひとくべくもあらず、たゞ氣長くわが身の行にてと思ひさだめて、この宿屋の料理屋を兼ねたるを幸に、晩方より出懸けて、夜ふけて歸ること多かりしが、さすがに藤子も幼情染のむかし語りては、覺にず涙に沈むことあり。肥れる腕をさすりて、お家にて、いたはつてお使あそばされた頃は、このやうでありませんでしたが、こゝへ參つてから、楷子段の上り下りから、長き椽側の拭掃除と、朝から晩まで休まるひまもなくこきつかはれて、この通りの手になりましたと溜息つくは、例の女氣とあはれなり。いやらしいは、近在の若者、人に無理に酒のませて、錢にぎらせて、いやらしいことと言はるゝ度毎には、命がちい

まる心地がいたしまする。孫までである村長さんが、禿頭の六十面さげて、毎度來てよつぱらつて、抱きついて柿のくさつたやうな息をふきかけられ、かなしいやら、腹がたつやらと、聞けば聞くほど悲しき藤子の身の上なり。

心はくだくるばかりなれど、今が今とて藤子をたすくる力なければ、たゝ暫らくの辛抱となぐさむるのみ。母に藤子をよびもどさむことをすゝめたれど、聞き入るる樣子なければ、我はたゞ心みだれて、家はよそに、しのびて國府にかよふほどに、今年の夏もつきぬ。われいま大學にありて、規則のゆるやかなるにつけこみて、休暇の期限つくるも、なほ二週間ばかり滯在せしが、かくてはてしあるべきにあらねば、遂に

思ひ切りて、また東京にのぼりぬ

この冬また歸り來り、例の國府の宿屋に赴きけるに、藤子居らず。聞けば、一月ばかり前に、龍神の方へ移りぬと云ふ。嗚呼龍神は、色を鬻ぐ人間溷濁の港なり。一時は氣を失はむばかりに驚きたれど、あの清淨可憐の藤子がよもやとおもへば、また疑ひを起しぬ。樓の名はと問へば、たしか雲州樓と云ひましたと云ふに、全くねのなき事ともれもはれねば、今は氣も氣ならず、そのまゝ旅店を飛び出しぬ。

藤子果して龍神の遊廓に行きしものとすれば、藤子はもはや純潔の處女にあらず、汚れたる女なり、我心を思ひも汲まむ不實の女なり。この年頃、眠られぬ床に藤子の寫眞ながめて、心に描きし未來の理想は、こゝに全く消滅しぬ。藤子が恨めしくもあれば、また可愛想にもあり、いやらしくもあれば、また ゆかしくもあり、方寸たゞかき亂れて、今は分別もつかず、身は絶望の谷に陷りたれど、ひとすぢに愛慕せし心は、なほ未練となりて殘れり。その未練は、藤子を辨護して、よくよくの事情あるべしと、一たび思ひ至れば、一目なりとも逢うて見たくなりぬ。われはすべての未來の希望を斷ちたれど、藤子其人を斷念する事能はず。訝しや、平生芥溜よりも穢しと嫌らひたる遊廓も、藤子が行きたる所とれもへば、さまで不潔とも思はず、藤子を清淨純潔なる少女と信じ切つたる我が一念は、遊女のためにうせず、我藤子に對する行末のす

べての希望はうせはてたれども、たゞ藤子に逢はずには居られず、我が氣のうせたるもぬけの殼は、この一念に驅られて、前後の分別もなく、車を龍神の遊廓に飛ばしぬ。

千鳥の聲に、冬の夜更け初めて、茅渟の浦より吹き來る北風潮氣を帶びて、寒く、高く、小き冬の月、空に澄みて寂しけれども、龍神幾條の花街は、紅燈絃歌の聲を照らし、浮かれ歩く人の足音乾きて高し。此の遊廓の内にて、やゝ上等と見ゆる中通りには、雲州樓と云ふ貸座敷なければ、その左右の幾條を彼處此處とたづねゆくに、こゝは客種も下りて、銅色なる顔を手拭に埋め、土手羅一枚にて、寒さうな風もなく、鼻歌輕く歌ひつゝ、三人或は五人つれだちて、一軒毎に覗き歩くは、い

づれも楫を枕の寢覺寂しき浦の泊りの舟夫とおぼし。嗚呼、われ色を漁せんとにはあらで、二重外套の頭巾目深く被りて枉げてかゝる賤しきものゝ中に交り、泣いて足を人間溷濁の地に投ずるは如何なる因果ぞや。

漸く看板に雲州樓と記せるさゝやかなる一軒の貸座敷を見出して、暖簾くゞりて覗けば、鶉格子の中に襠褲姿はなやかに、六七人ならびて坐はれるが中に、格子より二番目の女は、たしかに藤子なるがあれは、二重外套の頭巾に、目と鼻とばかりを出して、人目をつゝみたればそれとは氣付ぬ樣子なり。袖引かるゝまゝに、躍れる胸をしづめて、二階に上れば、どの子になされますと問ふ。格子より二番目の女と云へば、

それならば、此の室へとて障子開きて導きたるはわづか三疊の小室なり。白き巾かけて室一杯に敷き延べたる薄き蒲團の、後の方高まれるは、火閣入れたるにや。上の方の餘地には、丸行燈の光りかすかに、二個の枕を照らせり。これはあまりなる有様と、蒲團の上に打俯して、たゞ涙をこぼしぬ。やがて、楷子段を登り來る足音、障子の外にとまるかと思へば、障子のひらく音して、裾揃きしなやかに、えならぬ匂と共に入り來りてやさしき聲に何と云ひけむ、或耳にはしかと聞きとれず。打俯せるわれをゆすりてどうなされましたと云ふに思ひ切つて仰向けばおやとばかりに呆れて物言はずそなたは此様な所へ來てわれを思ひ死に死なするつもりか

と恨めば、これには段々深い仔細が御座りまするが、どうぞ聞のがして下さりませ。非道な伯父を持ちましたが、この身の不運、酒に覺えを失ひて、夢に身を汚がしたと、申すも耻かしい、もう此の上は問うて下さりますな、毒くはば皿、此の上は耻も外聞も御座りませぬ。藤が魂は、どうに死んで居りまするれば、世になきものと、お諦らめあそばせ。御聲を聞くも涙の種、此の上の御情にはどうぞ御顔を見せて下さりまするな。片時なりとも、このやうな處に居られては御身のけがれ、さあ〳〵早くお歸りあそばせ。若様御機嫌よう、此で一生御目にかゝりませぬと、て起ち上る。そなたの胸は聞いたが、わが胸も聞いてくれよ、まあ〳〵待つてと取りすがれば、伺は

なくても、よく分つて居りまする、御免あそばせと、一聲言ひすつると共に姿は消にて紅の片袖空しく我が手に殘りぬ。

今日限りの命

宵にほのめく　いなづまの
君とわかれて　闇にきえたる　心地して、
あやめもわかぬ　そでの雨。

君とあゆみし　庭もせに、
血しほのあとに　恨にはくや　くれなゐの
すみれは咲きぬ　生ひいでゝ
うるはしく。

かどは葎に　とざしれて
　　とふ人もなき　身の上を
なぐさめむとや　花すみれ、
　　はゝゑむさまの　いとはしや。
浮世は鬼の　すみかとも
　　知らでわらふか、　やよ菫。
まことと我身に　情あらば、
われと共音に　泣けよかし。

身はあさかげと　なりはてゝ
　　明日は絶えなむ　わがいのち。
この世になれと　相見るも、
　　思へば今日の　ひと日ぢや。
はや暮れかゝる　春の日の
　　ひかりも薄き　庭のもに、
はの見えそめて　ふく露は、
　　わがためそゝぐ　涙かや。
生きて甲斐ある　身ならねど、

恨も共に　としごろ日ごろ　忍びたる
思へば惜しき　命かな。

やよ花すみれ、心あらば、
恨をのみて　はかなき戀に　泣きわびて
わが戸かばねの　上に咲け。

契りし人の　思ひいでゝ
もしもたづねて　來りなば、

今のごとくに　花咲きて、
にはひを送れ、　その袖に。

君とあひ見し　少女子が、
うらみに泣き　死ぬるいまはも　君を思ひ
こゝにとばかり　なきからの
語れよや。

春の夕暮

雲雀の聲は　地に紅ちて
山もとかすむ　夕暮に、
土手のしばふに　よりかゝり
罪なきことを　かたらへば、
少女の袖に　はら〳〵と
しづ心なく　さくら散る。
春はかすみに　うづもれて
夜になりゆく　野の末に、

戀しきまゝに　よりそひて
もえたる舌を　おはすれば、
足もとに高く　音たてゝ
里川やみに　流れゆく。

死

一日の勞を休むるに眠を以てし、一週の勞を休むるに日曜を以てし、一生の勞を休むるに死を以てす。浮世は勞苦を意味す、眠なくんは、何によりてかその勞を忘れむ、人生は憂患を意味す、死なくんば、爭でか其の憂を脫せんや。眠や、死や、これ齊しく靜止、無感覺、無活動の境なり。人は常に曰く、世の中に寢るほど樂なものはなしと。而して何故に死を恐れ、死を嫌ふか。眠はよく知覺を亡くすといへども、明日を待て、また覺む。明日とは、未來なり、希望なり、光明なり。人一度死すれば、また此の世に歸り來らず。然れども、死果して未來なきか、希

望なきか、抑も光明なきか。

天堂、地獄の有無、こゝに之を問はず。魂魄の存沒、またこゝに之を問はず、されど、人に未來の希望なくむば、浮世はいかばかり闇黑、乾燥なるものぞや。人の身體は朽つれども、その事業は滅せず、その名も亦うせず。天堂以外、人に浮世の明日なしとせんや。誠に一思せよ、われ何の故に世に生れたるか、われ世に生れて如何なる天職を有するか、天意茫々、測るべからず。ただ人には活動力あり。血は涌き、情は熱す。人は一生默坐して枯死する能はず、必ずや起つて其力と才とを試みざるを得ず。其活動力は、知らず〳〵に人に活動を命ず。而して、何來の聲、起て働けよとさゝやく。分に應じ、力に應じ、一日働

けば、一日の務を盡くしたる心地し、一生働けば、一生の職を終へたる心地す。人生觀など名を付けて考へ込めば、果もなけれど、簡單に解釋すれば、人生は畢竟勞働の謂に外なからず。飢えて食物の味を知り、疲れて休息の味を知る、汗を流し、血を流して、こゝに一日の勤を盡くしたりと自覺したるものにして、始めて眠の神の寵あり。一生の事、また此の如し。夜半泣いて麭包食ふものにあらずむば、神の有難さを知らず。かの金殿玉樓に醉生夢死する長袖者流、いづくんぞ死の味を知らむや。

夕を知らざる蜉蝣も一生なれば、春秋を知らざる蟪蛄も一生なり。鶴の千年、龜の萬年も亦一生なり。迷ふものは百年も

短く、悟れは刹那も亦長し。人生の長短の知覺は、年數の多少よりも、寧ろ事業の多少に由る。即ち活動力を費やしたるの多少に由る。試に蚊といふ微蟲を見よ、その人の耳邊に近く時はぶんといふ音あり。俗に之を蚊の鳴聲と云へど、まことは鳴くにあらずして、その羽音なり。今實驗せる所をきくに、蚊は一秒時間に、その羽を震ひ動かすこと百四十回なり。一秒は、人が一たび息する時間にも足らず、而して蚊は百四十回の活動をなす。さすれば、一分間には八千四百回の活動あり、十分間には八萬四千回の動活あり。其活動の數も亦多からずや。天上の一年は人間の一日、人間の一日また蚊の數年に相應すべし。夏の初めに生れて、秋の初めに死する蚊の一

生、人より見れは短かなるが如し、されども蚊に在ては、大に長かるべし。一夏九十日の間、幾んど人の想像も及ばぬ多くの活動をなせばなり。人生、眞の意義は、哲學者の考察と解釋とに任かす。されど、眞理と云ふも、畢竟するに大なる獨斷のみ。われは安心立命を哲學者の見地に求めず、宗教家の見解に求めず。天われを苦しむるに生を以てし。われを休むるに死を以てす。晝間額に汗を帶ぶるものにして、眠の味甘く、辛苦の内に一生を了したる者にして、死の味、殊に甘し。まして死は生に勝る時あるに於てをや。

人生の意義、徒らに長命を貪るにあらずとすれば、人はたゞ天命を顧みて、生死は度外に付すべきなり。彼の窮して自刄

するもの罪過を悔いて自刄するもの、慚憤の餘りに自刄するもの、これたゞ浮世の苦を知る、未だ眞に死の價値を知るものと云ふべからず。生よく事業を成し、死また能く事業を成す。生中希望あり、身後また希望なくんばあらず。仇敵の娘なればこの世では添ふこと叶はねど、親と一所でないといふ誠を見せなば、未來は夫婦、邁臺の半座を分たんとの義峯の詞に、滿腔の希望を抱きて、父が毒刄に罹りし矢口の渡しの頓兵衛が娘が最期は、如何ばかり幸福なりし。一死ずや、誠をつくさぬ女に添はんよりは、むしろ信を守りて橋下に溺死せし尾生の一死、あながちに痴といふべからず。よしや、しゞみ川の水、涙んで飲む人あらずとも、小春、治兵衛が心中の

まごゝろは情あらむ人ぞ汲む桂川の水どこしなへに浮名を流せど、ふ半長右衛門がむかしの名殘は今に人の袂を沾さすや幸福なるは、情死なり。情死の意義は、臭骸と情死するに非ずして、希望と情死するなり。魚は瀬に住み、鳥は空に飛ぶ人は希望のために生き、また希望のために死す。明日なくんば今日の眠りは如何ばかり苦しき眠ぞや。浮世の明日なくんば浮世は闇く冷かなる塵界のみ。人は明日あるが爲めに生く。死して厭はざるも亦明日あるが故なり。

小隱には山林あり、大隱には市朝あり。大隱なほ足らざるものには、たゞ死あるのみ。死は理想の樂土に入る關門なり。人生最期の希望はたゞ此門を過ぎて求むべし。繫げる馬を鞭

てど馬は走ること能はず。現世の羈縛を脫して後、希望は始めて充すべきのみ。生は寄なり、死は歸なり。達人は生死の外に濶歩し、仁人は身を殺ろして仁を成す。陋なるかな世の衆生、唯生の樂しきを知つて、死のたのしきを知らず。蝸牛角上に浮榮を貪り、石火光裡に空利を爭ひ、碌々として、身は草木と共に朽ち、名の殘るなく、事業の殘るなし。名は賓なり、事業は主なり。名あつて事業なきはあれども、事業あれば必ず名あること、火の燃ゆる處に、必ず烟りあるが如し。身死して、事業は死せず、事業は人生の目的にあらずや。されど、小人は利に臨みて迷ひ、通常の人士は死に臨みて躊躇す。平常は大聲疾呼する慷慨悲歌の士も、刃の閃めくに、逢へは舌を歛めて

走り、口先ばかりは強くして、風雲を叱咤するの概あれども、いざとなれば、腰を抜かす。畢竟するに死の覺悟なければなり。死は鴻毛よりも輕く、また泰山よりもおもきは、たゞ時に應ずるのみ。通常の人士は死重からずして死を恐る、死の爲めに縛束せらる。憫むべし、彼等は生んが爲めに生くるにあらずして、死が恐ろしさに面白からぬ生を貪るもの多し。而かも人は百歳なる能はず、死に臨みては、五十年も、七十年も共に夢のみ。安んぞ其長短を感ぜんや。悟らざるものは唯生を愛し、悟るものは、能く生死の上に超脱す。死生の上に超脱するものにして、始めて共に談ずるに足るべく、また大なる事業を遂ぐるに足る。通常人の大事に臨みて誤るものは、死

の覺悟なければなり。

昔は、趙括、兵を出さむとせし時、金を賜はりけるに、好地を相して美なる家を建てぬ。これ其志死にあらずして、生に在り。死の覺悟なくして、軍陣に臨む、後髪ひかるゝ心地して、決死の働をなすに由なし。その母、趙王を諫めて括を將とすることなからしめんとしたれど、趙王從はざりしが、果せるかな、趙括は見事秦の爲めに敗られて、趙の四十萬人は坑にせられぬ。括は能く兵を談じて其父も若かざりしが、事に臨んで敗れしものは、死の覺悟なければなり。後世の人士、趙括たらざるもの幾人ぞや。太平の世に、放言大呼して、愚俗を赫すも、生死の巷に望みては、ぐうの音も出でず、大事爲めに誤り、九

伊の功、一簣に缺く、陋なる哉、虎穴に入らずんば、虎兒を得ず、希世の奇功偉績は、たゞ死を以て買ふを得べきのみ。藺相如の璧を奉じて秦に使するや、彼は己に死を期せり、生還を期せざりき。されば、秦王、城を交換するに意なきを見るや、忽ち璧を取り、己の頭と共に、之を柱に碎かむとす。彼は、璧と共に碎けむことを甘するなり。秦王その志の奪ふへからざるを知りて、また強ひず。相如舍に歸り、ひそかに璧を本國に返へし、然る後に、秦王に見にて曰く、秦は古來信を守る國にあらず、璧は已に國に返しぬ。我を殺して甘心せよと。何そ其壯なるや。秦王も流石にこの決死の士に加ふることを能はざりき。決死の力も亦大なる哉。決死の士にして、はじめて奇功あり。

而して、これ太平の紳士に向つて語るべからず。退いては、浮世の苦を脱するに足り、進みては希望を充すに足る。且つ治世と亂世とを問はず、由來、大事は血を以てわがなふべし。いま國家の大任に當る者國のために倒るゝの覺悟あるか。正義を唱へ、聖明のために弊事を除かんとするの志士、果して能く死を決せるか。怯犬はたゞ遠く吠ゆ、勇氣なる犬は、直に來て嚙み付く。死は樂土に入るの關門にして、兼て勇怯を分つの試金石なり。少年心事劍相知とは、古の事、今の志士豪傑の心事は、たゞ黄金相知る、止んぬる哉。

寶車

待ちわびたりし　梅の花
今はさかりと　なりにけり。
とよさかのぼる　朝日子も
かはるばかりの　心地して、
道のゆくてを　ながむれば、
霞は遠く　たなびけど、
秩父根おろす　北風の
はだへに寒く　しみわたる。

花のみやこの　かたほとり
いとゞけはしき　坂道に、
重荷つみたる　荷車を
ひきなやみたる　男あり。
さすがに草鞋は　はきたれど、
寒さをふせぐ　足袋もなく、
まとふ一重の布子さへ
みるめの如く　やれはてゝ、
脛もかひなも　あらはなり。
寒さにふるふ　聲あげて
力のかぎり　ひく車、

右に左に　折れめぐり
上り〳〵て　やうやくに
坂のなかばに　至りけり。
車のあとを　椎しつゝも
助けてゆくは　妻ならむ。
かなじ姿に　やつるれど
赤みを帶びて　ちゞれたる
髮をかしらに　まきあげて
たばねしさまは　女なり。
年齒もゆかぬ　うなゐ子も
紅葉の如き　手をのべて、

母親と共に立ちならび
同じ姿に　推してゆく。
親子みたりが　前世には、
いかばかりなる　業ありて、
めぐる因果の　小車を
ひく身の上と　なりにけむ。
「坂もなかばは　上りたり。
しばらく休め、　いざこゝに」
父なる人の　ことのはに、
わらべは聲を　ふるはせて、

「のう父上よ、許してよ。
　力のかぎり　つくせども
よわきかひなを　如何にせむ。
いとゞ寒けき　このあした、
あさげにわづか　一椀の
粥をすゝりし　のみなるに
きびしき風の　ふきぬれば
　腹の中まで　冷えわたり、
かひなも足も　力なく
　眼もくらむ　ばかりなり。
やよや母上　きゝてたべ、

わが一生の　ねぎごとを。
飢ゑては如何に　はげめども、
　力はさらに　いでぬなり。
かしこの店にて　何にても
　腹みたすもの　買ひてむや」。
母は涙に　むせびつゝ、
「ことわりぞかし、　その言葉。
されど太郎よ、　察してよ、
　親の切なる　心根を。
學の庭にかよふべき
　年をもすでに　過ぎけるに、

貧しき家に　そだてられ
苦しきわざに　つかはれて、
書をまなばむ　由もなく
いろはも知らぬ　身の上を
かこつ子よりも　たちぬの
親甲斐もなき　この親の
胸はくだくる　ばかりぞや。
我身も元は　さむらひの
家にうまれし　ものなるに、
つゞく不幸に　かくばかり
おちぶれたれど　いつかまた

世にうかぶ瀬の　なからでや。
聞きもわきてよ、　やよ太郎、
坂をのぼるも　空腹の
思をなすも　しばしぞや。
父をたすけて　はたらける
むくいに何を　買ひやらむ。
旗か喇叭か　鉄砲か、
支那のいくさの　錦繪か。
この荷を送り　とゞけなば、
かならず買ひて　とらすべし、
好める薯も　うちそへて」。

いざとばかりに　親と子が
よびかはす聲も　いさましく、
押しつゝゆけば　いつしかに
車は見えず　なりにけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

古巣をいでし　うぐひすの
なくなる聲に　さそはれて
園より園に　うつりゆき
ひねもす花に　うかれしを、
雲よりもるゝ　山寺の
鐘のひゞきに　れどろきて、

家路をさせば　夕日影
西のはやしに　かたぶきぬ。

處もかなじ　坂路に
今朝の夫婦に　あひにけり。
重荷にかへて　荷車の
上に載せたり、　うなゐ子を。
げにや玉にも　黄金にも
くらべむものなき　子寶を。
夫婦が肌に　まとひたる、
衣はもとの　まゝなれど、

わらべは今朝に　ひきかへて
いと見安くも　なりにけり。
心よげなる　その笑顔、
右手に錦繪　握りつゝ
ゆんでに喇叭　とりあげて、
いと高らかに　鳴らすなり。

「けはしき坂ぞ、心して
まろびな落ちそ　車より」。
父のことばに　母もまた
「今日はたらきし　報いとて

好める品は　かひやりつ、
またも車に　のせにけり。
その載せられし　むくいには
しかと持ちてよ　酒樽を」。
れいと答へし　その後は
かたみに笑ひ　どよめきつ、
遠ざかりゆく　荷車の
影はかすみに　わかねども、
なほもわらべが　吹きならす
喇叭のひゞき　かすかなり。

浅間山のひと夜

都の殘暑をよそに、碓氷峠のあたりへと思ひたちたれど、輕井澤やよけむ、霧積やよきと、停車場にいたりてもなほまどひしに、おくれて來りし鯉洋、はや輕井澤までの切符を買ひ、荷物もあづけたりといふにさらばとて輕井澤にものす。こゝは中山道と共にすたれはてたる孤驛なれど、海をぬくこと四千尺にちかく、白雲人の懷をたづねきて、夏を知らぬところなり。四面山を帶びたる高原ひろく、見わたすかぎり、尾花招き、女郎花笑へり。菅茅の間に別莊とは名ばかりなる小屋の點綴せるは、西洋人が避暑のすみかとやあたらしく

植ゑたりとは見にぬ並木の多くは老櫻なるが中に、梨李などの時を同じうして累々たる實をつけたるが立てる街道をはさみて、鱗次せる家の五十戸には足らぬ山村のいたうあれたるに、思ひのほかの牛肉うる家ふたつ、洋酒うる家ふたつ、西洋風の玩具うる家ひとつ、洋服の裁縫店みつばかりそなはれるにても、こゝに暑をさくる西洋人のおほきことは知られつ。旅館ともいふべき旅館は、たゞ二つのみなるが、その一は西洋人のみをやどして、日本人はやどさぬといふに、腹だゝしく、今まひとつの旅館にゆけば、もはや客を入るべき室なしといふ。霧積にゆかばよかりしをと悔めば甲斐なし。時は午の到をすぎたり。せめて午食ばかりにても物せ

むとて、むかしの建築のなごり見えていとかほきく、一抱におまちむと見ゆる大黒柱のひかりかゞやけるが下にすはりけるに、宿の女房、つく〳〵とわれらを見て、さすがに心苦しくや思ひけむ、座敷を都合せむとて、半時間ばかりまたせたるのち、いざたまへとて導きたるは、奥にはなれたる一室なり。この家にてはこよなき室と見ゆれど、湯どの、かはやのうしろに、新にたてつぎたりとおぼしき平屋にて、となりには、西洋人の専領せる旅館の二階、さゝやかなる庭をへだてゝ高く、ながめは更になきに、こゝろよからず。午食終へても心おちつかねば、こゝよりは二里あまりの程と聞きつる霧積の温泉のありさま見て來むとて荷物はそのまゝにして

いでたつ。

草にうもれたるむかしの中山道を、碓氷峠の方へ半里ばかりのぼりゆけば、輕井澤の驛、はや脚底におちて、さながら臥蠶の如し。こゝは峯のいたゞきなり。十級ばかりの石磴の上に安置せられたる古社は、追分節にうたはれる碓氷峠の權現にや。祠下の力餅うる家に、茶をもとめんとてたちよれば老婆のずこやかなるが、澁茶の外のもてなしに、うらの二階にてゆるやかに休ませたまへといふに、心すゝまねどのぼりて見れば、こは如何に、近く碓氷峠の連山を見下し、遠く兩毛武總の平野をながむる景色、輕井澤とは眼界をことにして、とみに目さむる心地す。霧積の温泉のこと問へば、いた

く零落して浴戸はわづかに一戸となれりと云ふ。その里程を問へば、崎嶇たる山阪二里にして遠く、車を通ぜずといふ時は三時をすぎたり。往復四里あまりの險路、旅の用意なくてはと思ひて歩をかへす。

浴を終へて酒を命ず。酒至る。その酒惡くして醉ふに堪へず。忍びて四本ばかり倒して、杯を投じて碁を圍む。二たび戰ひて二たび勝つ。二目ふけと云へど、きかず。こたび負けなば二目置かむとて、また局に對す。未だ半ならずして宿の女きたりて杯盤を收む。告ぐるに明旦淺間山にのぼらむことを以てし、導者を雇はんことを囑しけるに、女諾してくさ〴〵のことはなしけるついでに、西洋人は夜よりのぼりかけて朝

早く山頂に日の出を見るものかほしといふに、土地になれざることゝて、そこまでは思ひいたらざりき。闇夜歩み得べき路ならば、これより直に程に上らむ。はやく導者をやとひこよとて、碁はそのまゝにして起つ。われ手をうちて、はじめて郡をいでたる心地せりといへば、鯉洋小をどりして輸快と連呼す。時は九時なり。こゝより淺間山の頂まで六里の程なれば、今よりいでたつは早きにすぎむと思ひたれど、はや導者來れりといふに、さらばとて、旅館を出づ。同じ家にやどりしひとりの學生、同行をもとめければ、一行あはせて四人となりぬ。

頃は八月廿二日なり。墨を流せる空に電光をり〴〵きらめ

き風すゝきに聲して冷氣面をはらへり沓掛より右折すれば足先やうやく仰く輕井澤は早や離山にへだゝりて四面また人籟なく追分の燈火も山外にしづみぬ電光收まり陰雲とけゆきて星辰漸くおほし仰げば淺間山頭を壓して聳え噴烟天にたなびきて巨人の息するが如し山阪のぼりのぼりて小淺間のふもとにいたりしに導者路を失ひ荊棘をひらき蟲の聲をふみてゆくに枝しば〳〵帽を奪ひ白股をうるほす時計を見れば十一時なり時早きに過ぐ風寒き山頂よりもこゝにやすまむとて木のやゝすきたる處に草をはらひてすはる山氣肌にしみて寒さ堪ふべからずかたみに木の枝をり來り堆くつみかさねて火をつけむとする

に露にうるほひたる生木とみにはもえむともせざりしが火焔數尺の上にのぼり火粉天に朝し十歩の間夜色をやぶりて鬚眉あきらかなるにたゞかからうじて火うつり葉は火焔數尺の上にのぼり火粉天の雜草と思ひしあたりの草もよく見れば女郎花のなよやかなる側には桔梗のやさしきがゐしらを傾け薄も穗にいでゝ火勢より起れる風になびけり空は霽れつくして星斗てづかから捫しつべし四山ねむりて火ひとり聲をなす四人火を圍みて暖をとり導者を相手に雑談しながら握飯くらひなどす このあたりに野獣は居らぬかと問へば猿兎などおはし鹿もいで狼もいで熊もをり〳〵出づゆるとき狼にあとつけられしが生きたる心地はせざりきされ

ども十歩よりは近づかずわれとゞまれば狼もとゞまりわれ走れば狼もまた走りひとへに我を守るものゝ如くなりしが山をいづるとき聲高く鳴きてわかれゆきぬ。思ふに、よき狼にてその一聲は別をつげたるにや。されどそのすゝきの一聲我耳にとゞろき山岳呼應せし瞬時は氣ぬけ魂うばゝれて幾んど起つこと能はざりきなどかたるほどに、一狼下弦の月さびしげに東山のうへにいでぬ。

たけるの火のあたゝかさに眠を催して鯉洋まづ草上に仰臥す。幾莖の女郎花彼れが肥えたるからだにしかれ花だけは殘りて腰のあたりなどにまつはれるもあはれなり。導者もまた眠りぬ。われ學生なる人と相對して語なし。夜はまゝ

ふけぬ。山氣空をかすめて月やうやく高く冷光地にしきて草露みな玉をつゞれり。かゝるほどに火勢減じければ火に添へむとて起ちて枝を折る。その音に鯉洋まづさめて起つ。また一枝を折りしに、思ひしよりも、もろかりしかば力あまりて導者の上に倒る。導者驚いて起つ。時は一時を過ぎたり。

火は露にまかせて、また程に上りぬ。

小淺間のふもとを過ぎて、淺間山をよぢのぼれば、一山また樹木なく、路は小石の散布せる上を、ほとんど直上す。月はあれども、路はくらし。導者の提燈をさきにたてゝ魚貫してのぼる。この山けはしとにはあらねど、路の曲折すくなければ、歩行いとかたし。數歩のぼれば、喉かわき、汗いづ。休めば汗忽

ち収まり、寒氣肌に透り、袷羽織着たる身も、なほ寒戰す。また のぼれば、直に熱す。一寒一熱、のぼるも苦しく、休むも苦し。小淺間すでに脚底に落ちたれど、淺間のいたゞきは、なほ天外に在り。一行四人時には相近づき、時には相遠ざかる。さまでへだゝらぬ。導者の提燈の光なきまでにかすめるは、雲のかかせるにや。霽れし空摸樣かはりて、雲しきりに動き、片月弧にしてあたりはほのぐらし。いよ〳〵のぼれば、風いよ〳〵あらく、寒さも加はりて、汗はまたいでず。たゞ喘ぐ聲のみ高うなりぬ。かくて路右に曲りて急ならざるかと思へば、足下は削下して、そのつくる處を見ざるに、風はうへより吹きれろして、からだやゝもすれば倒れむとす。危きこと言はんか

かなし。月の忽ちくらくなれるに、顧みれば、大鵬翼を張りて近く我を搏たむとするが如きに、れどろきて帝視すれば、一帶の黑雲なり。われと相距ること二三丈に過ぎず。われと共に山にのぼらむとすれど、吹れろす風のつよきがために、のぼり得ず。風とたゝかひて空に動搖す。われいよ〳〵のぼれば凝雲は遂に脚底にふちぬ。風のやゝ硫黄の氣を帶びそめたるに、山頂の噴火口も最早遠からじと思ふほどに、やがて彌漫たる白雲、山を壓して下に走る。身その雲中に入れば、硫氣鼻を衝いて、ほとんど呼吸しがたし。これまことの雲にはあらで、天風の噴烟を捲き れろせるなり。路は東より上り、風は西より吹く。噴烟いよ〳〵濃く息もとまらむばかりなる

に、衆むせびいり、辟易して、歩をかへさむとしたれど、こゝにて下らむも殘りおほしとて、勇を皷してのぼる。手巾にて鼻と口とを掩へど、砂灰なほ口中に入りて嗽々として聲あり。烟の勢つよき時は、地に伏して之を避け、やゝうすらぐをまちてたちてゆく。さながら、駱駝の背に沙漠を通る旅人の風にあひたるがごとし。一起一伏、からうじて頂上に近づけば、路のかたはらに幾多の小孔ありて烟をはく。試にその口に手をふるれば微温あり。かくて遂に頂の噴火口に達し、路を左にとれば、風の衝をさけて噴烟また人を襲はず。右は噴火口にして、一面に烟音せずしてのぼり、そのふかさを知らず。一たび足をあやまらば、奈落に轉落すべく、左は山壁削下し

て急に、白雲みちて、眼界は左右前後、數歩のうちに限られぬ。右は烟、左は雲、雲といふも、もと水蒸氣の凝れる所、火山の烟といふも、まことの烟にはあらで、地下より噴き出す水蒸氣なれば、その色白雲と異ならず。たゞ硫氣の有無によりて之をわかつ。われら雲烟の中をゆくに、路時にさけて、その底を見ず。人は脆き石塊をふみてすぐるなどいとものすごし。はじめ噴火口を一周せむと思ひたれど、何のながめもなき雲烟の中をゆかむも趣なければとて、足をかへす。雲烟の中もさすがに明らかになりたるは、夜の全く明けはなれたるにや。一呼して噴烟の散布せる舊路を取りて下れば、日は既に東山のいたゞきに高し。導者頂をかへりみて、今朝のごと

く山の荒れたるは、近來嘗て見ざりき。それにも屈せずして
のぼりたまひし御身たちのけなげさよといふ。はじめ山の
なかばにいたりし頃、二個の提燈相へだゝりてのぼり來れ
るを見き。これ例の西洋人の來りのぼれるならむと云ひあ
へりしに、歸路一人も見ず。思ふに路を塞く噴烟のいみじき
に辟易して、歸りたるにやあらむ。噴烟の中を出でゝ、はじめ
て蘇生のかもひをなし、さきに困頓してのぼりし山壁一呼
して走り下り、小淺間の頂と相對する所にいたりて休息す
るほどに風やゝなぎて、噴烟今は直上し、雲とけて近巒遙峯
ことゞく脚下に朝す。この雄偉なる景色をさかなに一瓶
の酒を四人の口にわかち、握飯をくらひて、腹をみたせば、勇

氣また生じて、身體もとのごとくなれるに、放吟の聲と共に
雲を蹴て、午前九時には、身は早や足をのぼして旅館の一室
によこたはりぬ。

海嘯

千代のちぎりを　うちこめて
かたみにかはす　杯の
數さへみたび　かさなりて、
ねよとの鐘も　ひゝくなり。

わが手にすがれ、　わぎも子よ、
いづも八重垣　つまごめに
作れるむろに　いでたちて、
語りあかさむ、　夜もすがら。

うたげの筵　あとにして、
今は人目の　關もなし。
蘭燈くらき　むろのうちは、
われらふたりの　世界にて
いざやわぎも子、　聞きねかし。
高根の花と　よそに見て、
なが〳〵し夜を　泣きあかし
戀ひわびにしも　夢なりや

身をも家をも　うちすてい
　　こひわたりたる　心根の
切なるほどは　やせはてし
　　このからだにも　思ひ出よ。

なれがやさしき　顔みれば
　　日ごろ年ごろ　忍びたる
胸のうらみに　わすられて、
　　心もそらに　なりにけり。

日もてりまさる　心地して。

なれは我身のいのちなり。
　　をじかの角のつかのまも
あはで空くすぐべしや。

わがもつ土地は山に由に、
　　見渡すかぎりはてもなく、
いつむねつゞくくらのうちに
　　こがねも米も溢るなり。

錦のころも　あやの帶、
　　好まむまゝに　身につけよ。

桂もたかむ　ながゐめに。
玉もかしがむ　ながゐめに。

今日の心を　こゝろにて、
千代も榮えむ、　もろともに。
世に蓬萊の　山あらば、
死なぬくすりも　求めまし。

ことばに盡きぬ　わが心、
たぎつ涙や　かたるらむ。
いざ〳〵わぎも　とく入りね、

契をこめむ。　にひ室に。

いざと誘ふ　時しもあれ、
天地も動く　ひゞきして、
山より高き　かきつ浪
たけり狂ひて　寄せにけり。

手に手をとりて　わしれども、
人より早き　浪の足、
山さへ水に　うづもれて、
くぬちは海と　なりにけり。

つなみの去りし　あそべに、
あはれ榮え　月はさびしく　殘りけり。

あらしに咽ぶ　たゞ荒れはてし　野原にて、

はれの衣を　松の古根を　まくらにて、
かばねぐふたつ　うち着たる　殘りける。

かたみに抱き　抱かれて
かもてに笑は　よそめも　いとゞむつまじく。
この世の息は　ふくめども、　絶えてけり。

春駒

みどりくれなゐ　こきまぜて
錦と見ゆる　春の野の
草葉にもゆる　かげろふに、
こゝろは空に　うきたつど、
あはれきづなを　如何にせむ。
朽ちせよきづな　いざ早く。
木の下影に　草はみて、
花にとまらむ　こゝろかは。
見よやかなたの　みそらより

駒のたてがみかいなでゝ、
吹くものどけきひと聲たかく
あなや梢の　春風に、
さくら散る。

雨奇録

人狂ひ人走り、人叫び、人喘ぎ人爭ひ、人醉ふ熱鬧糞壤の巷に、天つをとめの息するがごとく颼颼として、脩篁のほかに涼味をもらしそめし微風やがて地を捲く疾風となり、雲とび、天撼くかと見れば、紫電空を劈き、萬雷地にふちて、俗物のすだける金殿玉樓ことゝく碎けて鳥有に歸し、沛然たる大雨、盆をかたむけて、三千世界の塵垢と俗氛とをあらひ去りたるあと、空さりげなくすみわたりて、月は梧桐の枝にたかし。

黄昏一犂の雨に堤上の人は花と共にちりゆきて、たゞない

めなる雨脚、相連りていしげく、水をわたる華鯨のひゞき身にしみて、そゞろに世のはかなきを覺えけるに、遠目にもしるきひかりのたわやめの紅のもすそ風になぶられて、雪の肌みえつかくれつ、纖手にかざす蛇目傘の上にあだなる花片のせて、いづちゆくらむとふぼつかなし。

日ごろ涙にしぼりし袂、都のほかの山風にかわかさばやと、烏山羽衣の二子と共に都には烟をのこして、船路はるかに房州さしていでたちけるに、くもりし空、雨をかもして、風あらく、浪たかし。保田にて、舟を下るほど、雨ますゝみじきに、あくまでもつらき世の中と、逆旅にいたりて、ぬれし衣を凍えしからだと共に乾しなどす。この日鋸山にのぼらむ

と期せし望たがひて、心のやるかたなきに、窓をひらきてのぞめば、雨脚の外。黒雲峰頂に徂徠して、山怒を帶びてものすごし。半日たれこめて、晩に杯をあげたれど、烏山風のこゝちあしく、羽表船暈につかれて、一座もしめりがちなり。夜に入りて窓をたゝく雨の音、ますゝはげし。またゝく孤燈の下に川の字に座して連歌などしける末に、雨も心のありげなりけり、と羽衣のうちだすに、しめやかに語らふ窓におとづれて、と上の句つけたれど、はやいをねにけむ、答はなくて、いびきの聲雨に和して高し。

小雨そぼふる春のあした、見はてぬ夢のあとをたづねて、道灌山のあたりにものしけるに、花は早や地に委して、遊人のあともたにぬ茶を乞はむとて、かたへの掛茶屋にやすらへば、この雨によくこそと、笑顔やさしく、煙草盆もてきたれる女の、田舍のきむすめめきたるが、年は廿四五と見ゆるに、髪の島田なるは、樂天のいひけむ、貧家の女のとつぎがたきにや、われの如く、雨に雜沓せぬをよろこびてふりはへて訪ふ人もあらざるべければ、さぞや花ちりての後はさびしからむといへば、げに花のさかりもひとゝきとて、雨をながむる横顔に、殘りし花びらをりからの風にさそはれて、はら〳〵とちりかゝるもあはれなり。

寒き冬の日、うしろ髣髴に降る雨を阿彌陀傘にうけて、友とたゞふたり、ひねもす東海道をのぼりける夕つかた、友の

いばりせむとするに手凍えてうごかねば、われに洋服のぼたんはづしてくれよと云へど、わがてもうごかず。さらばとて居酒屋の縄暖簾、頭にくゞりて、醤油樽に射大臣をまなび、芋をさかなに、酒をよび、大なる猪口、ひとたびのみ干せば腸熱し、ふたゝび傾くれば耳熱し、三たび満引すれば手足舒び、四杯、五杯心ゆたかに、魂とけて、浮世のとばざかれる心地するに、さかづき片手に、そとも見わたせば、はやみちわたれる闇の中に、ほの白き雨をおくりて、心のまゝに吹きあるゝ風の音、さながら悪魔のさけぶが如し。

ふりつゞきたる霖雨に、山がはの橋ながれたちて、人目のほかの戀のかよひ路絶えはてたるに、一日も千秋のれもひとやかたみに岸にいでゝ、顔を見合せては胸更にさわぎ、聲をかけ合せては肉いとゞ躍り、羽あらばとばかりにあこがれて、雨にたちつくし、風に泣きつくす涙れちて、ながれて、みかさや増すらむ、なかをへだつる浪も岩にむせぶや。

玄づかなる春の夜、わが側をさりて、戀にくるひし手飼の猫の、さすがに久しくうかれあるきしを面目なく思ふらむ、歸り來りて、室の一隅にうづくまり、闘たかきさまして、なく聲の、罪を謝するが如きもいとしほらし。ちかく招きよせて、その背をなでむとするに、毛いたくうるほひて、花びらさへのせたり。さては雨にやと、聽けども音なし。戸を推せども、それとは見えず、たゞ何となう打ちしめりて、淡月一痕、夢のごと

く老櫻の枝にかゝれり。

浮世を雲にへだてゝわれ獨り高根の上にやどりける夜半、たちまち脚下に電閃し、雷鳴しをり〳〵山を捲いてさかしまに吹くあらしの雨片を送れるに、下界は雨とおぼゆれど、空は霽れわたりて、月はちかく頭上にさにたり。この月、世の中の人は知らじ。月ひとりわれをてらし、われひとり月を看るやがて雷やみ、風死にたれど、雲はなほ下界を蓋へり。あはれ、浮雲の下にはなやみあり、くるしみあり、憂あり、いつはりあり、罪あり、けがれあり。雲の上には、光明あり、たのしみあり、月あり、またわれあるなり。不敢高聲語、恐驚天上人と李白のうたひしも、かゝるをりにや。

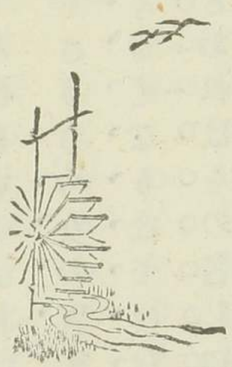
夏のたびぢの驟雨に、野中のひとつやを去ばしの傘やどりとたちよれば、思ひもかけぬうるはしき女、われを座に延きて、茶よ、菓子よと、こゝろよくもてなすに、身の顫ふまでうれしく、心ある人にひと夜のやどかりてなるゝもつらし明日のふる里と、契仲のよみけむ歌のこゝろ今更にしのばれて、世はいつまでも雨ふれかしと思へど、甲斐なし。點滴はや收るかと見れば、庭の木立に、蟬しぐれ聞にそめて、一道の彩虹、東天に印してたかし。

十年の事も雨に和して心頭にいたるためし、とりわけて雨にしのばるゝは故郷のむかし、われまだいとけなかりし頃、父われをつれて宅後の川に舟うけて、下の町までこぎゆき

て、要事はてゝかへるさ、微雨いたりぬ。この川に堰あり。石をつみわたして川を斷ちたる中ほどに、はゞ一間半、ながさ三四間ばかりとおぼゆる水口あり。板を斜にしき下して、水はうすくその上を奔瀉す。小舟のこゝを上下するには、人は舟よりおりて舟を曳かざるべからず。この日父は舟をこなたの石堤の下につなぎ置きて、かなたの岸にたちよらむとて、われをとゞめおき、暫く待て、ゆめあとより來るなといましめて水口の斜にたてる板の上頭をわたりゆきしに、ふる雨に我もこゝろぼそくて、幼氣の父の諫を犯して、つゞいてわたらむとしけるが、水苔生ひて、いとなめらかなる板に我足すべりて、水に押しながされて、渦まく深淵のそこに沈みぬ。

かくとも知らで、父は石堤の上をたどりゆきしに、かなたの岸にて、ひとりの女のわらはあわてゝ小兒流れぬと叫ぶに心づきてうしろむきけるに、われあらざればいそぎ衣をぬぎて水にとびいりてわれをすくひあげしとかや。この時われいまだ游泳を知らさりき。少女の我父に教ふるなかりせば、われは水底のもくづとなりはてけむ。その少女われにとりては命の親なれど、われはその名を知らず、その顔をも知らずさるにても、かの時われ魚腹に葬られなば、われは下れる世のつっさをも知らで、なかゝに今の思にまさりて、さちわりし身なりけむかし。あはれ父、簀を易へて、すでに十七年、墓木また拱しぬ。かの少女はいづくいかなる日の下にあ

るらむ、知らず。



今宵の情

たゞ手をとりて　しみ〴〵と
かたみに顔を　見合せて
言はじとすれど、　世のつらさ。
泣かじとすれど、　身のゆくへ。

君とわかれむ　きぬ〴〵は、
山とやならむ、　野とやなる。
今宵ひとよの　情には、
笑へ、浮世の　さびしきに。

小春日和

七十路ばかりなる翁の、髪の毛少しばかり頭の後に殘りて、長き頤鬚雪よりも白きが、眼鏡を額に預け、吸殼のみ殘れる雁首、斜に口に啣へたるまゝ、兩手を八字形に頬杖つきつゝ、餘念もなく讀み入りたる一冊の草子の、版本にはあらで寫本なるが、「飛鳥川」といふ表題の文字まづ表紙にうるはしく御家流にゑるしいだされ、女子の筆のすさびとおぼしくて、水莖の跡さへいとやさしげなり。そも、この草紙の中には、何をか記せる。いざ、此翁の小聲に讀み出すを聞かむ。

* * * * * * *

四十路あまりの長の月日、思ひしのべること、人にあかさむと思ふ心もなけれども、この白髪の姿となるまで、人の家に嫁入せず、獨身にて世を送りたる事の故由を記し置かば、或は庭のをしへのかたはしにもやと思ひつゞけたるこの年頃、今いはや六十路の坂を越えて、齒落ち、腰曲り、殘る命はいくばくもあらじと思ふに、せめて手足のたつうちに、この頃の小春日和、ぽく〳〵と暖くて、心地いと快きを幸に、日當よき窓の下に筆とりて、いでや、思ふことゞも云るしかばや。

妾、この王子の里にすみてより、數ふればはや四十年の歳月を經たり。まことや昨日と過ぎ、今日と暮れて、あすか川流れ

て早き月日によどみなく、榮枯得喪またいく内に遷りかはりて、げに人の世は一炊の夢なりけり。すぎ越し方をかへりみれば、苦しき思に袖をしぼりたることもあり。切なき心のやるせなくて夜もすがら獨り泣き明かしたることもありき。その時こそは苦しとも、また切なしとも思ひけれども、なべて夢と消えたる昔の事どもも、たとひ樂しかりしきとて、嬉しかりきとて、今はたいかでか心にしかと分くべき。苦しかりし夢も樂しかりし夢も、共にむなしく覺めては、唯殘るものは現在の身の上、畢竟世には苦なく樂なしと悟りぬるものは袖のしづくにて、玉のやうなる赤子、膝にのせがら〳〵を手にふり鳴らして、坊やは好い子と、

高く呼ばるゝ聲に自ら驚きて目を開けば、空しき聞に鐘の聲しづみて、燃えのこる燈火の影かすかなり。

軒傾き柱ゆがみたる草の屋に、心細くも唯獨り住みなれてはさすがに始の如くは物憂からず。世を渡るたつきとては、かく〳〵しからぬ身なれども已むを得ず、村のわらべだちに、讀書、習字、さては裁縫など敎ふるに、師匠さまともてはやされ、衣食には事を缺がずして、今日まで甚しき病の苦もなく、都の塵をよそに見て、後やすきものから、またものさびしき身の上、半ば朽ちたる門のとびらは叩く人なしと知りつゝも、なほ橘かをる夏の宵は水鷄の鳴く音にはかられ、天地も氷る冬の夜には庭の筧さへ音づれず、人目も草も枯れはて

たる片田舎の一軒家にも、一陽來復して春を迎ふれば、軒塲の梅はいろみて、鶯も來鳴くに引きかへ、身は埋木となりはてゝ、花咲かむ折もあらず、いつも冬枯の身の心も自ら萎れ、月と花とに涙の數々添へて、流れゆくあまたの月日つもりて久しき四十年の浮沈を、唯一塲の夢と見て、今もなほ夢の心地になむ。

妾は今かく零落れたれど、氏は春野と云ひて、もとは五千石領したる旗元の家柄、父の名を茂基と云ひ、母の名を雪子といひき。また妾の名は、如何なる親の心なりけむ、土塊にも劣る身の玉子といはづかしうなむ。

思へば、世に妾ばかり不幸なる人は、多くはあらじ。父には、い

とけなき時、死別れたれば、その顔だに覺えず、言はむかたなく悲しきに、母にも、また小學を卒業せし年、死別れたり。その時の事ども、今更語りいでゝ、語るも涙の種なれば。

唯一つ忘れがたきは、母君は自ら起たざることを知りて、妾を枕元に呼びよせたまひ、夕を待たぬ身なりとも、せめては梅太郎に嫁をよりまたそなたの身のかたづくまでは、生きながらへてあらむと思へども、定命なれば如何ともしがたし。これよりは世にたより少なき二人の身の上、唯梅太郎を父とも母とも頼みて、よろづその教へをうけよ。また言ふまでもなけれど、平生常にいましめたる女の道はかへすがへすも蹈みな違へそとて眠るが如く此世を去らせ給へり。

此時兄の年は二十歳、妾の年は十五歳なりけるが、共に孤兒となりて、天にも地にも血を分けたるは、唯この二人の兄妹、心細くも、悲しくも、かたみに頼み、頼まれて、影の如く相伴ひ、去ぱしも側をはなれざりけり。幸に時といふ老女の、いとまめやかなるが、年久しく我家に仕へ、母親なくなりて　も、何くれとなく身に引きうけて、世話して呉れしかば、家の事はかほかた打任かせて、妾は兄と共になほ學の道をたどりぬ。さはいへ、家の女主人とては、妾より外になければ、全く家の面倒見ずといふ譯にも行かず、お時に主人とたてられて、早くも世帶の苦しみを知り、今更に母君に時の流行品をねだりし昔のなつかしく、はゝそばのめぐみの露に生ひたちし

撫子の身の、浮世の荒き風に當り、人の心の頼みがたきを知るにつけ、まだ子といふものは持たざれど、そのかみの親の恵みは、身にしみて辱なく覺えぬ。

當時兄なる人は、さる學校に入りて、西洋の學問をいそしみ、妾はむねと嫗島の道にわけ入り、よな〳〵燈火の光をわかちつゝ、共につゝがもなくて三年四年は、矢よりも早く立ちにけり。ある春の夕の事なりき。兄なる人は、同じ學びの友だちの親睦會にとて、出でゆかれけるが、その夜、更たけなはに、人靜まりたる頃車の音俄に門の前にとゞまりて、間もなく門の戸の開くに、さては兄君の歸られけるにやと、ラムプ手にさげて玄關に出でけるに、兄はいたく醉ひて、物心も覺え

ざるを、兩手に抱きつゝ、いたはり助けて入り來れるは、兄と同じ年頃の學生なり。おのれは川田清憲とて、學校にては御兄君と御入魂にいたし、色々御世話かける者なるが、今宵宴會にていたく醉ひたまひたれば、靜に車にのせて、御送り申しぬ。夜もはや更けたれば、これにて失禮仕る。よきに御介抱あられよと、聲いと爽やかなり。川田氏のことは、日頃兄が篤實なる勉強家なりとほめそやすに、その名は知り居たれど、まのあたり其人を見るは、今日がはじめなれば、兄が平生その世話になること、さては、今夜の介抱のをなど、一通り禮をのべ、茶でもたて侍らむほどに、玄ばしは休みてゆかせたまへとすゝむれど、そのやうな御心配は御無用、おのれは人の

家に居る身なれば、餘り夜をふかしては都合惡し、いざさらばとてたちてゆかるゝに、はや十一時を報ずる鐘の音、陰にこもりていとかすかに、櫻の枝にやすらへる朧月の影もねむたげなり。

飲みすごされし酒の故のみにもあらざるべけれど、年頃たえて病氣のなかりし兄の、心地にはかに惡しく、花咲き鳥鳴く春の彌生の空に、むなしく、垂れこめて、打臥しゝ枕上らず、熱は四十度をこえて、譫言など云はるゝに、あわてふためきて、近きあたりに名たゝる醫師を招きて、診察を乞へば、肺炎といふ病なり、一週もたてば、おこたるべし、歸りて藥を調合すべければ、つかひの者おこされよとて、打傾きたる樣、更に

見えず。

その歸るさに、事になれたる老女のお時、醫師を送るさまにて、門の外まで行きけるが、やがて歸り來りて、妾を小陰に招き、ひそかに醫師に問ひ侍りしに、容易ならぬ症の由、申されきといふに、はや胸ふたがりて、覺えずよゝと泣き沈みけるに、御心しづめて皆迄聞かせたまへ。容易ならぬ病にはあれど、熱だになくならば、けろりとかこたらむとの事なれば、心強くおはせ。病には藥より看病が大事といふに、お孃樣の弱らせたまひては、何かせむ。長くとも三週間は過ぎざらむほどに、御心はげまして御看病あらせたまへ。御涙ぬぐはせて

いざ參らむといふに、やうやく涙ぬぐひて、兄の臥せる側に

至れば、熱にうなされて、物も覺えず、口のみ動かして、頻りに囈言いはれぬ。まめやかなる老女の時の居て、杖とも、柱とも、頼みに思はるれど、かゝるときに、とりわけて悲しきは身内の一人もなき身の上なり。父母の居ましさば、如何に心強からましを、天にも、地にも、血をわけたるは、唯一人の兄、思ひがけもなき大病に、夢かとのみ思はれて、つらくも、かなしくも、死なむばかりの病にかゝらむとも、己れの身ならば、更に苦しからじ。苦しきは看病する身の上になむ。げに、己れが病にかゝるよりも苦しきは、人の看病なり。思ふまゝになるならば、己れの身の代らましを、熱に正氣を奪はれて、言葉をかはすよしもなき兄の顔をながめ入りて、せめて身内のあらばと

又も急に悲しくなり、顔をそむけて袖をかざし、聲はたてじとくひしばる折りしも、音なふ聲の聞き覺えあるに、いそぎて涙ぬぐひて出でゝ迎ふれば、前夜兄を送りて來られたる川田の君なりけり。

前夜は失禮つかまつりぬ。是迄一日も缺がさぬ春野君の見えざるは、二日醉にはあらずやと、例の爽やかなる聲して問はるゝに、いなとよ、肺炎といふ病にかゝりて、打臥しぬ。昨夜は一方ならぬと言はせも果てず、きづかはしや、熱は如何に、食事は如何に、れかまひなくば、いざ、御病人にあはしてたまはれといふ。熱は四十一二度の間にて藥より外には、何も物せざれど、別に心配すべきほどにはあらず。むさくるしけれ

ど、れかまひなくばとて案内す。さて兄の名を呼び、又手を握られけれども、絶えて正氣なかりければ、今は熱の昇りつめたる所なり。このまゝ靜かにして置くが宜しからむ。よほど熱のたかきやうなれど、こは肺炎の常なり。もと肺炎は肺病とは違ひて、不治の病にあらず。熱だになくならば、直にれてたるべければ、つとめて氷にて冷させたまへ。御人數の少くて、さぞや御不自由ならむ。今は學校よりの歸るさなれば、ひとまづ歸りて、やがてまた參らむ。何の御役にもたつまじけれど、心ばかりの御看病にと云はるゝに、その御志はかたじけなけれど、いとかしこし。看病は妾どもにて足りなむ、御身をわづらはせまゐらせては、兄に對してすまず、中々に心苦

しければなど、答へたれど、心の中には、世にかくばかり親切なる人もあればあるものかと覺ぼえず涙の溢れぬ。

御身、兄さまに對してすまざれば、われもまた他所に見過しては、兄さまに對してすまず。竹馬の友にはあらねど、日頃意氣相投じて、兄弟より親しくおつきあひ申せる朋友の中に、何の遠慮の入るべきなど云はるゝに、此上いなむは、反て無禮にやと思ひて、おくまでもうれしき御志、なにぶん宜きにとばかり答へければ、その夜來りて、夜もすがら、いも寢ず看病されぬ。

兄なる人は客好きにて、平生交れる人も多く、常に夜更くるまで語りあひて、いとにぎやかなりしが、病氣になられては

其わりに客の來らず、たま〳〵音づるゝ人ありても、病のことは問はるゝか、問はれぬかに、はや、妾に向ひて、花の噂、芝居の評判、さては役者は誰をか贔負になさるゝなど話しかけらるゝに、世間を知らぬ身の、何と答へむ由もなくて、いと困ずるに、正直一方なるか時の、とりし年に遠慮もうせ、御病人のそばにて、烟草を吹かすは固より、話などせぬがよしと、醫師の申されしにあらずやと、あてつけて言ふに、客よりは妾の顔まづ赤らむこと多かり。なべて日頃親しかりし人のうとくなり、度々來られたる人の足遠くなれるが中に、日頃たえて音づれざりしに、病氣になりて、打てかはりて、しげ〳〵音づれたまひしは、かの川田氏のみなりけり。

始めの夜、徹夜して看病したまひ、それより後も度々來りて夜を明かしたまひ、猶晝の間、幾度となく來られ、熱のやうやう下るを見て、よろこばせたまへり。一旦物も覺えざりし兄も、熱下るにつけて、正氣づき、昨日は四十度、今日は三十九度半とやう〳〵下りゆきて、遂に二週間ばかりにして、兄の病は全く癒えぬ。

病氣の中に、大方の櫻はちりて、春色はや半ばは去りたれど、牡丹花のひらきそめたる庭の面に、春に後れたる八重櫻の猶盛りなるを看に、床上げの祝ひせんとて、知己朋友などを招かれけるに、病氣の時一度も音づれたまはざりし人も見えて、賓客いと多かりしかど、度々徹夜までせられて、妾一家

の力と頼みまゐらし、川田の君のみは來まさず。如何なる御さはりのあるかと、心もとなく、部屋の窓あけて見出す庭の面に、吹くとしもなき春風に自ら散る花片の後追うて、ひら〳〵と飛びゆく孤蝶の姿のあはれさよ。

兼ねてより繁く申込みのありし縁談の、兄の病氣につれて、しばしとだにたりしが、病氣の癒ゆるにつれて、また繁くなりぬ。もとより學問なく、女の道も辨へず、また見目形とても いたく人にまさりたる妾の身の、如何にして世の人には知られたりけむ、いろ〳〵のつて求めて、言ひ入れられし人、いくそばくといふことを知らず。數ならぬ身をかくまでと思へば、人の心のうれしからぬにあらねど、天にも、地にも、唯一

人の血をわけたる兄君と、心細くも相依りて、あけくれ、しばらくも相離れず、なぐさめつ、また慰められつ、氣兼もなく、氣苦勞もなく、かたみに心打明けて、いとむつまじく樂しき月日を送れる蓬生の宿の生活の忘れがたく、もとより一生兄のかゝりうどゝなるべくもあらねど、せめて兄嫁の來させたまふまでは、たゞ此のまゝにてと、兄君に願ひければ、兄君もまた、そなたは女の年頃をすぎたりといふにあらねば、あながちに急がずともよし、心しづかにさがしなは、心にかなふ人もあらむとて、れはかたの緣談は、ことわりけり。

ことわりたれど、なは繁かりける緣談の中に、二度ならず、三度ならず、申込のありしは、さる華族の若殿の、年は二十六歳、

學問も心柄も世にすぐれたる人物、財産は三十萬圓の公債に、地所の幾千坪、舅姑はあれど、子に甘くて、人の好き御方、別に小舅小姑は一人もなしなど、めでたき箇條ならべたてたるが中に、器量を見込みての所望なれば、別に身の拵へは入らず、裸のまゝにて十分と、媒介する人の口のすべりたるに、兄君はや氣に入らせたまはず、われは色を以て妹を賣らず、器量好みする人は頼母しからず、たゞ人は心の持方が大事なり、爵位も財産も何かせむ、そなたは如何にと問はるゝに、妾もしか思ひ侍るとて、この緣談もことわりぬ。

緣談はなは絶えざるが中に、前妻に死別れて一人の子はあれど、年はまだ三十路を二つ越したばかり、さる役所の高等

官にて、世の聞にもよく、財産に不足なく、夫にして不足のなき當世の紳士と媒介する人あれば、さる名高き學校の先生の、父祖傳來の財産とてはなけれど、月々の俸給あまりありて、年猶ほわかく、將來望みある學者とふれ込む人もあり。また嫁入するが厭ならば、五千圓持參して入聟にならむなど、思ひもつかぬことと言はるゝ人もありたれど、たすきにすれば長く、帶にすれば短しとの世のたとへに洩れず、みな兄君の氣に入らで止みぬ。

兄君の常に言はれたるは、幸福といふものは心にありて物にわらず。世の中の上を望めばはてなく、下を望むも果てなし。足ることを知れば、草の庵も、現世の淨土にて、あかぬ心の

煩脳に苦しめば、金殿玉樓もさながら針の席ぞやまた、昨日の淵は今日の瀬とかはる世の中に、いかでか金銀財寶の常なるべき。よしや爵位はなくとも、財産はなくとも、心だに誠の道にかなふ人ならば、われは好て妹聟にせむ。そなたもまた喜んで夫とすべきなり。

二親には死別れて、頼みとすべき親類もなく、天にも、地にも、血をわけたるは唯一人の妹の、そなたの身を遠くへは離してやりたくなく、財産を分ちて義兄弟を迎へんかとも思へど、小糠三合持つたら養子に行くなと、たとへもある世の中に破なものは養子には來らざるべし。されば、たゞ心に愜ふ誠の人を求めて嫁にはゆくべきなり。

隔てのなき書生同士の事とて、何事も無造作にはこびたるに、われはうれしくて、今夜は鬼の首とりたる心持ぢや。そなたも無論異存なかるべし、いかにか思ふと問はせたまふに、答へむとすれば、言葉俄に胸につかへて、しばしたゆたひければ、兄君はいらちたまひて、この縁談そなたは厭か。

學のわざに暇なき兄君の、我身のために、かくまで心を勞したまふかと思へば、うれしくも、またかたじけなくも、はや涙のかつるをとゞめもあへず。いたはしや、亡き親の世にいましたまはんには、かゝる俗事の、學問のさまたげにもなるべきことといも、心配したまふに及ばで、ひたすら、學の道にいそしみたまはんものをと思へば、また亡き親の事まで、思ひい

でられて、涙のひときは溢るゝも云ふ甲斐なき女の身の恥づかしや。兄上様のよしと思はるゝことに、もとより、よろづ兄上さまを仰ぎまつる身の、いかでかことざまに思ふことのはべるべきとばかり、涙のひまに、からうじて洩れいづる聲音もて、いらへければ、それ聞きて全く安心せしぢや、今より三年のちの事か、四年のちの事か、しかとは分らねど、さきより人して申込のあるまではなほ、これまでの通りの處女の身なり。たゞそなたの行末のことは、この兄の心にこめてあれば、その間はよろづ謹しみ、いそしみて、人の家を治むるに足るだけの資格をそなふべし。もと、この事は、たゞかたみの心の中の約束にして、いまだ知もてだちての縁談ならね

ば、時の來るまでは、かろ〳〵しく披露すべきにあらず、さらでだに、世にうるさき人の口、如何にか聞き誤りて、よからぬ噂たつるやもはかられず。もし他より縁談申込む人ありとも、たゞ猶四五年は家にありて修業するつもりなればとのみ云ひて、ことわらむと、あくまでも心をくばりて、さとしたまふに、いらへむ言葉はなくて、溢るゝものは、たゞ涙のみなり。

世にすぐれたる人を所天とたのまむは、げに身にあまりたる果報ともいふべきに、まして、あくまでも親切にして、あはれみの深き人の心身に取りて、こよなきたよりと思ひて、ふつゝかなる身のなぐさまるゝ由もあれど、すぐれたる人に

は、すぐれたる身ならではふさはしからず、たらはぬを如何にせむと思へば、胸はちゞに亂れて、たとひ榮華をうくとも、出でゝ人の家にとつぎて、浮世の仇浪にたゞよはむよりは、いつまでも心置きなく、親しきはらからと共にあらまほしくまゝになるならば、世に老といふことも、死といふことなく、父母もとの如く世にあらせたまひて、妾も老ゆることなく、昔のまゝに膝下に侍りてむと思はるゝも、わりなしや。」

わざとかくすべきことにもあらねば、年久しく我家につかへて、よろづまめやかに、親戚よりも親しくなりて、今は他人とも思はれぬ老女の「時」には、兄君より精しく話してきかされけるに、いたくよろこびて、もはや五十路の坂を越えて、惜

しからぬ身には侍れど、それうけたまはりて、また命のほしくなりぬ。御器量いへば更なり、御心まで貴婦人としてたらひ給はぬこともなき嬢様の行末、いかに榮えたまふらむ。嬢様のかたづきたまふまでは、如何なることありても、死ぬべからざる身の上にはべるなり。さて、いよ〳〵御祝言の時には、この婆が一生の思ひ出に在所の田舍躍をお目にかけまゐらせむ。むさくるしき老婆なりとも、きらひたまふことなく、相變らず御心かけたまひてやと、はや取越し苦勞する詞の底の心を汲むも、亦涙の種なりけり。

ねむられぬ夜をやうやく明して、茶柱にも心置かれ、空しく窓にうつる鳥の影に小さき胸のをどりしてと、いかばかり

なりけむ。今は我と我心にとがめられ、二年も、三年も、修業つみて、人並の身となるまでは、ふつゝかなる身の、穴にも入りて、人の目にはふれざらむと、祈るもいとくるしかりけり。

花落ち水流れて、春もいつしか暮れぬ。ふりつゞきたる五月雨に、時ならぬかきはの雪むなしくくだされて、いとゞさびしき夕まぐれに、看病以來たにて來りたまはざりし川田の君、意外にも音づれたまへり。平生の爽快なる氣象には似ずいとうち萎れて見えさせたまふに、如何なる故にかと、怪しく思ふのみにて、ひとり部屋にとぢこもりてありけるに、一時間ばかりたつて、兄君入らせたまひ、こや玉子、世にてまりたる事の起りしゞや。今日川田の來りしは他の事ならず。か

ねて、川田をそねむ人のありけるが、如何にしてか、さきつ日、約束せしことを聞きしりけむ。その人も同じ學友なれど、その人柄好ましからず。いつぞや、君の妹くれぬかと、うちつけにいはれしことありたれど、虫がすかぬ人なれば、誰がやるものかと、はねつけたりき。かゝれば川田をそねむこと、ひときは強くなりて、あしざまに言ひふらし、さきつ日、看病にかこつけて、いふに忍びざる行ありきとさへ、讒言しけるとか、や。川田はもとたよりなき身にて、やうやくその郷里の先輩どもより學資をうけて勉強せるなり。さてその同郷出身の先輩どもは、それ〳〵分に應じて金を出し、すぐれたる同縣の學生をえらびて、之に學資を給しけるが、川田は、やがて、そ

の學生の一人なり。ことに同縣出身の顯官に、北村正春といふ人ありて、いたく川田を信用して、その子だちに見習ひにもとて、その家に置きて養ひけるなり。さるにはからずも、たびの讒言、まことに看病に來りしことありたれば、あざむくにその道を以てすれば、君子もあざむかるゝ世のならはし、曹參の母も、その子、人を殺せりと告げらるゝこと三度に及びては、遂に機を下りしとかや。されば、かたく信用したる北村氏をはじめ、諸先輩も、今は川田をうたがひて怒ることは一方ならず。かく嫌疑を蒙りたる上は、先輩だちの恩にそむかざらむとせば、未來長く我家との關係をたちて、その身の潔白を示さゝるべからず。又我と約せし一片の信を守らむ

とせば、うけし恩義にそむかざるべからず。いづれに従ふが人の道なるか、萬事われに任かして、よろしきやうに教へくれよとなり。われも意見あれど、そなたは、まづ如何にか思ふと、思ひもかけぬ言の葉に、胸まづふさがりて、とみに答えむ詞も出でざりければ、兄君いらちたまひて、すぐに返答せずともよし、よく〳〵考へ置くべしとて立たむとしたまふ袂を押へ、またせたまへ、兄上さま、數にもたらぬ妾が身は如何にもなりなむ。妾の故を以て、正しき人をきずつくべうもあらずと、涙ながらにいらへければ、兄君は、しばし沈吟したまひしが、やがて、つと身を起して、立ち去りたまひぬ。あとには、老女の時來りて、慰めむとすれど、これも悲みに堪へでや、同

じさまに伏し沈みぬ。空には五月雨いよ〳〵ふりしきりて、血を吐く時鳥の八千八聲の身にしみてかなしかりける。

瓜田に履を入れず李下に冠を正さずと云ひけむげにうたがはれ易きは男女の間なり。平生品行正しきも、この道ばかりは思案の外とて、人は容易に承知せず。されば古歌にも、陸奥にありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけりと云ひけむ古の恨も思ひやられて、ほす由もなき濡衣の、よしや人にはそしらるゝとも、正しき心、正しき行は、神こそ知らさめ、かどろの奥にもなほ道ある世の中、思ふどちすみなば、草の席も、などかつらからむと思へど、あたら望みある身の、花にもさかさすめゝしきことにかゝづらひて、一生を

誤らせまつらむは、心苦しくまた、まことに其人を愛する道にもあらず、一旦被りしなき名をそいぐには、これまでの事は、唯一時のうれしき夢とあきらめて、ちぎりことも取り消すの外あらすと、いさぎよく決心して、妾は今日までも、むなしく孤燈を守りぬ。

かく決心するまでの妾の心の中は、千々に亂れたりと、云はむも、いまだつくさじ決心してよりのちも、女心のめゝしく、雨のふる夜など、そのかみのことと思ひいだして、夜もすがら寝もせず、むなしく袂をしぼることもありけり。

あつく兄上の病をいたはりたまへるを見て、世にたのもしき誠心と深く感じけるに、その看病の爲にとて、我家にやど

りたまひしこと、反て疑をうくる種とならむとは、我も人も思ひがけきやげに、世の中は、あざなふ縄に似て、禍福の伏する所、もとよりはかり難かり。川田の君も、心苦しく思はれて、我身はともかくも、一言の信はそむくべからず、また我身の故を以て、正しき貴女の名を汚すべからずと、のたまへど、兄上しひて説きすゝめ、烏鵲、風冷かに、赤縄ながく絶にぬ。

この事きいかじりて、薔薇はうるはしくても、なほ針あり、あの顔して居ても、もつたが病のいたづら娘、もらはざりしはもつけの幸なりけりとひそかにのゝしる人の言の葉、きくにつけても、いと苦しく、月日は、こゝには照りたまはぬかと、恨みしこともいくそたび、中には、また若氣のあやまりは誰

れも免れぬ事、雨ふりて地の固まる譬もあれば、またくすつべくもあらねど、賣物の身の疵は疵なり。さるにその疵物をいとはず、もらひうけむといふ心に免じて、承諾せずやなど、さかしらだちて、世話する人あるも、いと腹立たしかりけり。兄君はさすがに、思慮ふかくて、この後、縁談のことは、おくびにも出したまはざりしが、老女の時は、教育なき身の、思慮足らず、これが祝言のすみしといふにあらず、夫とし仰がるゝ人は、川田の君のみとも限らず、お嬢様のお顔立ならば、お心だてなら、何處へお出なされても、引けをとらるゝをならず、早く、よき旦那さがして、おかたづきあそばせやと云はれ、人の心も知らで、つか〳〵物な言ひそと、覺えず口走りけるが、時

を叱りしことは、あとにも、さきにも、唯此時一度のみにて、折角の心づかひを、かくまで、あら〳〵しく言はでもよかりしと、後にて、ひそかにくやみぬ。

よしや、此世の縁のうすくして、一夜のなさけだにかはさずとも、兄君の許したまひおのれもそれと思ひし人をおきて。重きが上の小夜衣、わがつまならぬつまや重ぬべき。夢よりも仇なる世の中に、いづれか長くさめぬものあらむ。わが思ふ人のためには、火水の中もいとはじ。口善惡なき浮世の義理に、恩愛のきづなをたちて、一生世をよせむ蔭なく、あしがきのへだゝりてのみあらむとも、思ふ心のかよひ路には、をちこちのわかちもあらず、たゞ、心の中に、君のおもかげを仰

ぎて、此世の夢は結ばむと、思ひたつ日の足はやく、桑田海とかはれる世の中に、四十路あまりの榮枯得衰喪を閲みして、頭には霜をおき、腰はあづさの弓とまがりても、今にかはらぬものはこの心のみなり。

二年三年たつほどに、兄君は、學校を卒業したまひ、實業社會に立ち入りたまひたれど、腐敗したる世に、心にかなふ人なく、樂しきことは、少きものから國の爲にと、志のびて、年を經しが、はからざる損害のために、家産多く失ひたまひ、風の心地と、うちふしたまひしが、喉より氣管支にうつり、氣管支より肺に入りて、遂にたゝせたまはず、未だ三十路の坂も越えぬ身の、むなしく前途の望をもたらして、北邙一片の烟と消

えぬ。

さらでだに、世にたよりなかりしに、兄に死別れて、今は血をわかてる人は一人もあらず、いつゞやのなき名は、七十五日とのたとへにもれず、たゞたく世に忘られしのみか、此身まで人に忘られて、夢ならでは、うつゝに語らふ人なく、天老い、地荒れて、すだく虫も諸音にむせびて、秋風とてしなへに冷かなり。

息絶えたまふ時までも、死期の近づくことは知りたまはず、むくみを肉のつきたるものと思ひたまひて、のたまへるやう、日頃心持のよさ、肺病は不治の病なれど、吐血する肺病は、その塲所にて、かたまりて、他の部分に及ぼさず、長くながら

ふためし、いと多かり。わが病も吐血する方なれば、或はこのまゝにてかたまるかも知れず。病癒えなば、また、亂雜なる實業社會には入らじ。御身を伴ひて、心のまゝに天下の名勝を尋ね、清風明月を友とし、平生好める筆とりて、天地の美をうつし、文人として後の世に名は殘すべしと、のたまひし言の葉は、長く耳にのこれど、身は早くも白玉樓中の人となりたまひぬ。また、何時の日にか、筆とりて、胸中限りなき詩思を寫したまふべき。かきのこしたまひし幾卷の遺稿なか〳〵に、かたみこそ今はあだの思ひせられて、心やらむ方なく、やうやく野邊の營をすまして、日毎に清き水を供へつゝ、四十九日に及びけるが墓場に入る時、ふと認めたる後姿、まがうべ

くもあらず、心の覺あるに、墓前には今さゝげしばかりなる香火の立ちのぼれるを見て、人の心のうれしさ、なか〳〵に涙のたねとなりて、覺にず墓前にうちふしゝも、はかなき昔の夢のあとなりけり。

都の空はすみうくて、時の在所なる此王子村に來りてより、こゝに四十年餘、時も間もなく、彼世の人となりて、あれたる草の舍に、おのれ一人すまへど、身に覺えし讀書、習字、たちぬひのわざなど、村の子供にさづけ、心ある人には、また、生花、茶の湯、さては敷島の道など、をしへて、餞ゑもせず、こゞえもせず、今日まで生きのびたれど、最早世にある日は、多からじ。思へば、浮世は長き夢なりけり。さるにても、川田の君は、今は如

何にかなりたまひけむ。遠からずして、兩親はじめ兄君にあひまつりて、浮世の夢を語る時あらむと思へば、いとうれしうなむ。

春野玉子記

＊　＊　＊　＊

翁はよみさして、しきりに涙を拭ひけるが、また取りあげて、そおこゝ拾ひよみしては、こぼれいづる涙、更にとゞめもあへず。かゝりしほどに、門外に跫音して、人の歸りくるけはひなれば、泣顔見られじと、いそぎて眼をぬぐはむとするに紛れて、讀みし書物はもとの所に置くの遑なかりけるに、はや入り來れるは、六十路ばかりの媼、みじかく白くのこれる髪

をうしろになでつけて、綸子の被布長くしなやかに着こなし、下には貝褄の小紋縮緬つけたる身のさま、いと氣高し。今日は墓參にとて參りたるに、女の足のはかゞしからず、いたうおそなはりて、さぞな待ちわびたまひけむ。許させたまへと云へば、いなとよ、いつも參る刻限のさほど過ぎたるにもあらず、たゞ今日は、小春日和のあたゝかさに、心も自らうきたち、面白き話など、うけたまはらむとて、例の刻限より早く參りたるに、御留守ときゝて、少し失望したれど、やがてかへりたまはむ、出でますときき、來りたまはゞ、あがりてまたるゝやうにとのおことづけなりと、女中の申すに、おなじみの中とて、遠慮もいたさず、お言葉のありしまゝに、おざしきに

通りて待ちけるに、はからずも、面白き筆の御すさび拝見して、今日ばかりかなしさ覺えたることはあらず、又心のゆきたることもあらず。見そなはせ、さらでも脆き老の目に、涙の自からこぼれいでたる恥づかしさよなど云へば、媼は、いたく驚きたるさまにて、さてはゝ人には見にじとて、ひそかに物しゝ文の愚痴ばかりつらねたるが、いそぎて出でゆく途端、秘め置くことを忘れはべりしまゝにはからずも、御身の目に入りしかとばかりにて、皺ばかりなる顔にこそゆふばえはさいねど、心にはいとゞはじもみぢ、自ら色にあらはれて、えばし翁の顔と、かたへなる書とを見くらべて、いとはづかしげに袖うち掩ひたるさま、年は老いても、さすがは女なり。

茶まゐらせむとにや、急須とりあげゝるが、つめたくして、湯のなきさまなれば、女中よびて湯を入れさせ、茶飲茶碗には自らつぎて、翁の飲むを見て、おのれも少しばかり飲みつゝ、昨日の兼題は、みなよみたまへりや。歌をよみはじめたまひてより、まだ多くの日もたゝぬに、さては御上達のすみやかさよ、などいふ聲、皺枯れても、何所やらやさしく、鶯なかしゝ老木の昔のしばるゝ身のさまなり。

みな咏みて、御添删願はむとて、まゐりたれど、今日はもはや歌のことなど申すべくもあらず。早く御身につげまゐらすべきひとくだりの物語こそあれ、いざ、えばし聞かせたまへなり。

や。

さるにても、如何にかなりたまひけむと御身のしるされたる川田清憲ぬしは、今もなほ無事にておはすなり。學校を出でいのちは、益々立身して、世にときめきけるが、御身が一生處女にて終り給ひし如く、彼人も亦一生妻をむかへざれば、世の人々怪みて、そのわけをとへど、思ふよしありとのみにて、更に言はず。終には今辨慶と噂されつゝ、今にいたれるなりと、語り來りて、聲自からうるみつゝ、媼を顧れば、はや袖を顔にあてゝ打ちふし居たり。

やよ、玉子の君、これよりは我身の懺悔話、かへらぬ昔は水に流し、今のうついにおいさらばひしてこの老の身、如何やうにも、さいなみ給ひて、ありし昔の罪は許させたまへ。あはれかくまでに清淨無垢にして、つゆくらき處なき佳人をしてむなしく深山の花と散らしめ、道德堅固なる才子を一生男やもめに虫わかさしめしものは、誰の罪にもあらず、みなこのやつがれが身の過なり。

今は本姓にたちかへりて本山正春と申せば、御身も心づきたまはざるべけれど、もとは北村正春と申しゝ身の上なりと云へば、媼はひときは打ち沈むならむと思の外、頭をもたげて涙をはらひ、さては、御身が北村正春どのにておはしけるか、いたづらにものしゝ文、御目にとまりて、御心をなやますてと、いと罪ふかし、許させたまへや。何事も我身の運命の

つたなきにて、つゆ御身の罪にはあらぬものをといふに、清き心の底もくまれて、尊しとも尊し。

神ならぬ身の、我もむかしは、一時、御身と川田とをうたがひたることのはづかしさよ。思へば、そのかみ、川田の學友にて、しば〳〵我家にも來りし加藤文之助といふ人の言葉に、あざむかれたることの口惜しさ。のちにいたりて、はじめて悟りぬ。今更かたるも、けがらはし。たゞ一言にてそのあらましをいへば、われに一人の姪ありて、いとけなき時より育てしが、いつしか川田に思ひかけて、つけぶみなどしけれど、川田はもとより堅き身なれば、つゆ取りあはでありけるを、彼の加藤もとより我が姪に思をかけゝるに、かくと知りて、戀路

の邪魔とて、己れが親友に濡衣きせし心のきたなさよ。されど、加藤も生來の惡人にはあらず、かゝることなせしは、みな戀といふ魔物のなせしわざなり。

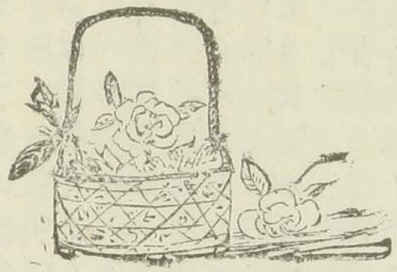
その時は川田、御身と關係をたちて我にあやまりけるに、我もその平生の行にめでゝ許しけるが、のち我が過を知るにいたりて、反て我より川田にあやまり、もとの約束のまゝにせよといひたれど、男にも似合はず、かゝる未練なこと言ひたまふかとて、從はず。口には實にかく言へど、あはれや、その身は一生男やもめにすごしたるなり。

我も強ひむ由なくて、今にいたりけるが、川田はつゆ我を恨みず。昔の一飯の恩をわすれじとや、今もなほ、我が退隱せる

此片田舍にまで、たび〳〵ふとづれくるなり、とかたる折りしも、ドンと一發鉄砲の音ひゞきて榎の上に鳴きをりし一羽の鴉鳥、ひらりと庭にかち來れり。二人はおどろきて、庭の面をみかへる折しも、下女に伴はれて庭先に來りし一人の老人はうちし鉄砲のあるじなるらむ。媼と顔みあはせて、いぶかしと思ふ氣色の見えけるが、忽ち翁と顔みあはせて、さていはこゝにおはしたるか、今日ひねもすかりくらしいさゝか鳥を穫たれば、御身と共に一の鍋に對して、こゝろよき御話しうけたまはらむとてまゐりたるに、例の歌の先生がりゆかれたりとのことにて、日はまだ高し、今二三羽うち添へむとて、こゝまでまゐりたるに、ゆくりなくも、こゝにて御身

に對面したる不思議さよといへば、以前の翁はうち笑みて、不思議と云へばそれに止まらず昔の紅顔は今の白髪とかはりたれど、川田ぬしよ、御身は猶覺えあらむ、又玉子ぬしも。忘れたまふべくもあらざる面影なるべし。かく三人がこゝに落ち合ひしは、不思議の中の不思議にて、まるで小説にありさうな話なり。まづ〳〵こゝにわがりたまへとて、座敷に請じて、「飛鳥川」のことゝ、さては今迄うはさせしことまで、つばらにうち語り、今は共に色も香もなき老木の身の、結婚などは、おぼさゞるべけれど、せめて此身の罪ほろぼし、御兩人、何事も我にまかせたまへ、思ひたつ日を黄道吉日、媒介は此身の役、久しく聞きもせず、口にもせざりしが、まだ忘れては居

るまじいでや、高砂や、この浦風に帆をあげて、月もろともに入るしほの〳〵、それから後は、よし〳〵、めでたやうれしや。



旗手

見渡すかぎり　野も山も
　　ついの烟に　かはれぬ。
天つ日影は　てりながら
　　晝なほ闇の　でとくなり。
闇をつんざく　いなづまの
　　光とや見む　うちかざす
つるぎの山や　死出の山、
山さへさけむ　ばかりなり。

ふりくる丸を　ものとせず
すゝめ〳〵と　叫びつゝ、
やみにも著き　日の御旗
さゝげてゆくは　誰ならむ。

折りしも敵の　ながれ玉
あはや横より　とびきたり、
顔をかすむと　見るほどに
くだけてちりぬ、そのまなこ。

いさむ心の　いきほひに
うけし手創は　つゆ知らず、
前も同じき　やみの空
たゞひとすぢに　進みゆく。

とりでは遂に　陥りて
勝利々々と　呼ぶ聲に、
旗ふしたてゝ　のびあがり
看れども見えず、闇の空。

その目はいかにと　たゞされて

はじめて悟る　身の手創。
さぐれば如何に　そも如何に、
目に殘れるは　血潮にて。

君にさいげし　このからだ、
眼はなどか　をしからむ。
命よりけに　尊きは、
君のたまへる　御旗なり。

命にかへて　まもりたる
御旗はもとの　まゐにして、

またゝくひまに　敵砦を
拔き倒したる　うれしさよ。

めぐみも深き　みかどには、
あはれとばかり　聞しめし、
かたじけなくも　旨目の
士官を宮に　めし給ふ。

九重ふかく　はんべりて、
見えねどかしこき　君の前、
玉の御聲に　思はずも

まなこなき目に　涌く涙。

きみの御稜威と　もろともあ
ひかりかがやく　日の御旗、
花はさらく木　人は武士、
ほまれは絶えじ、　よろづ世に、

南朝の名花

南朝五十年の春、東風吹き荒れて、豺狼、路に横はり、雲深き古野の奥、花に涙をそゝぎ、草しげき黒木の宮、鳥に心をふどろかす世のなりゆきのうたてさよなゝ玉夢ふだやかならざりし御有様、申したてまつるも、いとかしこし。三木枯れ、一草しぼみ、忠臣、前後、熱血を賊庭にそゝぎ、一命を鴻毛にくらべて、骨を野外の月にさらしたる跡、いづれも、あはれならぬはなきに、色も香もゆかしき一本の名花、空しく深山の奥に朽ちはてゝ、かぐはしき心の一輪の花片、谷水の流るゝまに、世につたはりて、永くあはれをとゞめたる辨内侍、げに

や、才色人にすぐれ、徳操世にまれなるに、一生薄命をきはめて、恨を南山の雲に付したるは、いたはしきことの限りなりけり。

辨内侍は右少辨俊基朝臣の娘なり。後醍醐天皇、北條氏の悪をこらさむとしたまひしに、その謀もれて、俊基朝臣は、首謀者のことゝて、關東に捕へられけるが、終に葛原が岡の白露と消えうせぬ。その妻なる人、身の不幸をかこつのあまり、浮世を三衣の中にさけぬ。かく父には死別れ、母には棄てられて、よるべなき孤兒の身の上、かなしがりて、俊基朝臣の兄、行氏卿は、辨内侍をその家にむかへとりて、子のごとくいつくしむに、心なぐさめられて、あぢきなき世をすごしけるに、そ

の才徳、いつしか、雲の上に聞え、召しいだされて、後醍醐天皇の宮につかへけり。東魚西鳥、一場の夢に歸し、天下は、獼猴のごときものにかき亂されて、後醍醐天皇、都をいでさせたまひて、吉野の行宮にうつりたまひしほど、辨内侍、また、從ひまつりて、かしづきたてまつること、いよ〳〵怠らざりけり。

或夜、みかど、中納言隆資卿、洞院の實世卿、宗房卿など、御前に召しいださせたまひ、御酒たまはらむとて、辨内侍に酌とらせたまひけるに、いかゞしけむ、はからずも、御土器、ふとせば、二片にわれぬ。御けしき、かはりて見えさせたまひければ、内侍、直に、

さかづきのわれてぞいづる雲の上

と、よみいでけるに、いと、興じたまひて、誰か、下句、つけてよと、れはせさせたまふ。宗房卿、とりあへず、

ほしのくらゐの光そへばや

と、つけゝれば、みかど、御感、なゝめならず、いと、こゝろよく、御杯、かたむけたまひて、夜のあくるまで、うたげしたまひきとかやげに、この内侍の才の人にすぐれたること、これをもて、おしはかるに足りなむ。

かくて御醍醐天皇は御いたつき、れもくならせたまひて、つるぎを按じつゝ、みまかりたまふ。御心の中、いかに、くやしかりけむ。内侍は、怙恃を失ひたる孤兒の身のよる方なきに、今又、君に別れまつりて、悲歎の涙に、昨日と暮れ、今日とすごし

けるほどに、ゆくりなきことこそ起りけれ。内侍は、才徳のすぐれたるのみならず、類稀なる美人にして、柳の腰、しなやかに、紅の頬、香露したるが如く、一たび笑へば、吉野の花も色なく、三五の月も光を失はむばかりなるが、賊將、高師直、いつのほどにか、垣間見たりけむ、思慕の情、いと切にして、人目をしのぶずりの、亂れにみだれ、思ひたえなむとばかりを、水茎の跡によせて、幾度か、送りけれども、心高く、操正しき辨内侍、いかでか、逆賊の心になびくべき、いたく、そのなめげなるを怒りて、手にだに觸れざりければ、丸木橋のそれならで、むないくふみかへされて、夢魂いたづらに、峯の雲に迷ふばかりないけり。かゝりしほどに師直ふと思ひつきたることあり。そ

の知りあひたる女、内侍の叔父なる三位行氏卿のもとに、親しく行きかよひければ、その女して、ひそかに行氏卿の北の方に、切なる思ひを打明して、さて、いはしむるやう、思ふこと、かなへしめたまはゞ、三位殿の位をすゝめ、領地をもあまたつけ侍らむなど、利をもて誘ひければ、北の方、慾に目くれて、之をうべなひぬ。さて内侍に送る文をとゝのへ、梅が枝といふ侍女にもたし、侍、二十人ばかり添へて、吉野の行宮につかはしけり。之の文には、はるかにこそ渡らせたまへ、山里の御すまひ、さこそと思ひやらるゝごとに、袖をこそしぼりあへね、御こひしさの、いとせめて、住吉へ詣で侍りしほどに、道のたよりも、然るべければ、あひたてまつらむことを思ひて、河内

國とかや、高安のほとりに知りたる人のさふらふに、參りてこそ、待ちたてまつれ。はかなき世の中の、まして、みだれがはしければ、此度ならでは、いかで相見むなどかきて、その終りに

あひみむと思ふ心をさきたてゝ
　袖にしられぬ道芝の露

とありければ、年頃そだてられて、恩あつき叔母の身の、かくばかり慕ふ心の切なるに、梅が枝さへ年久しくなれたる女にて、そのいふこと、まめだちて見えければ、いと、なつかしくて、君に奏しけるに、御暇たまはりければ、うれしさ云はむかたなく、女房二人、青侍三人つれて、たちいでぬ。その路に、人あ

また、いであひて、いふやう、北の方は、高安に待ちてゐはしたれど、やみがたきことありて住吉にゆかせたまへり。されば、遠けれど、かしこまで行きたまへといへば、青侍ども首をうちふり、そは心得ぬことかな、高安までとて、暇たまはりて來りたるものを、いかでか、はるゝ〳〵住吉までゆかるべきとて、いなみければ、いたく怒りて、その三人を打殺してけり。二人の女房は、たゞわな〳〵とふるへるのみにて、せむ術を知らず、かの人々が内侍の乘りたる輿を奪ひてゆくまゝに、從ひゆきぬ。内侍は、たゞ鬼にとられたる心地して、輿の中に、ひたなきに泣きつゝ、石川といふ所までゆきしほど、楠正行、吉野の宮にめしいだされて來りけるが、輿の中に、女の泣聲しき

りなれば、いとあやしみ、立ちよりて、その故をとへば、あざむかれて奪ひとられたるなりといふ。正行、やがて、ひきつれたる郎等に命じて、そのくせものどもを捕へしめけるに、大方はいけどりぬ。三人、四人、劍ぬきつれて、斬てかゝりければ、之をば、みな、殺しつ。たすけ得たる内侍と、いけどりたる曲物どもをゐて、吉野の宮にまゐりて、この由、奏しければ、梅が枝を詰問せしめたまふに、師直のたくみなることゝ、わかりぬ。こゝに、曲物どもは、みな、殺し、梅が枝をば、尼となして、京都にかへしけり。かく内侍の危難を免れしは、またく、正行の功なりと、後村上天皇、ふかく、よろこばせたまひ、内侍を正行にたまはらむと、れはせさせたまひしを、正行は、

とても世にながらふべくもあらぬ身の
かりの契りをいかで結ばむ

といふ一首の歌をたてまつりて、いなみまつりぬ。そは、いさぎよく討死して、君恩に報いむと心定めたる身の、女などにかゝづらひて、おくれをとらば、此上なき不忠なるべく、また、一日の思の爲に、百年の身をあやまらしむるに忍びざれば なり。されば、そのつれなきは、眞に、つれなきにはあらで、なかなかに、情ふかき武夫なりけり。

いくほどもなく、正行は、如意輪堂の扉に、むなしく、無き數に入る名をとゞめて、その身は、果して、四條畷の朝露と消えうせぬ。あはれ、赤繩結ぶに由なかりきといへども、みかどの許

したまひし夫、危難をすくはれし恩人、いかでか、よそに見すごすべきとて、内侍は、後に、龍門の里に、さゝやかなる庵を結びて、一生、かたく操を守りつゝ、正行の冥福をいのりきとかや。

今時の女は、重きがうへの小夜衣を重ねて、耻とせざるならはしなるに、古の女は、ちぎりもかはさゞる人にだに、かくばかりの操はたてけるなり。

風流鴨

菅の根の長き旅路に、幾年もたつきに慣れし夜半の空、浪の浮床ゆふべに立ちて、越ゆる山路の奥ふかく、戀しき妻とうちつれて、共に飛びゆけば、千里も一里、あさる田の面に霜おきて、すさぶも寒き夜風に羽うちかはし、かたるむつ言のかずつもれば、すねても見たり、恨んでも見たり、心にもあらぬ夫婦喧嘩、よそ目はづかしや、と、仰げば高き大空に、淋びしさうにも獨り澄みわたれる月影の、西に傾きゆくすゑは、野となれ山のいたゞきの白らむにつれて、ひゞく鐘の音はたしかにあけ六、寢過したりと起き上り、正體もなくねむりたる妻

をゆすりて、起きぬか〳〵、鐘のなるにとうながせば、ゑゝまあ世話しない、いつになく、暖いあさ日和、寢心がよくて、どんと目があきませぬ。そのやふにいそがるゝなら、獨りでおたちなされ、私はいやじやと、つぶやくもまだねぼけ聲なり。いつも起つ時刻はとうに過ぎたうか〳〵すれば、後悔さきにたゝぬこともあらうぞ。あれ〳〵あそこへ人が來たとでまかせなるかどし文句かゝるをも人は鶴の一聲といひならはしたれど、今よりは鴨の一聲と言ひかへてもよからむと、我ながら得意顔、妻はとびあがりて、あたりきよろ〳〵見廻すさまの可笑しさ。あれひどい人、ふぼにていらしやいと、嘴をとがらして飛びかゝらむとするに、昨夜のちわぐるひの復習

は御免と飛びたてば、妻もをくれじと飛び立ちて、あとになりつ、さきになりつ、あとの雁がさきになつたと里の子供に謠はれながら、霜さゆる朝の風に威勢よく羽のばし、鳴く音を九天の雲に擧げつゝ、住みもなれたる海の面へ通ふあはひの山の峽、ゆかしきゆふべの夢を載せたる羽もむつまじく、ならびて飛ひゆく向ふへ圖からずも躍りあがれる網の目に、いづれ憂きには洩れぬ身の上とはなりにける。

されがいそいだばつかりに、そなたまでが此の繩目、されのやうな夫につれそうたは、よく〳〵の因果とあきらめて、何事もゆるしてくれよと、涙と共にわびければ、妻は案外に平氣な顔付、雄にも似合はぬめゝしいよまひ言、千度百度くり

かへしたとて、なんの役にもたちませぬ、網に落ちたとて、助かるまいものでもなければ、とくと一思案つけるが肝腎じたばたすれば、猶さらにひどいめ目に逢ふは知れて居るほどに、果報は寢てまて、一命は死んだ眞似でもして居れば、そのうちには必ずたすかるてとがでざいませうと、度胸する言葉に勵まされて、おゝそうじや、そなたが其氣なら、己れも安心、二世を契つた二人が身の上、そなたと一所なら、死んでも嬉しいと、死ぬるいまはも愚痴たら〳〵、もろともに死んだ眞似して居たりける。

獵夫の手より鳥屋渡り、いつか繩目をのがれて、盤臺の上に、鳩、鶉、百舌鳥、桃花鳥などと共にならべ置かれければ、もう逃

けださうかとさゝやけば、まあお待ちなされと妻のといむるに、なほ死んだ眞似して居れば、空陰に曇り、風寒き冬の朝の事なり、店外に車を停めて、おゝ寒い〳〵と手袋のまゝ手を揉みながら下り來れる一の紳士、當世風のいでたちは、山高帽子、頭巾の下に埋れ、二重外套の下には、羽二重の羽織ちらと見えて、一種えならぬ匂ひをこぼして、どろんとしたる目附も金縁の目鏡に威光かゞやき、頤鬚剃りたる跡蒼く、鼻の下の長きに、八字髯いかめしく、年は三十前後と見ゆる男盛り、よい鳥がかゝつたと主は平身低頭、たゞへい〳〵とうやまひ申せば、紳士はおちつきすまして鼻先のあしらひ、やがて卷煙草とり出して、さも鷹揚に吹かしながら、かれこれ

と擇びたる末、我等二羽が其氣に入りけむ、この一番をつかひものに、みばの好き籠に入れて、價格はいくらと、談判、金錢の上にうつれば、あるじはそらさず、始めて買ひに來りたる客に向ひて、毎度御贔負にあつかりますから、大勉強いたしましてと前置長く、さて、二圓五十錢とうち出せば、丁度にせよと根切るに、いやもう二價は申しませぬ。どうぞ、その所とは品物が違ひます。この通り新しうございますれば、三週間はたしかに請合申しますとて、ぱた〳〵と我等がからだをはたきてなげだすに、身内の疼を言はむ方なく、いつはつべくとも見にざりし談判、二圓三十錢にてやうやくまとまり、我れ等は仕合せよくも諸共に一の竹籠に入

れられ、紳士の手にわたりて車にのせらるゝに、大事の贈り物なれば膝の上とは思ひの外、足のうしろにをしこめられつゝがら〳〵と威勢よく走りし車たちまち止りて、れ歸りと濁聲高く叫べば、來るは〳〵書生が三人、飯焚が一人、仲働が一人、小間使が一人、玄關につらりと並びて齊しくひれふしたる頭顱の前を、紳士は見下したまゝ通りすぎて奥に入りしが、我等は間もなく車夫の手より仲働の手にわたりて、また紳士の前に出でぬ。長火鉢の側に行儀よく坐はれる一人の女の、丸髷のおくれ毛かきあげながら、恨めしさうに見付くるは、白元、可愛らしくも、また凄ましかりしが、さきほどよりの詞のつゞきと見えて、この年末のいそがしいのに、人の氣

も知らないで、よくも内をれ明けなさるとみなまで言はせず、御立腹は御尤も千萬、さりながら、拙者もつひ酔ひ倒れまして、友達の家へ一晩とまりましたが何の不審、これは輕少ながら、あなた樣へ歳暮の寸志どうぞ御機嫌直してと口先輕く、我等を妻君の前へ出せは、人を馬鹿になさいましと横にむきしが、れかみ大明神さま、この通りお拜みますほどにもう許るしてやると御詫宣があつてもよいでせうと、人の手前、否、鴨の手前も耻ぢず、疊に伏して手をあはせなど馬鹿げた眞似すれば妻君〻恢へきれず、ほゝとうち笑みて、一體これは何處へおあげなさるのと問へば、御機嫌が直りて何より結構、これは實は今の局長にあげやうと存じて、大枚三

圓で買つて參りましたが、いかがでせう、この位なら局長の
紅目にかけても耻しうはござりますまいかと云ふに、もう
ごじやうだんはよい加減になさいましとまづ言葉を咎め、
でたらめに言ひたる代價とも心付ず、私はまたつがひで四
圓もするかと思ひましたに、あなたはいつも買物がお上手、
新しいと見にて、雌雄とも生々して居ります。これならば立
派な歳暮、はんにこれも御出世の糸口すぐ書生にもたして
やりませうかぜめてこれほど世間にかつくしなさるゝ義
理の半分も私にたてゝ下さつたならと、なほ愚痴をこぼし
ながら、玉のやうなる手を延ばし、紅のれが膝へとりあげて。
ためつすがめて、いちくれば、あゝこれ此年暮のいそがしい

のに、何をぐず〳〵すると鸚鵡返しにとけても解けぬ夫の
口振り、かしこまりましたとうはべはおとなしく、つと起ち
あがりて、局長の所へとて一人の書生にわたせば、木綿の兵
兒帶しめ直し、鳥打帽戴きて、籠を片手にいそ〳〵と翼なく
して局長の家に飛びぬ。
今の世に借金なきは働なき人と、相場のきまれる官員社會
の數にもれず果敢なきつるをたよりに奏任一等までとび
あがりたれど、ぶつそうなる世の中は、いつ地震がするかも
知れず、上への心配、下への氣兼に年中、心のやすまるひまも
ないに、年の暮になつて、憂きつらさはまたひときは、金貸に
はせめられて、最はや書き換へも出來ぬ仕儀、さりとて正月

の用意も入れば、歳暮もかくらねばならず。聞けば澤村さまから葡萄酒を下されたとや。あのくらゐ御世話になつた其の上に、御念の入つた下されもの。何か上げずばなるまいが、あゝ〳〵何を云ふても先に立つものは金と、位は高く、職は重く、門構はいかめしく、出入に威勢よく二人引を驅れど、裏に廻れば火の車、憐を催す內證話耳にしながら、書生の手より主人の前にぬつと出づれば、俄かに愁の眉をひらき、あゝこれは〳〵よい贈物、幸じや御苦勞ながら、此を持參して、澤村さまへつひ一と走りいてくれよとて、出しやりてのち、はじめて氣がつき、今のは誰れからの贈りものでありつたと問へば、さうかつしやると面目ない。名札がついて居ましたが、

知らず〳〵もみやぶつてしまひました。あなたどういたしませうと、夫婦がさゝやく言葉を笑止ながらも跡にして、外面に出る間もなく、またも澤村とやら云ふ人の前に出だされぬ。日頃一物も腹に入らずして、目も廻らむばかりに覺ゆる我等の身、今度は籠をひらくかと、喜びし甲斐もなさけなや、主人は唯眺めたばかり、直に名札を取換へて、車を舊藩主の邸へとばし、式臺にぬかづきて、歳暮の寸志、ひとへに御取成しを願ひ奉る。いづれ來春ゆるりとまかりでるでござりませうと、舊恩を忘れざる見せかけは殊勝なれども、あはれや品物は主人公の目には入らず家令が横取りしていち早く、あやしき女の許に贈りけるほどに、大晦日もすぎて、四方

の景色もあら玉の年たちかへり、下戸は雑煮、上戸は酒、しかも屠蘇のはいらないのをと、祝は外所にして、己がじゝ興じささめく世の有様に引きかへて、我等はなほも籠中の楚囚、腹は益へり、氣も遠くなり、命もはや二三日とはつゞかぬと思ふ矢先、主の女は、我等を取り出して、これはい〳〵鴨、あの人と、一つ鍋で煮てたべたら、さぞおいしからうにと言ひつゝ、籠にはさまれたる名札を引き出して、あのいやらしい禿頭がとすた〳〵にひきさき、小形なる自分の名刺を添へて、勿體なくも母親を戀の飛脚われは御年玉と名目かはりて、れ山役者の手に渡りけるが、これも籠をひらかんとはせず、籠をかゝへて華主の屋敷へ伺候し、あけましてれ目出とうで

さります。どうぞ相變りませず御贔負を、此は輕少ながら御年玉のしるしまでにと差出せば、取次の書生は商人と見て取り、ひそかに眉をひそめながら、待てくれよとて、歸しやらず、禮もそこ〳〵にして、籠を主人の前に持ち行きけるは、曾てある商人の鼻うかとうけとりて、主人の目玉喰ひたるに懲りたる仕打にや、貰つてもよいとの主人詞に、書生よろこびて去りたるのち、其物越しから、瓜はづれまて、能く似た事と怪しみてつら〳〵見るに、羽二重の羽織は紬地とかはり、高帽子も二重外套もなけれども、たしかに見覺えのある金縁の目金に八字の髯はじめに我を買ひたる人と紛ふよし更にあらざりける。

笑止や人間の眼力鈍くかくとは絶えて知る由もなく、細君に見せて、これ見や、何とよい鴨ではないかと云へば、ほんに生々して、いつぞや買つた鴨によく似て居ります。どれ今晩の御酒の肴に、早速料理と庖丁にて結べる縄を切りはなし、蓋を開いて手をかくるとしや遅しと飛び上りて見れども出づる路なければ、思ひつきたる即座の妙計呆れ果てたる細君の顔を目がけて飛びかゝれば、あつといひつゝ顔をそむけ、障子を明けてかけ出る。われ等、そのあとに従ひて、ひらりと高く屋根へ上れば、あるじ夫婦は半狂亂、にげたゝ、口惜しや書生も來い、女も來い、鳥を捕ふる工夫はないかと驚きさわぐ主人夫婦、足下より鳥がたつたとは、此時よりぞ云

ひはじめける。やがて、家中一同出で來りて、火箸をなげたり物干竿をふりまはしたり、あれよゝとばかりにて、あわてふためくほどに、お前があまりあわて過ぎたから、鳥をにがしたと、主人の男うらみ云へば、あのやうに飛びつかれて、どうして周章られずに居られませう。あなたはまた私を助けやうともなさらず、平氣で見られて、ほんに思ふほどにもない不人情な御方とまたも夫婦喧嘩はじめけるに可笑しくもまた氣の毒にて、見すてゝ去るに忍びざれども、我等も命が惜しければ、御苦勞至極と、一禮そこゝ、命助かりしと思へば、衰へし體もにはかに威勢づき、八重の潮路を風に送られて、歸へるも嬉しき故郷の海の上、星を洗ふ水音に枕は安

からねども、浮世の中をわたり比べては、さすがに阿波の鳴門に風波もなしと古人の述懷げにや人間は馬鹿なもの、人間を籠絡することは、我等風情にても、何の苦もなき事ぞかしさるにても、むかし彦根婆とあだ名されたる老婆が時代おくれの頑固なる意見を吐きしより、彦根を云ふとの諺起りけるがのろけ半分に下らぬことといふを、人も聞きなば、今よりは鴨談義と云ふいやな名をつけらるゝかも知れずないしよ〳〵。

黄菊白菊　終

明治三十一年十一月廿九日印刷
明治三十一年十二月二日發行
明治三十二年一月十五日再版發行
明治三十二年一月五日三版發行

定價金貳拾五錢

版權所有

作者　大町芳衛
發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市神田區錦町三丁目廿五番地　熊田宜遜
印刷所　東京市神田區錦町三丁目廿五番地　熊田活版所

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

文學士 鹽井雨江君
文學士 武島羽衣君 文學士 大町桂月君合作

美文 韻文

花紅葉

全壹冊總クロース金文字入洋裝美本
正價金參拾錢
郵稅金六錢

美文（●折太刀●墓畔の秋夕●金明水●ゆく水●大風雨●日光山の奥●あだ形見●秋の山ふみ●病院●竹馬の友●露分衣●荒寺●須磨の一夜●笛の音●春の夢●荒野の鶴鴿●夢の跡●古塚

目次

韻文（●ぬれ燕●磯の笛竹●琵琶湖●巣だつ鵲鳥●魂まつり●たゆたう駒●戰死卒●秋蟬●故郷の花●戀●立秋●野末の伏屋●秋の蟬●落葉●涙の雫●詩神

目次

春花秋葉は天の文、人間亦美文辭なかるべけんや。鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士の文名、夙に江湖に騷ぐ。今其錦心繡腸、吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十編、集つて此冊子に在り。才華爛發、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發せんとす。洵に花紅葉を一時に觀るの心地すべく、明治文壇の奇觀たるを、言を待たず。天下文を好むの士、一本を備へて讀誦に資せられんを。

●國民新聞評　鹽井雨武、武島羽衣、大町桂月三文學士の小品又は新體詩を輯錄したるものにして、雨江子の遒勁なる、羽衣子の雅澹なる、桂月子の華贍なる、まことに花紅葉を一時に見るの感なきに非ず。つれ〴〵の好伴侶此上やある。

大和田建樹君著

散文 韻文

雪月花

全壹冊總クロース金文字入洋裝美本
正價金參拾五錢
郵稅六錢

其文は、清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は、優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆となす。此編收むる所、近作無慮二百篇、蓋し落筆振はざる今日、文學界中の旗鼓たるものは、此書を措きて他に又た何かある。

●讀賣新聞評　著者の自叙に曰く「此卷は心して撰び集めたるものにあらず、たゞ事にふれ、折にふれて、書きすさびたるまゝなり。近頃世に出してはと、勸むる人のあるに任せて、名を雪月花とつけつ、月花を詠し、雪霜を記するものに多きに因るのみ」と、是れ大和田氏、錦繡の心腸を寫し出したる者、中には散文あり、韻文あり、學者一讀して此文字に淑せよ。

●國民新聞評　謠曲に精通せるをもて、國文上の編著に富むをもて、多くの讀者を有する大和田氏の散文、韻文各九拾餘を蒐集せるもの、氏の長は守株の弊なきさ、措辭の明麗流暢なるにあり、銘題の普通に新古に亘れるにあり、韻文の諧和にして音律的あるにあり、此點に於ては、思想新警なる新体詩人もまた一等を輸せざるを得ず、要するに最も廣く國文に趣味を有する讀者を歡迎すべき、永夜燈前の好伴侶。

●報知新聞評　雪月花は、大和田建樹氏の韻文と散文を蒐めし、ハンドブックにして、事にふれ、折にふれて、作られしものながら、文の清楚、歌の優雅、殊に積れて愛でたきものなり。

谷信次君編

月の光

全壹冊洋裝袖珍
紙數貳百七拾餘頁
正價金拾八錢
郵稅金四錢

天文●地文●歷史●地理●文學●宗教●風俗●歌謠等の各方面より玲瓏中天に輝く所の月を觀察して、之に對する邦人の思想●風習●故事●美文等を綜合し、而して此一卷寸珍の書に收め、加ふるに幾多の精畫を挿入して、以て文字外の淸趣を發揮す。月夜閑に此書を一讀せば、淸涼の氣自ら心胸を洗ひ來らん。

大和田建樹君編

新文林

全壹冊洋裝美本
紙數四百三拾頁
正價金貳拾四錢
郵稅金六錢

大和田先生は能文の士也、本書は先生の遊記、紀行、諷刺、諧謔、論、說、傳、序等を收む。或は優美嬪麗、或は淒涼寂寞、間々挾むに優雅淸絕なる長短歌篇を以てす。一部を購ふて閑窓の下に繙きつゝ、茶と呼ぶに尤も妙ならん

大和田建樹君著

增補 謠曲通解

全一冊背皮金字入
洋裝大判頗美本
正價壹圓拾錢
目方六百匁

其文は自然、其意は幽玄にして、神韵の掬すべきは、謠曲にありと、は大和田先生の持論なり。而して先生が謠曲文學の紹介者として、獨特の手腕を有せらるゝは、世人皆な之を知れり。此書は現存の謠曲を悉皆網羅して、註釋を附し、妙處を示すこと丁寧反覆、而して專ら通俗を主とす。一讀以て神道佛法を學ぶべく、以て歷史故實を暗ずべし、以て詩歌文章を知るべく、以て名所舊跡を探るべし。

狂言註

全壹冊洋製
正價金十五錢
郵稅六錢

歌曲註

全壹冊洋製
正價金十五錢
郵稅六錢

淨瑠璃註

全壹冊洋製
正價金十五錢
郵稅六錢

慶應義塾大學部卒業文學科專攻 奥村信太郎君編

通俗文學汎論

全壹冊洋裝菊判美本
紙數三百貳拾頁
正價金貳拾五錢
郵稅六錢

目次

◉總論○藝術の區分○文學とは何ぞや◉詩○詩の語義○詩とは何ぞや○詩形○詩の分類○空想○詩と他の藝術との關係○詩と理學との關係◉吟體詩◉叙事詩○叙事詩の發生○叙事詩の分類○叙事的叙事詩○抒情的叙事詩○抒情詩と律語と○散文体○神代紀と創世紀と○全章の綱要◉抒情詩○抒情詩の性質○抒情詩○觸興詩○感境詩○抒情詩の分類○叙事的抒情詩○叙景詩○抒情的抒情詩○獨詩○全章綱要◉戯曲○劇の性質○劇の分類◉和解曲○悲壯曲○滑稽曲○有情滑稽曲○劇の發達○俳優論○戯曲の文体○戯曲の性質○戯曲の性質○戯曲の性質

大和田建樹君編

日本歌謠類聚

全貳冊背皮金字入
紙數壹冊千百頁餘
正價壹冊金六拾錢
郵稅壹冊金拾六錢

目次

上代曲●大歌●童謠●雜曲　中世曲●神樂歌●催馬樂●風俗●今樣●雜曲　近古曲●宴曲●謠曲●小歌●雜曲　近世曲●小唄（本手組、端手組、裏組、隆節、弄齊節、戀慕節、投節、古今節、長唄、端唄）●琴唄●淨瑠璃●地方唄（神事歌、農事歌、馬子歌、工事歌、船歌、漁業歌、祝事歌、踊歌、盆歌、子供歌、流行歌、新）◎附錄●十二段草子●道しるべ●絃歌糸のみさを●謠文詳釋

我國開闢以來二千五百年間の歌謠は載せて本書にあり、時代を以て古今を分ち、種類に依て雅俗を別にし、一讀人をして昭々其沿革を詳にせしむ、大和田先生が之を輯むるに幾星霜の勞苦を費されしかは、曩さに出でたる謠曲通解の一例に於ても推知するを得べし

大町桂月君譯

東洋之大波瀾　日露戰爭未來記

全壹冊洋裝美本
正價金拾八錢
郵稅金四錢

我が征清の大勝は圖らずも日本男兒の氣魄と陸海軍備の精鋭とを各國に知らしめ而して各國の文士に我日本の國威を歌はしむるとなりぬ。此書英人モリス氏が敵を露國として我武勇を歌ひしもの海に陸に連戰連勝向ふ所敵なきの光景宛として目睹するが如し。

43/6/93

7

水鳴